
ええじゃないか そのに

とりえなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ええじゃないか そのに

【Nコード】

N2590E

【作者名】

とりえなし

【あらすじ】

ええじゃないかの続編です。前作の内容（変人達の集まる高校での日常）に加え、ラブコメ的要素が追加。一日一話毎日更新。文章量が少なめなので、物足りなかったら前作も読んでね！

二度目のぷろろーぐ（前書き）

ええじゃないかの続編です。登場人物等は前作を読んでくれるとわかります。わからなくてもなんとかなる小説なので、面倒な人はそのままどうぞ。

二度目のぶろろーぐ

「……あー、旦那。夏休みも終わりだな」

「そうだな。何か楽しかったことはあったか、義人？部活がなかったお盆のことだが」

「コミケ行ったな、イッシーと」

「……コミケとやらが何なのかは聞かないでおく。嫌な予感があるし。他には？」

「三時に起きて」

「待て。まずその前提がおかしい」

「2ちゃんねる見て」

「いつも通りだな」

「ゲームやって」

「頼むから法には抵触しない範囲でやってくれ」

「七時に寝る」

「……お前の将来が本当に心配だ。ニートになるなよ？」

「それはともかく、旦那。なんでうちの高校は、二期の開始が八月二十五日なんだ？」

「進学校だからだろ。一応」

「普通、始業式は九月一日だろ。おかしくね？」

「文句は校長に言え。あの無能校長は実績上げるために必死になつてるからな。俺たちの都合なんて知ったこっちゃないだろ」

「さりげなくひどいこと言ってるぞ、旦那」

「夏休みが終わったなら、三週間後に学園祭か……忙しくなるな」

「それが終われば新人戦だ。九月はイベントが多いな」

「まずは課題テストから始まるわけだが、義人は夏休みの課題終わったか？」

「……今日は夏休み最後の部活だしな！全力で泳ごう！」

「今の間から察するに、つまり終わってないわけだな」

「夏休みに宿題なんて出すんじゃないよ！」

「きれんな。キレイやすい十代」

「あんな量終わんねーよ！うわあああん！」

「泣くな。みっともないゆとり世代」

「変な俗称をつけないで頂けませんか！？」

「気にするな」

「気にするわ！」

「まあ明日から新学期だし、気を引き締めていこう」

「唐突にまとめるなよ！？」

この物語は、変人率が異常値にある北高での愛と笑いに満ちた物語（一部誇張あり）になる予定である。

第一話 新

校長の長話（ほとんどの生徒が聞いていないのによくしゃべる）が大半を占めた始業式も終わり、俺たちのクラスは教室に集まって、わいわいがやがやと雑談をしていた。本来ならホームルームが始まってもいい時間帯なのだが、担任の健三さん（文の才能に満ち溢れているのに、その才能を有効活用する気がない駄目人間。反面教師という言葉がしっくりくる変人の代表格）が例によって遅刻している（チャイムが鳴ってからしか職員室を出ようとしない）ためである。……この状況になれてしまった俺たちは敗北者なのだろうか。

「はい、席についてくださいね」

などと考えているうちに健三さんがやってきた。遅いですよ。

「センサー、ここにいてことはサマージャンボは駄目だったんですか？」

そういえば夏休み前に夢見がちなことを言ってたな。

「うるさいです黙りなさい！」

大人げねえ！

「今回は別の可哀想な人に分け与えたんです」

「何を？」

「高額賞金の当選権をです」

要は外れたんだな。妥当なところだろう、うん。

「今日は皆さんに新しいお友達を紹介します」

ここは小学校ですか。

「面倒ですので本人に出てきてもらって自己紹介してもらいましょう。どうぞ」

前置き短っ！そこはせめて、ざわつきが収まるまで待とうよ！

ガラガラと教室のドアを開けて現れたのは、女子だった。清水を筆頭に一部の男子から歓声が上がる。

「親の仕事の都合で転校してきました、石川辰美と言います」

……ん？どこかで聞いたような……？

「趣味は繁華街をぶらぶらすることです。豊橋市には知り合いが少ないので仲良くしてくださいね！」

「するぞー！美少女は大歓迎じゃー！！もういつそむしろ健全な関係でいいんで付き合ってください！」

うるさいぞ清水、黙ってくれ。俺は今、大切なことを思い出している気がするんだ。っていうか「でいいんで」ってどういうことだ。本来はどんな関係を望んでたんだお前。

「何か質問はありますか？」

こう言うのって普通教師が言うものだと思うんだが……健三さんに司会進行を期待しても無駄か。さっそく読書中（草莽枯れ行く）で自己紹介を無視してるし。最低だな、あの教師。英にもっと興味を持てよ。……それはともかく、名前だ、名前……。

「出身地はどこ？」

「神奈川県茅ヶ崎市です」

……茅ヶ崎？

「知り合いが少ないって言ってたけど、少しはいるってこと？」

……まさか。

「います。深い関係の人が一人、しかもこのクラスに」

この発言にクラス全体がざわつく。

「どうした旦那、顔が真っ青だぞ？悪いものでも食ったか？」

「……義人、助けてください」

「>世界の中心で愛を叫ぶくか」
セカチュー

「誰？誰？」

「俺か！？」

「落ち着いてください。その人の名前は」

案の定、転校生石川辰美は俺の方を見てこう言いやがった。

「なおくんこと三井直樹、私の幼なじみです！」

第二話 飯事

自己紹介は終わったものの、放課後になってもクラスのざわつきは収まらなかった。今は俺の周りに義人しかない（転校生、石川辰美にクラスの大部分が群がっているため）が、監視されているため部活に行くことすらできない。そんな状況で一人先に部活に行かないでいてくれる義人はいいやつだと思う。俺の不幸を間近で楽しんでいる可能性も否定できないが。

「しかし旦那に女子の幼なじみとはな……そんなベタなものが実在したのか？」

「……義人は知ってるだろ。俺がガキの頃に引越してきたの」

「ああ。その後は俺とほとんど一緒に過ごしてきたから、旦那と女子との交流が少ないのも知ってる」

「数が少ないのはその前からだ。なんか知らんが女子に避けられていたからな」

「そこら辺は俺と旦那の認識が違うから置いておくとして……その数少ない女子の知り合いがあの子と保護者ちゃんなわけか」

「……そうだな」

「で、その幼なじみと再会して表情が曇ってるってか絶望感に満ち溢れてるのはどういう理由だ？」

「……お前にはないだろう。ままごとで生のじゃがいも（皮剥かず、芽も取ってないやつ。ちなみにじゃがいもの芽には毒がある）を食わされて三日ほど寝込んだ経験が」

「ドンマイ、旦那」

あ、目から水が。

「……お前にはないだろう。ままごとで泥団子を食わされ（前回の教訓から断つたのに無理やり）、腹を下した経験が」

「ファイト、旦那」

あ、やばい。目から出てる水の量が増えてきた。

「……お前にはないだろう。引越す日にまでままごとに付き合われ、薔薇（茎つき）を食われて口の中が血だらけになった状態で車で移動した経験が」

「薔薇は食用にされることもあるぞ。でも頑張れ、旦那」

……声出して泣きたくなってきた。

「さあ懺悔の時間だ、三井」

「清水は懺悔の意味を知っているか？懺悔とは罪悪を自覚し、これを告白し悔い改めることをいうんだ。俺は罪悪を感じていないから無関係だな」

主に悲運を感じているが。

「何気に可愛い知り合いが多い理由について弁明を聞こうか」

「俺って運が悪いと心の底から思っている」

「はあ？」

いや事実だし。

「もうすぐ女子の質問攻めも終わるようだ。そうしたらお前にも質問がいくだろうから、正直に答えろ」

「どこにそんな義務がある」

「義務はないが、答えない限り帰ることはできんぞ」

「脅迫か」

「クラスの総意だ。恨むなら多数決の民主主義国家を恨め」

なんてクラスだ。そして民主主義国家はなんてことを考案したんだ全く。ぶんぶん。

「……旦那、気持ち悪いぞ」

俺も自覚してる。ただ心に、もはやそれを気にする余裕がないだけだ。

第三話 質問会

俺と幼なじみの転校生、石川辰美は並んで椅子に座らされていた。……少しばかり詳しく言うと、俺に関しては後ろ手に椅子に括り付けられていた。何これ？今から俺は死刑執行でもされるのですか？清水の様子を見るとあながち冗談でもなさそうだから困る。

「るーるる、るるる、るーるる、るるるるるるるーるー」

「では公開合同質問会を始めます」

「なぜに公開合同質問会のバックミュージックが>徹子の部屋<！？」

「……ははは、変わった高校だね……」

「変わってるとかいうレベルじゃない！まず俺を縛っているこの紐をほだけ！」

「被告人、三井は黙りなさい」

「やっぱり俺は被告人なのか！？そんな扱いなのか！？弁護士を呼んでくれ！」

「僕が弁護士代りになつてあげるよー」

「石井、お前……さすがは俺の親友の一人だけあるよ……」

「じゃあ聞くけどー、石川さんと一緒に寝たつていう情報があるんだけどー、事実だよなー？」

「訂正だ！お前なんて仲間じゃない！」

どこからその情報を手に入れた！？火に油を注ぐな！四面楚歌にもほどがある！クラスの男子が殺気立つから！清水なんてあれ、殺し屋の目つきだろ！？嫉妬で人を殺せるレベルだよあれは！

「石川さん、答えてください」

「事実だよ？」

「三井、死ね」

「司会（夏目）。このクラスのホームルーム会長を務める。健三さんに仕事を押し付けられたせいで仕事の処理能力等が格段に上昇した

苦勞人。最近彼女に振られ、今は独り者らしい！感情的になるな！そんな会じゃないだろ質問会は！？」

「でも事実だよ、なおくん？」

「なおくんって何だ？旦那？」

「義人、ニヤニヤしながら聞くんじゃない！それと石川さん、なおくん言うな！恥ずかしいから！」

「昔はそう呼んでたじゃん」

「昔は昔！一緒に寝たのも、幼稚園児のお泊り会みたいなもんだから！」

「えー、お互いの家で二人きりでも……」

「黙らっしゃい！あと石井！覚えてるよ！？」

「えー、事実だったじゃんー」

「言い方ってものがあるだろう！？」

「えー、では別の質問に移ります」

「もう終わりにしない？」

「はい、深谷君」

「俺の意見は無視ですか！？」

あの司会、都合の悪いことはとことん却下するらしい。

「三井は石川さんのことをなんて呼んでたんだ？」

「ノーコメント」

「タツミちゃん、かな」

「言わなくていいから！？」

なんて恥ずかしい。おのれ、過去の俺は何をやっていたんだ。石川さんって呼んどけよ。馬鹿野郎、過去の俺。

「それではこれから、二人はお互いに>なおくん<、>タツミちゃん<と呼ぶように」

「横暴だ！！」

なぜ司会にそんな権限が！？

「いいよ。そっちの方が呼び慣れてたし」

「ではよろしいですね」

「よろしくないよ！俺の話聞いてた！？」

「……私もその方がいいな」

「よろしいですね」

「……せめてタツミで勘弁してください」

「よろしい」

怖えよ、夏目。女子に甘いよ。そして人の不幸を玩もてあそび過ぎだよ。

第四話 関係

「では質問を続けます」

「……勝手にしてくれ」

どうせ止めても無駄なら早く終わらせよう。いつ終わるか見当もつかんけど。

「質問のある人、挙手！」

「……はい！」

……多いなー。そのやる気を授業の時にでもまわしたらー？

「では、加藤さん」

「二人の関係は、ただの幼なじみなの？」

「ただの幼なじみ。もしくはそれ以下。俺が引っ越して以来、会ってなかったし」

年賀状を数年ほど出して、それ以来は手紙での交流も無くなったからな。

「次、伊藤さん」

「石川さんはどうしてすぐに、このクラスに三井君がいるってわかったの？」

「この高校になおくんがいるってことは知ってたから。同じクラスになったのは偶然だけど」

「それならどうして同じ高校に転校してきたの？」

「まず、うちと直君のお父さんの会社が同じでね、そのお父さんが同じ工場に転勤になったの。それでこの高校が、豊橋で一番の進学校だから編入試験受けたら受かったってわけ。親同士の交流はあったから、それでなおくんもこの高校だって知ったわけ」

「つまり全くの偶然だな」

「僕としてはー、三井にはなぜ知らされてなかったかの方が気になるなー」

「もう交流してないから、親が知らせる必要がないと判断したんだ

る」

最近母さんが妙に嬉しそうにしてたのはこれか。納得。まあ本来、知らされる必要もなかったしな。奴があんな自己紹介しなかったなら。

「どうしたの、なおくん」

「……今更ながら、お前がすべての元凶だと理解したよ」

「……………」

「次の質問は？……兼子」

「石川さん、恋愛経験は？」

「男子と付き合ったりしたことはないかな」

「次、岡田さん」

「部活は何やってた？それでどこに入るつもり？」

「水泳部だったし、ここでも水泳部があれば入ろうと思うんだけど

……もしかしてプールない？」

「いや、あるぞ。校舎から歩いて五分から十分のところに」

「それは遠いね……」

「ちなみにー、このクラスには四人水泳部がいるよー」

「そうなの？」

「うんー、県大会入賞の浜ちゃんにー、そこの杉田と僕ー、それと

三井も水泳部だよー」

「そうなの！？」

「……ああ」

「なら入る！」

知り合いがいるなら入るのか。現金なもんだ。別にいいけど。

「他に質問は？」

「三井君は彼女いるんですか？」

転校生と関係ねえ！

「いないよー」

「石井！勝手に答えていい！」

いないけど！

「そうなの！？なおくんにはてつきりもっているかと……」

「悪いか！？どうせ俺なんて十六年生きてきて彼女いねえよ！」

なんで転校生の質問会で、こんな泣きそうになってるんだろっか、俺。

「三井君って杉田君と石井君との三角関係なんですよね？」

「なぜそんな展開に！？」

「そうなの！？」

「タツミも信じるな！そんなわけないだろうが！」

「三井君が攻めと見せかけて受けなんですよね！？」

「話を聞け腐女子！義人と石井も言ってるやれ！」

こつというのは本人たちで否定するのが一番だ！義人、石井、さあ大きな声で！

「……黙秘します」

「……僕からは何も言えなくてー」

「なぜ！？黙秘する意味がわからない！否定しろよ！？貴様らやっぱり俺の敵だ！畜生！」

「直君がそんな道に走ってたなんて……」

「俺の言葉に説得力というものはないのか！？」

喧噪の中、質問会は終了したのだった。そしてこれを機に、俺の変な評判も広がることに……。

登校拒否したい。

第五話 親友

「でもよかった。なおくんが非倫理的な道に走ってなくて……」

「十年ぶりに会ったとはいえ、一瞬信じかけたお前の神経を疑う」

今俺たちは、プールまでタツミを案内している。もともと今日も部活はあるため、案内はついでのだが。……すっかり行くのが送れてしまったので、小倉さんがどうしているかが心配なところだ。

「遠いね、プール」

「そうだねー。校舎から歩いて五分強でー、駐輪場からだとは十分は余裕でかかる距離にあるからねー」

「そんなに広いんだ……」

「なにしろ公立普通高校では、日本で二番目の広さらしいからな」

「すごいねー。緑もきれいで……うん、いい学校かも。面白い人も多みたいだし」

……面白い人？奇人変人の間違いだろ。

「ところで、水泳部の人たちのことを教えてくれない？」

「構わんぞ」

「じゃあまずその人！」

その人……義人か。

「こいつの名前は」

「名前は杉田義人だよー。二次元オタクにして運動、勉強のレベルは上の下ー。彼女は生涯一度もできたことがないけどー、告白されたことが中学の時に二回ー。男女問わず話しかけて仲良くなるしー、面倒見もいいから結構もててみたいだねー。ただし付き合ったりしたことはないみたいだねー。理由は二次元に彼女がいるからだつてー。この辺は僕と同じだねー。それとー、小さい頃から家事全般を親に叩き込まれているからー、すぐにでも一人暮らしができるほどに能力値が高いよー。血液型はB型で星座は乙女座ー。三井の最も親しい友人だねー」

「詳しい！俺について詳しすぎるぞイッシー！プライバシーという概念が君には欠如しているのかな！？」

「……ははは、変わった人だね……」

「どっちがだ。どっちもか。（自己完結）」

「ちなみにこのプライバシーを無視している男が、石井。色々人の噂や裏話をよく知っているから、味方にすれば心強いが敵にまわしたらこれほど厄介なやつもない。基本的にはいいやつで、運動神経もいいし頭もいい」

「血液型はB型で、星座は蟹座だよ。それともちろん三井の親友」

「その情報に需要はあるのか」

「血液型と星座で。占星術にでも使うのか。」

「でも、親友のところを否定はしないんだね、なおくん」

「……まあな」

間違いなくこの二人は親友だ。そこはどうしても否定できない。恥ずいけど。

「あとうちのクラスにはもう一人、浜ちゃんっていう速い奴もいる」

「今はもうプールに先に行っちゃったけどね」

「今頃は小倉さんの地獄の特訓を受けていることだろう。ご愁傷様。」

「見えるか？あそこがプールだ」

「みんなは泳いでいくの？」

「そりゃ水泳部だし」

「毎日毎日、四キロも五キロも泳ぎたいとは思わんが。」

「見学していい？」

「そうでなければ何のためにきてきたんだよ」

「うーんと、十年ぶりに再開した幼なじみと話そうと思ったから？」

「そうか」

「あれ？反応薄いね」

「十年も離れてたら、もう性格も変わって別人になってるだろ」

「そついうものかな？」

「そうだろ」

人は変わるものだ。俺もタツミも思い出の中のきれいなままではないだろう。……そもそも思い出の中でもきれいかどうか微妙だが。

「でも旦那は昔からこんなだったような……」

「こんなんってどんなだよ」

「突っ込み気質で、厄介事に巻き込まれやすい体質」

「……………」

ノーコメントにしておこう。……決して悲しくて言葉が出なくなつたわけではない。きっと。たぶん。おそらく。

第六話 遭遇

「ここが水泳部の部室？」

「ああ。更衣室とかシャワーは中にある」

「もちろん二十五メートルプールだよー」

「部員は何人くらいいるの？」

「今は十二人だったかな。内、一年は八人だ」

「女子の人数は？」

「先輩に一人と一年に一人の二人。二人とも地区では入賞レベルで、石川さんが入れば三人になるよ」

「へー。少数精鋭なんだね」

「やつぱりー、女子だと高校になってまで水着姿になるのは恥ずかしいみたいだねー」

「それだけじゃないんだけどね、女子は」

「何が？」

「うつん、何でもない」

話を打ち切ってタツミが部室の扉を開けようとするが、制止する。
「一つ忠告を忘れていた」

「何？」

「……顧問の先生が怖いから、心しておくように」

「怖い？暴力をふるうとか？」

「いや、そんなことはないが……とにかく怖いから気をつけろ」

「………？まあいいや」

よくわかっていない表情で、再び扉を開けるタツミ。まあ会えばわかるだろう。一応忠告はしたし。

「失礼しまーす」

練習はすでに始まっており、選手は泳ぎ、顧問かみもんとその他一名はプールサイドで指示を出していた。
……………。

「あつ先輩!!遅かったですね!!」

「……なぜ夏休みが終わったにもかかわらず貴様がいるんだ……」
その他一名こと保護者(今年受験生の後輩。夏休みには見学がてら、水泳部のマネージャーの仕事をしてくれている)が寄ってきた。
小倉さんは浜ちゃん(すでにグロッキー状態)の指導でこちらに気づいていないようだ。

「まだ中学校は夏休みですよ。八月二十五日こんなひに始業式なのはこの学校くらいじゃないですか?」

「おう、そうだった」

まだ八月だったのをすっかり忘れていた。始業式早すぎだろ。決定した校長なんて水虫になればいいのに。

「そんなことより……」

「ん?どうした?」

「誰ですかその女」

……途端に保護者の声のトーンが下がり、周辺の空気が急速に冷える。な、何なんだこの空気は?八月だというのに冷汗が出始めた

……?

「て、転校生だ」

なんでもってるんだ、俺。先輩の威厳を見せつけないといかん。

「そんなことどうしてお前に関係が」

「いいから答えてください」

「……ハイ」

「おおつと旦那、保護者ちゃんに押し切られたーっ!」

「ええー、ここは女子には弱い三井の特徴がよく出てますねー」

うるさいよそこ二人。何実況してんだお前ら。

「で、先輩。どなたですって?」

「転校生のタツミだ」

「旦那が心の中でツッコミを入れたことで、平静さを取り戻したようですね」

「やはりー、天性の突っ込み気質と言ったところでしょうかー」

うつさいお前ら。さっさと着替えて泳げ。

「フルネームは？」

「石川辰美だ」

「……どうしてあつたばかりの転校生を名前で呼んでるんですか……？」

保護者、怖いよ。小倉さん（ヤクザ顔で筋骨隆々）並みのプレッシャーだよ。

「……いや、タツミとは幼なじみで」

「始めまして。私、なおくんの幼なじみで石川辰美といいます」
ナイスカットインだ、タツミ。あと少しで立つてすらいられなくなるどころだった。わが後輩ながら恐ろしい女よ。

「……なおくん……？ 馴れ馴れしい……」

また冷気が！？

第七話 細胞

現在、局地的に地球寒冷化現象進行中。

「昔、直君って呼んでたから。今日のクラス会議で承認もされたし」
「誰にですか」

「クラスみんなと直君に」

「私は承認してません!」

そりやお前はうちのクラスじゃないし、関係ないな。

「ところで、あなたの名前は？」

「……話を逸らさないでください」

「名前くらい教えてもいいだろ」

「先輩は黙っていてください」

「ハイ」

イエスマンとは今の俺のようなものをいうのだろう。武部元幹事長のことを、俺はもう二度と笑えない。

「旦那弱い!一撃必殺効果絶大!」

「女子になにかトラウマでもあるんでしょうか」

「……あるよ。悪いか。」

「古木です。今、中学三年の受験生です」

「へー、受験生かあ。私もつい最近編入試験受けたから、受験の辛さはよくわかるよ」

俺が二人に内心で突っ込んでいる間に、保護者の自己紹介が済んだようだ。

「それで、先輩とはどういったご関係で？」

「ただの幼なじみだって。ところでさあ」

一呼吸おいて、タツミが尋ねる。

「なおくんのこと、好きなの？」

「……な、何を言っているんですか!？」

「そうだぞ、保護者が俺のことを好きかわけがないだろう（失笑）。

むしろ先輩なのに侮られてるくらいだからな。嫌われてぐぎゃあ！？」

「……先輩のそういうところは嫌いです」

否定しないのなら、足の小指を思い切りよく踏みつけなくてくれるかな！？小指の細胞、70%が死滅（残り30%の大半は痛みを感じる細胞。つまり痛みは最大級で持続中）したんじゃないか、これ！？涙が止まらない！！

「旦那は愉快だな」

「そうだねー」

そんなこと言ってる暇があるなら助けたまえ！！痛くて声すら出ない状態だから察しろ！！

「……ん？何か旦那がメッセージを送ってるぞ」

さすが義人！俺の危機を察してくれるのはお前だけだ！

「なにになに？」「ハンバーグの合挽きは7：3に限る」？俺もそう思うぞ」

そんなメッセージ送ってねえ！！俺は合挽きにそんな情熱を抱いてないから！！

っていつか小指やばいから！早く気づいて！お願いします神様仏様！！（涙目）

「……んー？三井がまたメッセージを送ってるみたいだねー」

さすが石井！お前の情報収集能力なら、これくらいいけないと信じてたよ！

「なにになにー？」「この前撮った健三さんの水着姿の写真（悩殺ポーズ入り）を分けてくれ」ー？いいよー」

そんなメッセージ送ってねえ！！そんな写真撮ってたの！？ちょっと見たい！小指が無事なまま、生きてこの場を切り抜けられたならだけど！！

「あはは……。古木さん、心配しなくても大丈夫だよ」

「……何がですか」

「私、今はなおくんにそういう感情を抱いてないから」

「……そうですか」

……おお、小指から重さが減った。助かったよタツミ、ありがとう。

「まあ、>昔くは別だし、>これからくどうなるかはわからないけどね」

「………!!」(ぐりっ)

ぎゃあああああ!!..!

第八話 救済

「……ん。おい三井、その女子は誰だ」

ようやく小倉さんが、こっちで起こっている現状に気付いたらしい。

「小倉さん、こちら、転入生で、一年の、石川さんで、入部希望、です」

「どうした？言葉が途切れ途切れになっとるぞ。涙目のようだが、怪我でもしたか」

その通りです。しかも現在進行形で怪我が酷くなってるんですが、もう小指の細胞の90%が立ち直れない傷を負ったに違いない。だから早く足どけてください保護者さん。

「……顧問の先生ですか？」

おおびびってるびびってる。小倉さんもあまりプレッシャーを与えてやらないでください。素人ですから。一般人ですから。

「ああ、小倉という。体育教師をやっとる。兼、水泳部顧問だな」

「よろしく願います」

「ああよろしく。そこに掛けてくれ。入部は決定でいいのか」

「はい」

「それなら入部届けに記入してもらおう」

「わかりました」

小倉さんに気押されず、しっかりと答えるタツミ。あんたは立派だよ。そして保護者。黙って立ってないで練習を見に行つてやれ、俺の足を踏むのを止めて。土下座で止めていただけるのであればいくらでも、むしろ喜んでさせて頂きますのでどうかご検討ください。願います。

「古木、浜口たちのメニュー続けさせる。手を抜くようなら最初からやり直したと伝えとけ」

それを聞くと、保護者はしぶしぶ足をどけ、プールサイドへと去

っていった。若干こちらを気にしながら。

……そ・れ・に・し・て・も。

神だ！小倉さん神だよあなた！俺を救ってくれたのは、キリストでもブツダでもなく小倉さんという名の神だった！

「……おい三井。何をやっ取る」

「土下座です」

有言実行は俺のポリシーだ。今なら喜んで小倉さんの靴の底を舐めることができるだろう。それほどまでに足の痛みはやばかったのである。今もまだ痛いけど。

「……何があつたのかは知らんが、不気味だから止める。それとさつさと着替えて泳いで来い。遅刻したから時間もないだろう」

「仰せのままに」

なんだってやりましょう。ただし、キックが打てるか自信ないので悪しからず。理由を聞かれても正直に答えられないのが痛い。保護者に報復されそうだし。……告げ口はよくないよね！そういう理由にしておこう！

「三井が壊れてるねー」

「旦那は体と心に多大なダメージを受けていたみたいだから。この数分でかなりヘタれてしまったようだ」

「やーいへたれへたれー」

やかましい。お前らもさつさと着替えんかい。実況用のその机と椅子も片付けろ。どれだけ用意よかったんだお前らは。

第九話 部員

「浜口信也だ。自慢じゃないが、中学ではインターハイにも出場した。同じクラスだし、うまくやっていこう」

「タツミ、浜ちゃんの身体能力は異常だ。見る、あの胸の筋肉。下手な女子よりあるぞ。鳩の生まれ変わりじゃないかと俺は睨んでる」
「みつちゃん、何か俺に恨みでもあるのか」

恨みなどない。事実と俺の私見を言わせてもらってるだけだ。

「片山です。個人メドレーで大会には出てるから、しいて言うなら背泳ぎが得意かな。よろしくね」

「マサは甘いマスクに高い身体能力。女子の人気も高いらしい（石井調べ）。好きになるなら修羅場の一つや二つ、覚悟しておくことだ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。彼女いるし」

そうだったか。

「……田村。大会登録種目は個人メドレー^{コンメ}。以上」

「田村は水泳部の一年で、石井と一、二を争うほど頭がいい。だから勉強のことは奴に聞け」

「どうして僕じゃ駄目なのー？」

「そついうなら見返りを求めるな」

教えてもらった代償に、噂話の実態を確かめさせるとかどんな拷問だよ。俺はそんな訓練^{ブレ}受けてない。

「俺は松田。種目は平泳ぎだ。よろしくな、石川さん」

「松ちゃんは常識人と見せかけて、すぐに悪ノリするからな。気を付けろ」

物事を面白い方向にもっていかうとするのは、この学校の大半の生徒の習性であるのだが。

「……高城です。女子は少ないから、仲良くやっていきましょう」
高城さんの速さも化け物クラスだ……とは思っけど口にしない。

女子にはできるだけ関わらないのが、日々を穏やかに過ごすための鉄則だ。

「あまりにひどいと旦那は突っ込むけどな。女子にも」

「なおくんってそういうポジションなんだね」

「あとは、顧問の先生が小倉さんだ。あんな怖い顔して筋トレマニアだが、水泳連盟では結構なお偉いさんらしい。高校球児だったのに」

その情報を石井に知らされた時は、野球部顧問の先生が急激に憎くなったよ。いや、小倉さんはいい先生だけどね？ いかんせんメニユーがきつすぎるんだよ。

「……とまあ、メンバー紹介はこんなところだな」

「せっかくだからー、親睦を深めるためにあれしよーかー」

「あれってなに？」

「そうか、石川さんは知らんよな」

「旦那、教えてやれ」

ああ、そうだな。

「タツミ、今からみんなで遊ぶんだが、お前もやるか？」

「うん。なにで遊ぶの？」

「>エロ大魔王くだ」

「……………」

「……はっ！？ 違うぞ！？ そんないかわしいゲームじゃないからな！？」

俺から距離をとるタツミにそう言葉を投げかけるも、泣きそうな目で俺を見つめてくるだけだった。ジーザス！！この単語を使うべきではなかった！！

「旦那、気でも触れたか？」

「みっちゃんがセクハラをしようとするとはな……」

「へーんたーい」

「……嫌がらせも大概にすべき」

「先輩、最低ですね。石川先輩は先輩から離れた方がいいですよ。触れられたら、妊娠させられます」

「お前らそんなに俺が嫌いか！？ フォローしようよ！ してくれよ！」

いつもみんなで作ってるゲーム（大富豪の発展版。詳しくは前作を読んでください）なのに裏切るなよ！ っていうか息ぴったりだな
おい！！

その後、皆の妨害工作を受けながらも、距離の空いたタツミに事の次第を説明したのだった。

……お前ら、いつかこの屈辱は返してやる。

第十話 権利

「先輩、私との約束覚えてますか」

タツミが他の部員から質問攻めになっっている中（エロ大魔王は俺が鬱になったため中止。タツミには一応ルールを説明した）、突然保護者が話を切り出してきた。

「約束？ナンノコトカナ？」

「……先輩、わかっていて言ってるでしょう？お菓子作り勝負の件です」

ああ、わかってたよ。お菓子作り勝負での景品の＜俺一日使用权＞（提案者石井）だろ。……あの直後は何をさせられるのか怖くていつそ忘れてくれないかなーとか思いながら過ごしていたくらいだからな……。お盆休みになっても何も言わないから、しめた、保護者あの約束を忘れてるとか、でも約束は守るべきなのかとか葛藤してここ数日も過ごしていたしな。ある意味では保護者が覚えていてよかったよ。別の意味ではものすごく鬱だけど。

「……で、いつ、どこで何をすればいい？」

手短なので頼む。……といっても＞一日＜使用权だし、無駄な抵抗だろう。

「では、発表します！」

「テンション高いな」

「高くもなりますよ！ずっと貯め込んでおいたんですから！」

「なぜその貯め込んでおいた使用权を今になって使うんだ」

「……本来、もっと特別な日に使う予定だったんですけどね……」

「特別な日？」

「そこはスルーしてください」

「ならなぜ予定が狂ったんだ」

「……嫌な予感がするんですよ、あのひい石川先輩には」

「……なんだって？」

声が小さくて聞きとれん。ワンモアプリーズ。

「なんでもないです。杞憂かもしれませんし……」

保護者にしては歯切れが悪いな。

「そんなことはどうでもいいんです！それより明日！駅西口！十時に集合です！いいですね！」

気合入ってるな。何をさせるつもりか知らんけど。

「もし予定があると言ったら？」

「キャンセルしてください！」

わー、即答ですよ。さらば俺の予定（図書館で、藤沢周平著＞用心棒＜シリーズ全てを読み返す計画）。こんなことなら借りとけばよかった。

「……それで、明日は何をするつもりだ」

肉体労働は勘弁願いたい。拒否権ないけど。

「……そうですね」

なんだその間は。

「明日教えます！」

もしかして考えてないのか。だとしたら、なんて場当たりのな権利の使用だ。もったいない。……使用される側の感想じゃないな、これ。

「旦那、帰ろうぜ」

「ん？ああ」

すでにみんなは帰り支度を済ませていた。俺としたことが迂闊だった。

「保護者ちゃんと何を話してたんだ？」

「あの件だよ。お菓子作りの」

「……そうだった。旦那一日使用权、使ってなかったな」

地雷踏んだ！こいつ、忘れてたのに！迂闊すぎるぞ俺！

「とりあえず考えとくから、忘れてたら、また言ってくれ」

そのまま忘れてくれ。義人なら別にいいから。

第十一話 嫌

下校途中。

「旦那、イッシー、しりとりしようぜ」

「構わんぞ」

「いいよー」

「よし、しりとりのでりくからだな」

「待て、旦那。普通のしりとりじゃ面白くないだろう」

「そうだねー」

「だったらどうするんだ？」

「> あつたら嫌なものしりとりくにしよう」

「……意味がわからん」

「文字通りあつたら嫌なもののみ使用できるしりとりだ」

「よくわからんな」

「じゃあ、俺、イッシー、旦那の順でやるから、俺たち二人のを聞いて理解してくれ」

「おっけー」

「わかった」

「しりとりのでりくから……> 両津勘吉殺害く」

あつたら嫌だ！こち亀の終わり方がそれだつたら暴動起きるわ！

「次は僕だねー。> 医療事故くー」

そついうのにしとけよ義人！

「こ……> 小島よしお都知事く」

「> 上司がカエルく」

文章かよ！何でもありかこのしりとりは！？

「> ルパン百四十五世くー」

どんだけ未来！？

「い……> 医師免許剥奪く」

「> 鶴の仕返しく」

そんな童話嫌だ!!

「>清水VSプレデター<」

もはや清水は人外扱い!?

「た……>たらい回し<」

「>清水VSプレデター2<」

シリーズ化!?

「>津波<」

「み……>未来予知<」

あつたら人生つまらなくなるということで。

「>朝鮮帝国<……ああ、これは北朝鮮が同じようなものだから駄目か」

「危険な発言はやめい!」

「じゃあ>痴漢冤罪<で」

「>一万年と二千年前からあがいてる<」

あがきすぎだよ!あきらめろ!

「る……>ルール無断変更<」

「>ウツチャンのウリ!<」

逆はあつたけどね!

「>リングとくさやのソテー、納豆ソースかけ<」

聞いただけで気持ち悪くなりそうだ!

「……>健三さんセミナー写真集inワイキキ<」

あつたらちよつと見てみたいけど、実在したら引くこと間違いなし。

「>気 がいに刃物<」

「だから危険な発言は禁止!」

危ないだろうが!色々と!

「>のび太君東大合格<」

不正だ!絶対ドラえもんの道具使ってるよ!

「……なあ、切らないからそろそろ止めるか」

「じゃあ三井の負けだね!」

別にいいが。

「旦那は罰ゲームとして、健三さんが言いそうなことくをものまねして言いたまえ」

難しいな。

「……………」

「旦那、準備はいいか」

「ああ」

「三、二、一、はい！」

「生きるのも面倒くさいです。でも死ぬのも面倒くさいので何もしませんが」

「三井、それ健三さんの新任時代よく使ってたセリフだよー」

マジで!？

第十一話 嫌（後書き）

最近ギャグパートが少ないですね……申し訳ないです。

第十二話 破壊

保護者に付き合わされることとなった土曜日、俺は待ち合わせ場所に向かっていた。ここからならあと五分でつく距離で、待ち合わせ時間まであと十分だから、五分前にはつく計算になる。やはり人として五分前行動を心掛けたいよな、うん。ガキっばい？ほっとけ。……しかし何をさせられるのか未だにわからんからな……」

できれば、一日バイトさせられて稼いだ金は全額没収などという展開はご免こうむりたい。拒否権なんてないけど。

「先輩！さあ行きましよう！」

「……その前に何か言うことはないのか貴様は」

「少し遅れましたか？」

「三十分は少しとは言わん」

なんだこの罰ゲーム？駅でぼーっと突っ立ってる高校生がいたら普通注目受けるだろ。同世代の奴らがこっち見て、くすくす笑ってやがったぞ。あれは馬鹿にされてたな、間違いなく。

「別にいいじゃないですか」

「時間くらい守れ。お前が決めた時間だろ」

「そんなことはどうでもいいんです」

それをどうでもいいか判断するのは待たされた俺だ。しかし今日は奴隷的身分のため自粛する。

「先輩？どうかしましたか？」

「……いや、自分で奴隷的身分とか思ってしまった俺って一体……」

「先輩が私の奴隷……」

「よくよく考えたら何の拘束力もない、ただの約束事なんだよな」

「……………」

「そんなわけで、優しい保護者は変な命令は出さないよな？」

「……………」
「保護者？」

「……………」
何この沈黙？俺の嫌な予感センサー（的中率に定評あり）に反応があるんですけど？

「決めました」

「……………」
何を？」

「先輩は今日一日、私のことを崇めて呼んでください！！」
何その無茶振り！！？

「……………」
保護者様？」

「喧嘩売ってるんですか」

まあ確かにこの呼び方じゃ崇めてるとは言い難いな。PTAへの手紙じゃあるまいし。

「なら具体的にはどう呼べばいいんだよ……………」

「仕方ないですね。具体例をいくつかあげてあげますから、その中から選んでください」

「よしきた」

「まず、>瑠璃お嬢様<」

「質問いいか？」

「なんですか？」

「お嬢様はわかるとして、瑠璃ってどういう意味？」

「先輩は可愛い後輩の名前すら覚えてないんですか死ねばいいのに」
「語尾に罵倒がついてるぞ！？」

「死ねばいいのに先輩は可愛い後輩の名前すら覚えてないんですか」
「俺が問題にしたいのは、罵倒の言葉の位置についてじゃないから！前に着いたら俺の名前が>死ねばいいのに<みたいじゃん！」

「私の名前は古木瑠璃です。脳裏に刻み込んで永遠に忘れないでください」

「大げさな」

「で、どうぞ」

「？」

「だから、瑠璃お嬢様と呼んでください。執事風ならなおいいです」

「……崇めつつ？」

「その通りです」

「……やるしかないのか。やるからにはベストを尽くす、これ常識。というわけで保護者の顔をじつと見つ、言い放った。今の俺なら執事喫茶のバイトも余裕でこなせる……はず。」

「瑠璃お嬢様」

「……………！」

「どうかなさいましたか瑠璃お嬢様？」

「ちょ、ちよつと待ってください先輩！」

「顔が赤いですよ？熱でもあるんじゃないでしょうか、おでこを出してください」

「な！？」

「どれどれ……ふむ、熱はないようですね」

「はふう……」

機能が停止でもしたか？動かなくなった。

「瑠璃お嬢様？」

「……………」

返事がない。ただの抜け殻のようだ。

「保護者。このままなら俺帰るぞ」

「……先輩、やっぱり執事キヤラはやめです。破壊力ありすぎです破壊力って何がだ。確かに俺の尊厳とか、大切なものが色々と破壊された気もするが。」

「なら呼び方はいつも通り保護者で」

「第二案にします」

「……まだ案があるのか、呼び方一つに。」

第十三話 主人

「では第二案です」

「……そうか」

もうどうとでもすればいい。

「第二案は>ハニー<です！」

「また変な要求を……」

「ではどうぞ！」

「はにー」

「もつと気持ちをこめてください！」

「はにー」

「もつと！」

「ハニー」

トースト。

「……何か別のことを考えてませんか？」

「甘ったるいパンを想像して、食いたいという気持ちをフルに籠めていた」

「またふざけてるんですか」

失敬な。俺は基本、真面目なのに。今はふざけていたことは事実だが。

「そもそも、どんな気持ちを込めればいいんだよ」

「そ、それは……その……」

「どうかしたか」

何か気に障ることでも言ったか、俺？

「第三案です！」

強引に変えやがった！

「第三案、>瑠璃<です！」

「それでいいのか？」

まんまじゃないか。

「それでもいいです！さあ、行きましょう！」

「……どこだよ」

行き先すら知らされてないんだが。

「まずは映画館です！」

「……なぜ？」

「なあ保護者」

「………」

「保護者」

「………」

「保護……瑠璃」

「……はい」

「なぜに俺は映画鑑賞をしているんだ？」

しかも恋愛映画を。

「映画館の中では静かにしろって、テロップが流れていたじゃないですか」

それはその通りなんだが。

「……俺が連れてこられる意味はないよな………」

わざわざ一日使用権まで使って一緒に来る理由がわからない。

「友達いないのか？」

「……はい？」

「俺と来るくらいだからな。一人で映画に行くのは嫌だけど、一緒に行く相手もいないってところか」

「先輩じゃあるまいし、友達の百人や二百人いますよ」

スケールでかつ！！

「ならどうしてだ」

「……いいじゃないですか。なんとなくです」

「……？府には落ちんが、でもまあせっかく来たんだ。料金（二人分俺が支払った）ももったいないし見よう。」

「先輩……」

「もう離さない……」

「……好きです」

「……俺もだよ」

そしてキスシーンへ。もちろん映画の話だよ。間違えちゃいかん。いいシーンだな、うん。

「せ、先輩……」

「ほ……瑠璃、どうかしたのか？」

手なんか握って。

「じ、実は私……」

「わかった。トイレにでも行きたいんだなぎゃあ!？」

手が! 手がああああ! !!

「……先輩はムードっていうものを知らないんですか」

何が! ? 何が間違ってたんだ! ?

「もういいです。次いきましょう」

「え? 映画まだ終わってない……」

「行きますよ」

なんだかんだで結構真面目に見てたのに!

「あと三十分はある! 一番いい場面!」

「この映画は色々ありながらも二人がくっついて終わりです」

ネタばれされた! てか君、何しに来たんだよ! ?

「うるさいです。先輩が台無しにするのが悪い。自業自得です」

何が! ?

第十四話 羞恥

映画館を出た俺たちは、近くにあるアクセサリーショップに来ていた。今まで一度も来たことがないことに加え、こういった店は女性客が圧倒的に多いため居づらいことこの上ない。おまけに数少ない男性客も、カップルで来ている客のようで俺の気まずさを助長している。俺だけこの店で浮いているんじゃないか？

「……ということで店から出ていてもいいか？待っててやるから」「恥ずかしいんですか？」

「恥ずかしいな。俺の心臓はノミ並みに小さいんだ。知らなかったか？」

「堂々と開き直らないでください。このチキン野郎」

チキン野郎！？

「……チキンでもポークでもいいから、この店から出させてくれ。こういった店は、女性とかカップルとかが来る場所であって、俺みたいな独り身かつ非モテ男がいるべき場所ではないんだ。だから店から出させてくれ、な？」

「非モテ男ときましたか、この鈍感KY屑男が」

鈍感KY屑男！？

「……でもつまり、ここにいてもおかしくない状況になればいいんですね？」

「そんなことができればいっても構わんが、実際不可能だろ？だから早く外に出させてくれ」

俺の羞恥心メーターが今にも振りきれそうなんだが。

「無理じゃないですよ」

「……保護者、何なんだそのにやついた顔は？いかにも「私いいこと考えちゃいました！」みたいでひどく不吉。物凄く不吉」

「いや無理。だから外に……うわっ！？」

「これで、先輩がここにいっても不自然じゃないでしょう？」

満開の笑みを顔に張りつかせた保護者は、自分の腕を俺の腕に絡ませてきた！

「お、お前何やってんだ！？」

「うふふー、腕組んでるんです」

「そんなことはわかっとうる！」

「は、恥ずかしいのか！？」

「先輩は恥ずかしいんですか？」

「恥ずい！やめれ！」

「ふふー、絶対にやめません」

「こ、こういうことは恋人同士がやることであってだな、そう簡単にやるものではないだろう！？」

「そこですよ！」

「はあ！？」

「こうしていれば恋人同士に見えて、先輩がここにいってもおかしくないでしょう？」

「それはそうかもしれないが、別の意味で恥ずかしくて死ぬわ！」

「先輩は純情ですね」

「初戦俺はチキン野郎だからな！だから止めい！」

「いちいち言ったことを根に持たないでくださいよ。絶対にやめませんよ。命令です」

「なんて傍若無人な！？」

「うるさくしていると余計に目立ちますよ」

「……お前は俺を窮地に追い込むのが巧すぎるだろ……」
後輩に苛められる俺って一体……。

第十五話 買物

「先輩、私たち他人から見たらカップルに見えますよね？」

「……お前がそう見えるように仕向けてるんだろ？……。嫌ならとつと止めて俺を外に出せばいい」

「嫌じゃないですよ！！」

「うわっ驚いた。急に大声出すな。注目されるだろ。手遅れの感がないでもないけど。」

「そうだよな、お前は俺への嫌がらせを日々の糧にしてくるくらいだ。俺の羞恥を存分に見ることができる今の時間が嫌なわけがない」

「……先輩は私をそんな風に見てたんですか……」

「違うのか？」

「今まであれだけ俺を恥ずかしがらせることに頓着してきたんだから、この予想は九割方当たっていると思ってたんだが。」

「……鈍感」

「ん？」

「なんでもないです」

「先輩、この店のアクセサリーはどれもいいと思いませんか？」

「俺、アクセサリーに興味ないし」

「いいと思いますよね！」

強制だよ。

「まあいいんじゃないの？よくわからんけど」

「それでも同意してしまう俺は弱い人間だ。イエスマン三井と呼べばいいじゃない。」

「そ、それですね！」

「どうした？」

「こ、ここにあるアクセサリーを一緒につけられる関係になりたい

「と思いませんか!？」

「……はあ？」

「すまん、話がよく見えん」

「だからですね!ここのを、お揃いで、買いませんか!？」

「……つまり。」

「俺に首輪をつけて所有者にでもなるつもりか!？」

「……どうしてそういう結論になるのか、頭を切り開いて確認してあげましょうか？」

「怖っ!!!」

「だってここペット用のコーナーじゃん!」

「……気が付かなかったですね」

「気づけよ!お前何しにここに来てるんだ!？瞑想か!？」

「でもせっかくだから買いましょう、大型犬用のやつ」

「結局買うのか!」

「使用方法が気になるが、怖くて聞けん!

「……あのですね」

「うん？」

「あの指輪、お揃いで買いませんか？」

「恥ずかしいから止めてくれ」

「……そう、ですか……」

「うむ?なんか落ち込んでるな。罪悪感を感じる……。」

「そんなに欲しかったのか、その指輪」

「指輪自体が欲しかったわけじゃなくてですね、その……」

「ん？」

「こ、この店のが欲しかっただけです!」

「この店の商品が……女子間ではやってるのか？」

「そんなところですよ!」

「そんな気合いを入れて言わなくてもよからう。」

「……仕方がない、そのミサングくらいなら買ってやるっ」

「……え？」

「なんだ？いらんのか？」

「せ、先輩は買うんですか？」

「一見の客と思われるのもあれだし、ミサंगाなら安いしな。買う」
「ならお揃いですね！？」

「いやにお揃いにこだわるんだな。」

「……まあ、買うならそうなる。で、どうする？」

「いただきます！」

嬉しそうな様子からして、保護者の機嫌は直ったようだ。よかったよかった。

「……先輩？どうして三つ買ったんですか？」

「あ？いや、転校祝いでタツミにもやろうと思ってな」

神奈川土産（崎陽軒の肉まん）ももらったことだし、お礼せんと
いかん。

「……………」

「あれ？どうしたほ……瑠璃？顔が怖いぞ？」

あと変なオーラがほとばしっているようにも見えるのは気のせい
か？

「せ……………」

「せ？」

「先輩のバカーツ！！」

「ひでぶ！？」

男の急所を蹴り上げた保護者は、大声で叫んで駆けていった。……
ミサंगाを持っていったところを見ると、気に入ったようなのに
なぜ……。理不尽な……。

俺は泣く泣く前かがみになりつつ帰路に就くのであった。

第十五話 買物（後書き）

とりあえずラブコメパートいったん終了です。次回からはコメディ
ー中心。ラブコメ部分が上手くいつているか作者にはわからないた
め、意見を送ってください。よろしくお願いします。

第十六話 犬猿

土日が明けて月曜日の朝。

「ぐつ もーにん、皆さん」

おはようございます、健三さん。相も変わらず重役出勤とは流石です。もう次の授業の先生が廊下で待っているのに無視するとは、常識人の俺からしたら考えられません。……あ、次の授業は現代文（担当は健三さんと犬猿の仲、藤田先生）だからわざとか？

「実は始業式の日に言っておかなくてはいけなかったんですが、忘れてました。まあ別にいいですね、そんなこと」

教師として反省すべきことが山ほどあると思うんですが。……まあ健三さんだから仕方ない。

「皆さんも知つての通り、三週間後には文化祭、体育祭を続けて行う>北高祭くがあります……が、説明は面倒なので省きます」

おい教師。

「知りたければ次の授業で藤田先生にでも聞いてください」

流石健三さん。授業の開始を伸ばすだけでなく、質問まで丸投げするつもりですか。ただでさえ切れかけてる藤田先生が大変なことになりますよ。……あ、睨んでる睨んでる。

「ですから、適当に文化祭の出し物を考えておいてください。それと文化祭、体育祭実行委員も決めます。今日の最後の特別授業で決定しますので。ではまた後で」

それだけ言つて、健三さんは去っていった。一限目の授業時間は大分経っており、藤田先生が歯を食いしばりながら何か言いたそうにしているが、堂々の無視。藤田先生もあんまり怒ると血圧上がりますよ。健三さんに常識を求めようとしても無駄なんですから。

「……では随分遅くなりましたが、授業を始めます」

藤田先生、怖いですよ。リラックスリラックス。

「先ほど、非常識な反面教師が質問を促すようなことを言っていま

したが、質問はありませんよね？」

「ありませんよね？と言う口調には妙にドスが利いている。チヨークまで手に持って、授業を開始する気満々じゃないですか。質問を許可するつもりあるんですか？ないですね。この状況じゃ誰も質問なんてできるわけが

「あの一、藤田先生。北高祭ってどんな感じになってるんですか？」
義人！？空気読め！！

「……………」

「うおーい！藤田先生が般若の形相だよ！チヨーク握りつぶしたよ！

「…………それは健三^{あのバカ}さんに聞け」

「ついにバカ呼ばわり！？

「いや、健三さん…………山本先生が真面目に答えてくれると思います
？」

「思わないけど！

「なら別の奴に聞け。兎に角、私の授業を妨害するな」

「…………高説^{ごもつ}ともただけど、言い方が怖いですよ。…………藤田先生も苦労人だな…………。色々と教師にあるまじき態度も見え隠れするけど。」

第十七話 小テ

「はいはいはい、楽しい古典の授業が始まりますよー」

三限目、健三さんが妙なテンションで教室に入ってきた。いつもながらこの人の習性がわからん。いや別に機嫌がいいのはいいいことなんだが。

「早速ですが、今日は小テストをします」

抜き打ちテストか。日ごろの勉強量が試されるな。……義人が真っ白に燃え尽きている様子が窺えるが、無視。国語系の大半を苦手とする奴にとつて、抜き打ちテストで結果がどう転ぶかなど火を見るよりも明らかなのだろう。ドンマイ。同情はしないけど。

「では配るので、一番前の席の人、取りに来てください」

動こうよ、健三さん。どれだけ面倒くさがりなんですか、あんたは。

「配り終わりましたか？では始めてください。私は寝るので、三十分後に起こしてください。頼みましたよ、夏目」

教師失格だと思うのは俺だけだろうか。むしろ人としても失格かもしれない。

……なんというか、カオスなテストだった。っていうか、古典じゃないのかよ！アンケートだよこれ！

「今会ってみたい芸能人……」>レイモンドですか、変わってますね。九十点」

誰だレイモンド書いたの！？ちくしょう！無茶苦茶会いたくなっただじゃねえか！ちなみに知らない人のために解説すると、レイモンドとは昔のおはスタで山ちゃんと一緒に司会をしていた人物である。今何してるんだ！？それと健三さん、よく知ってるな！点数も高い

よ！

「今やりたいこと……>おはうがい<？ああ、朝起きて勝手にやっ
てください。十点」

だから誰だこの答案提出したの！？点数厳しすぎ！レイモンドと
どう違うんだ！？採点基準、謎すぎるだろ！あと健三さん、おはス
タに詳しすぎ！

「好きな本……>ワンピース<ですか。古典の授業のテストに漫画
の名前を書くとはいいい度胸です。八十点」

点数高い！いい度胸って本当にいい意味で言っていたのかよ！

「まあここまでの問題は、私が楽しむためのものなのでどうで
もいいんですけどね」

どうでもいいのかよ！俺たちの三十分間を返せ！

「文化祭で出したいもの……やけにメイド喫茶が多いですね」

どうなってるんだこのクラスは！？義人も石井も「当然じゃね？」
みたいな顔してんじゃねえよ！

「しかしありきたりで多いものはやりたくないの、却下します。

もつと頭をひねって珍しいものを考えてください。私が楽しめるこ
とが前提ですが」

自己中もここに極まったよ！メイド喫茶反対は納得だけど！

「もちろん私は口だけ出して手伝いませんで。頑張ってください。
ファイト」

最低だ！もちろん言うな！

「残りの時間は自由に相談して構いません。私は寝ます」

今、古典の授業ですよね！？寝るなよ担当教員！

第十七話 小テ（後書き）

ストックしてあった話がなぜか消えてしまった……。理由がわからないだけに不安です。

第十八話 道連

「さーて皆さん、面白い案を考えてきましたか？」

自由すぎるぜ健三さん。やる気のあるのはいいことだが、授業にもそれくらいの熱意を示してくれ。

「この時間では、文化祭及び体育祭実行委員を決めるとともに、文化祭の出し物を決めてもらいます。司会は夏目、お願いします」

健三さんはそう言っ、椅子に腰かけた。この時間のために朝から力を蓄えていたのではないだろうな？いつになくテンションが高い。ローテンションかつ無気力状態がデフォルトの健三さんにとつて、珍しい状態だと言えるだろう。

「えー、では実行委員をやりたいという殊勝な心がけの人はいるか？いないな」

自己完結しちゃったよ！まあこのご時世にわざわざ面倒くさいことをやるうなんて人いるわけないか。

「皆さんやる気ありませんねえ。そんなんじゃ立派な大人になれませんよ？」

あんたが言っな！

「先生は手伝ってくれますか？」

「まさか」

即答！？

「面倒なことを進んでやる馬鹿がどこにいますか」

先ほどのあなたご自身の言葉を覚えてますか！？

「ならどうしてそんなにハイテンションなんですか？」

「この学校では自主性を重んじるという建前のおかげで、文化祭、体育祭の期間は教師の仕事が極端に少ないんですよ！」

本音を堂々と言えるのは立派ですが、その態度はどうかと。

「まあ授業するのは趣味なんで別にいいんですが、職員会議とかがこの時期は楽なんですよ。校長がいないことが多いですし」

あいさつ回りに言ってるらしいからな。「ぜひ北高祭に来てく
さい」っていう。

「おまけに生徒が私のために楽しませようと必死になってくれる。
完璧じゃないですか」

断じてあなたのためではない。

「それで、実行委員になりたい人、いないか？くじになるぞ」
それで当たったりするのは嫌だな。誰かいないか、誰か。

「よし、俺たちがやる」

「やりますー」

義人に石井？わざわざ立候補するとは……まあ義人は祭り好きだ
し、石井もイベント好きそうだし順当と言えば順当か。

「二人とも文化祭の実行委員か？」

「いや、俺と旦那が文化祭。イツシーは体育祭」

「つて俺も含まれてるのかよ！？」

「あとは体育祭実行委員が一人だな」

「おい夏目！本人が否定してるのにやらせようとはどういうことだ
！？」

「はいはい、あとでチロルチョコおごつてやるから」

「わーいありがとう……じゃねえよ！安いよ！俺の価値低すぎ！暴
落しとる！」

「それで、本当に誰かやる人おらん？なんなら三井もつけるけど」

「おまけ扱い！？文化祭兼体育祭実行委員って重労働すぎるだろ！
？」

「なら私やろうかな……」

「はい決定」

「タツミ！？お前は俺を手伝わせようなんて思っ
てないよな！？」

「よろしくね、なおくんに石井君」

「終わった
！！！！」

何これ！？なんて罰ゲーム！？労働基準法違反じゃね！？

「それじゃ、あと司会頼んだぞ、二人とも」

「夏目のバーカ！バーカ！」

「旦那、悲しさの余り幼児退化しとるぞ
したくもなるわい！！」

第十九話 議論

「……何か意見はあるか……」

「三井ー！やる気出せよ！辛気臭いぞ！」

やかましい。全国不幸ランキングがあつたら上位入賞確定の俺に、追い打ちをかけるな。

「はいはい！」

「菅原さん、どうぞ」

「執事喫茶で！」

「何か意見はあるか？」

「旦那、何も聞かなかつたことにするには少々無理がある」

「執事喫茶というのは、男子と格好いい女子が執事となつて、各自でサービスをする喫茶店です！」

誰も求めてないのに説明してるよあの人！

「いい！」

「賛成！」

「むしろ決定で！」

……求めてる人いたよ。賛同してるし……。

「この案はどうですか健三さん？」

義人、いちいち健三さんに確認取らんといかんのか？

「……………zzz」

あれだけ煽つておいて健三さん寝てるよ！！駄目だこの人！

「……………朝ですか？」

もう夕方だよ！曲がりなりにも授業中なんだから寝ないでください！

「執事喫茶？……別にいいんじゃないですか？どうでも」

起きたばかりでローテンションだ　　！！やる気ねえ　　！！

「健三さんの目が覚めるまで、色々な意見を出し合おうじゃないか」

「……異議なし」「……」

この状態の方がいつも通りではないかと思うのは俺だけなのか？

「まあいい。他に意見のある奴いるか？」

「アーケード風にしたらどうだ？」

小規模なゲームをいくつかやるのか。定番と言えば定番だな。

「具体的にはどんなゲームがある？」

「的当てなんかどうだ？」

「ふむ。しかし在り来たり過ぎはしないか？」

「いや、特別の的当てなんだ」

ほう。

「球が野球の硬球」

「危険すぎるわー！」

「さらに的は三井」

「鬼畜すぎるわー！俺に何か恨みでもあんのか！？」

「腹部は五点。顔は十点。金的は九十点」

「鬼！悪魔！外道！却下だ却下！！！」

俺の命がいくつあっても足りんわ！

「そこまでして俺を追い詰めようとする理由は何だ！？」

「いや、清水が「三井は可愛い後輩を弄ぶだけでは飽き足らず、幼なじみの転入生まで手玉に取ろうとしている。ハーレム帝国を築こうとする悪の親玉だ」と聞いたから。違うのか？」

「根も葉もないデマだ！清水ちよつとこっちこいや！！」

手玉に取ってなんかねえし！むしろ弄ばれとるわ！

「魔が差してやった。反省するつもりはない」

「清々しいほどに最低だなお前！」

「嫉妬しちやいかんのか！？」

「キレるな！俺はそういう関係の女子などおらん！今まで一度も！」

「俺だっていたことねえよ！」

……不毛な言い争いになってしまった。

「旦那、次いつていいか？」

「……この状況で冷静なお前に脱帽したよ」

第二十話 一致

「もういつそ休憩所にして出し物はなし、ってのは駄目か？」

「旦那、消極的だと人生損するぞ」

「この場合の消極的というのは実行委員を断りきれなかったことを指すのかな？」

「さあ他に意見は？」

「都合の悪いことはスルーか。どこの政治家だ貴様」

「すべて秘書の計画したことです」

「石井？」

「記憶にございませんー」

「政府高官かお前は」

そのネタはわからん人が多すぎるだろ。自重しろ。

「あとタツミ。俺を巻き込んでおいて何か言うことはないのか」

「一緒に頑張ろうね、なおくん」

「いちやついてんじゃねえよ司会！」

「タツミ、その流れで言う言葉じゃないだろう。清水は涙をこぼしながらはやしたてようとするな。哀れだ」

「同情するな！」

「……で、意見出せ」

言われたとおり、同情しないことにする。清水はさらに落ち込んでいる様子だが、無視。

「迷路はどうだ」

「迷路？」

「北高の外れにある森を舞台とした企画で、>勇者のキノコくを手に入れて帰ってくるものだ」

「……>勇者のキノコくって露の季節に生えてて、消えたかと思ったら最近また各地で発生しているあのキノコか」

「ああ」

「なぜ勇者？」

「見事持って帰ってこれたものには、勇者のキノコスープ、勇者のキノコ炊き込みご飯、勇者のキノコソテー、をプレゼント」

「腹下すわ！過去にそんな人いた気もするけど……！」

「あの森って、昔は墓地だったらしいよー」

「そんな不気味な情報今はいらんから！」

「お化け屋敷に変更しよう」

「屋敷じゃねえだろ」

「お化け森林じゃ格好つかんな」

「お化け墓地だと偽装になってしまっしな」

「この案も駄目だな」

こんな理由で止めるのか。いいけど。

「うーん、しかしいい案はないものかな」

考え込むものの、これ以上の案は出ないようだ。となると……。

「今まで出てきた案でよさそうなのは？」

「執事喫茶だな……」

一番受けがよかったのがこの案だ。悲しいことに。

「一応多数決をとるか……執事喫茶でいいと思うって満場一致!?」

北朝鮮の軍隊かと思うほどビシッと手をのばすクラスの面々。タツミも手を上げていることに切なさを感じながら、決定を告げる。

「……うちのクラスの出し物は、執事喫茶に決めたいと思います……」

歓声を上げるクラスメイトを見ながら、今日何度目とも知れないため息をつく俺なのだった。

「旦那、ため息つく和幸福が逃げるぞ」

「今までに幸福が溜まったことなんてねえよ」

第二十一話 自業

「では次の議題、体育祭の選手決めを始めます」

「司会進行は僕とー、石川さんとー、引き続き三井がやるよー」

……この理不尽を許すこのクラスはどうかしてるんじゃないだろうか。……どうかしてる奴らの集まりか、ここは。

「山本先生。種目の説明をお願いします」

「面倒ですね、プリントがそこにあるから適当に進めてください」

「……わかりました」

タツミが健三さんの洗礼を受けている。そうして人は大人になっていくのだよ。

「えーっと……種目は男子900メートルリレーに女子600メートルリレー、スウェーデンリレーと障害物競走、トライアスロン、二人三脚競争、ムカデ競走、全員参加の大縄跳びと応援合戦ですね」
「それでは前に出てきてー、やりたい種目に名前を書いていってねー」

ガヤガヤと相談しながら種目を決めていくクラスメイト達。しかし、選んだ種目にどうしても納得できない人物が一人いたので呼びとめる。

「……浜ちゃん？君がどうしてトライアスロンに参加しないのかな？」

泳ぐのがこの学校で一番速い浜ちゃんなら、トライアスロンはかなり有利だろう。走るのも決して遅い部類ではないし。

「疲れるから当然嫌に決まっているだろう」

「嫌なことをやるのは君だけじゃないんだ。つべこべ言わずにトライアスロンに参加しろや、な？」

「みっちゃん、目が笑ってないぞ」

「笑うつもりもないからな、浜ちゃんトライアスロン確定っ」と

「理不尽な！」

「その理不尽さに最初に泣かされたのは俺だということを理解しておけ」

俺だけ不幸だなんて許せん。クラスメイト全員で不幸を分かち合うべきだ。

「……では、各自この種目で登録、ということでしょうか？」

「……いいです！」

どこの小学生だお前ら。……ん？待てよ？

「俺書いてない気がするんだが」

「問題ない。旦那はもう決まってる」

「……何度も言うが、俺書いてない気がするんだが」

「三井は二人三脚だよー」

「勝手に決めるなよ!？」

「相手が見つからなかったから、余ってた旦那は自動的に移動した」

「相談しろよ！相手はこのどいつだ!？」

「……よろしくな、三井……」

清水かよ！

「当然の如く女子と組もうとしてごとく失敗、男子運動部集団はリレーに流れて相方が見つからず、清水孤立。しかし人数を数えた結果足りない人物がいることがわかり、旦那と判明。旦那ならそこそ足も速いから、清水のパワーも受けきれるだろうと判断」

「清水君のを三井君が受ける!？」

やけに興奮した女子の声が響く。意味を取り違えるなよ腐女子！

「なんやかんやで現在に至る」

「貧乏くじだな俺!」

「みつちゃん、理不尽でもやれよ」

ここでさっき言った言葉が致命的になるとはな！

……口は災いのもとして本当だったのか……。

第二十二話 旗

文化祭の出し物、体育祭の出場種目ともに決め終わり、さて部活だと準備をしていると健三さんに呼び止められた。なんですか、健三さん。

「ああ、実行委員は今日会議がありますから、残ってください」
言つの遅いよ健三さん！

「なぜ今になって？間に合ったからいいようなものの、会議って結構大事じゃないんですか？」

「大事ですねえ」

「ならどうして」

「忘れてたからです」

「……義人、会議行くぞ」

健三さんだから仕方ない。あそこまできっぱり言われるとお手上げだ。どうしようもなかるうて。

「……ということで、文化祭では模擬店を出すクラスが多すぎるため、くじ引きで出せるクラスを制限させていただきます」

まあ当然の判断だな。ほとんどのクラスが金儲けに突っ走ってるからなあ……。メイド喫茶が多いのも目を引くが。この学校はおかしいと思う。常識的に考えて。

「フフフ、こういう時のための旦那だ」

「何の話だ？」

「旦那は執事喫茶に反対だろう？」

「そりゃそうだ。客商売なんて柄じゃない。まして執事ってことはスーツ着るんだろ？服が汚れるのも遠慮しておきたい」

「旦那ならそう考えていると思ったよ。さあ、くじ引きに行くんだ！」

「お前、やりたくない奴が引いてどうするよ？負のエネルギーで出店不許可を呼び寄せるぞ」

「旦那なら大丈夫。その有り余る不幸オーラで、自分に不都合な展開にもっていくんだ！」

なんて嫌な信頼だ。

「そう都合のいい展開になるわけないだろ。外れくじでも引いて来てやるから、涙を流す準備でもしておけ」

そう、いくらなんでもそんなベタな展開になるはずが

「旦那、流石だ。旦那の不幸属性は世界を平和に導くこと請け合いだ」

……話しかけるな。落ち込んでるのがわからないのか。

「あそこまでー、フラグを立ててしまったら狙つてるとしか思えないよねー」

「フラグ？」

「執事喫茶やりたくないとかー、出店不許可を呼び寄せるとかー。

もうこれは外れくじを引くのなんて不可能でしょー」

「結果見事に当たりくじを引いてきたからな。当たり前なのに血の気が引いてる旦那は見てて面白かったぞ」

「待て。なぜ当然のように石井は会議時の俺たちの会話を知ってるんだ」

石井は体育祭実行委員の会議に行っていたはず。

「んー、盗聴ー？」

「犯罪！」

「別にいいじゃねえかー。減るもんじゃなしにー」

「頼むから将来、夕方のニュースとかで現れないでくれよ」

「大丈夫ー。キャスターになるつもりはないからー」

「そっちじゃねえよ！」

「まあまあ旦那、落ち着け。それで結果が変わるわけでもない」

「……裏方に回ればいいか」

仕込みしたり買い出し行ったり料理作ったり、パシリでも喜んでやろうじゃないか。

「それは色々と許されないと思うよー」

「なぜ」

「執事喫茶だからー」

……意味がわからん。

第二十三話 悲

「おい！もつとゆつくり歩けよ！」

「そんなんじゃ勝てねーだろ！」

「バカ、転んだら負け確定なんだから慎重になれ！」

「練習で慎重になってどうするよ」

「それもそうか」

「はははははは」

……楽しそうだな、ムカデ競走の練習。それに比べて……。

「……清水、テンション上げろよ……」

「……三井こそ……」

男二人でやる二人三脚（しかもそこまで仲のいいわけでもない相手の練習のなんと惨めなことか。いや、女子とやりたいとかそういう話じゃないよ？そんなことになったら逃亡すること間違いないだろうし。俺が言いたいのは、今の状況が途轍もなく虚しいということ、ただそれだけだ。

「……これだけ練習すれば十分だろ……部活行っているか」

「……奇遇だな……俺もラグビー部の練習が恋しくなってきたところだ……いつもはきつくて苦しいだけなのにどうしてだろうな……」

「……俺も小倉さんのドSなメニューだって、今の状況から抜け出せるなら受けて立とうではないか」

二人の利害が一致したようだ。それならそもそも練習なんかするなと思うかもしれないが、クラスの雰囲気にもまれてやらざるを得なかったのだよ。世の中って難しい。

さて部活に参上した俺なのだが、皆も体育祭の練習をやっている

のか、文化祭の出し物の準備に追われているのか集まりが悪かった。うぬ、部員がいない。小倉さんも生徒指導部長の肩書のおかげで仕事があるらしく来ていないし、こんなので新人戦は大丈夫なのだろうか。

「先輩、いい加減私を無視するのやめませんか？」

「なぜいるんだ貴様は」

「あと三日は休みですよ、本来」

「ふん、休みの日に遊びに行ったりしないのか、さみしい奴め」

「先輩に言われたくないです」

「今日は監督する先生がいないから泳ぐこともできん。だから帰れ」

「先輩のクラスは文化祭何やるんですか？」

「話聞いてる？」

「でもまあ教えてくれなくてもいいです。当日行きますから」

「自己完結するとは」

「でも先輩、ミサンガつけてるんですね」

「強引に話を変えるな」

「私もつけてるんですよ。ほらほら」

「思いだした。貴様つい先日あのような仕打ちをしておいてよくもまあ、おめおめと俺の前に姿を現したものだな」

「今の今まで忘れてたんですか？鳥頭ですか先輩は」

「あまりに不幸が続きすぎて、肉体的な痛みは大して傷にならなくなっているようだ」

「うわー、なんて情けない自己分析」

「やかましい」

「つまりは精神的な痛みが傷になってるってわけでしょう？可哀想な人生ですね」

「人生単位で否定とされるとは思わなかった。……しかし俺の不幸さがここ数日で増している気がするんだ。一体何の陰謀だ？」

「なおくん！」

「な、何だ！？」

「……そこまで驚かなくてもいいじゃない」

「驚かせるな、心臓が止まるかと思ったぞ」

「……石川先輩、こんにちは」

「……なぜ険悪になるのだ。最近の保護者の思考がよくわからん。別にタツミは険悪でもないから、喧嘩ではなさそうだし。」

「……ミサンガ、先輩からのプレゼントですか」

「そうだけど、なんで知ってるの？」

「………」（無言で腕を上げる）

「古木さんもなおくんにもらったの？」

「……私のお礼ではないですけどね」

「だからなぜ険悪になる。」

第二十四話 信用

「……石川先輩、監視役の先生がいなくて今日は泳げないみたいですから、帰ったらどうですか？」

今日、初めてこのプールで泳ぐつもりだったのだろう。水着入らしい荷物を持っているタツミだが、規則のため教師がいないとプールでは泳げない。こんな規則無駄だとは思うが、校長がわかりもしないのに、部活に関して口出ししてくるから仕方がない。無能どころか害になるのだから、早く引退して天下りでもしておけばいいのに。規制が甘い今のうちに。

「そんなことないみたいだよ。ほら」

タツミが振り向いた先には、健三さんの姿があった。

「ぐつどあふたぬーんえぶりわん」

エブリワンで三人しかいませんけどね。

「毎度おなじみ小倉さんの代行で見に来てあげましたよ」

本当に見るだけですけどね。まあ水泳部員なら、両足攣ろうと上半身だけで泳いで帰ってこれるだろうが。実際みんな足攣っても助けないで、本人だけで解決してるし。

「メニューはないみたいですから適当に泳いでください。さあ、れつつすいみんぐ！」

それだけ言つて、健三さんは持ち込んだある椅子に腰かけて寝たのだった。いる意味ないですね、本当に。あとあなたは一日何時間寝るつもりですか。小学生じゃないんだから少しは我慢をしてください。

「じゃあ私、着替えてくるね。なおくん、覗かないですよ？」

「アホか」

なぜそんなことをせんといかん。

「先輩、覗いたら私がこの手で殺します」

「覗くわけないだろうが!？」

そりゃ覗きは女の敵かもしれんが、してもないのにどうして保護者の殺気が駄々漏れなんだよ！？怖いよ！

「……俺も着替えてくる。保護者、覗くなよ？」

「の、覗きなんかしてませんよ！？」

なぜそこで動揺する。

そして着替え終わり、プールサイドで準備運動。

「……先輩、マッサージ手伝いましょうか？」

「そうだな、よろしく頼む」

恥ずかしいが、断った揚句に怪我したり、足をつったりするのも馬鹿馬鹿しい。ここは素直に手伝ってもらおう。幸いにも、見られている相手はいないし（健三さん爆睡中）。

「……先輩って、意外といいからだしてますよね……肩幅も広いし

……」

「水泳部はたいていそんなものだろ」

むしろ俺は筋肉がない方だと思う。浜ちゃんとか人とは思えない体のバランスしてるし。逆三角形の見本だよな、あれ。

「……でも、確実に中学の頃よりもたくましくなってます……はうはうってなんだ。人の背中押しながら何をやってるんだお前。」

第二十五話 大小

だらだらとストレッチを続けていると、背後から声をかけられた。
「おまたせ！なおくん！」

いや別に待ってないから。水泳は個人種目だろ。リレー以外。

「……別に待ってませんよ、石川先輩」

また険悪ムードに……。どうした保護者。

「マッサージしてもらってるの？」

ストレッチだ。マッサージとはまた違う。

「古木さん、私も次にしてもらっていい？」

「仕方がないですね……。……！！」

振りむいた保護者が固まったようだ。どうした？ショックな出来事でもあったか？

「……まさか……。こんなに……。差が……。卑怯な……」

言葉を失う保護者。余程のことがあったのだらう。

「どうした？後ろで何が起こってるんだってぎゃあああ！！！！」

目が！目がああああ！！！！

「……！先輩は見ないでください！あんなのおかしいです！石川先輩！何か詰めてるでしょう！」

声が悲痛だ。しかし俺の視界と思考力、判断力が保護者の眼つぶしによって奪われている今、現状を把握することは不可能。一体俺が何をした。

「お、落ち着いて古木さん！」

「落ち着いてなんかいられないです！人類みな平等だなんて嘘です！差が！この肉にどうしてこんなに差ができるんですか！？」

「別に胸が大きくてもいいことなんてないよ？肩こるし、運動もやりづらいし」

「自慢ですか！？あえて口に出さなかった>胸くという単語を出すあたり余裕ですね！？大きい人にはわかりませんよね！胸で好きな

人にアピールできない悔しさが!!」

「落ち着きなつてば」

「この前だつて腕組んでたのに！胸も押し付けてたのに！腕を組むという点以外に反応を示されなかつたんですから！差別です！こんなの！神は無常です！！いや、神様なんていない！頼れるのは所詮、自分自身だけです！」

「だから落ち着きなつて！」

二人がどたとと暴れながら言い争っているようだ。残念ながら俺のHPが点滅しているので内容はわからない。てか攻撃された意味もわからない。わけもわからず死の危機に瀕している俺って……。理不尽。あまりにも理不尽だ。

「どうせ先輩だって大きい方が好きなんです！小さい胸なんて胸じゃないとかいう人なんです！！」

「男の人ってそうなの？ やっぱ大きい方がいいのかな？ そうだといいんだけど……」

「そこは否定してくださいよ!! うわああん!!」

「う、ごめん！古木さんだって可愛いよ」

「強者の余裕ですか！？小さくて可愛いガキンちよのようだとそう言いたいんですか！？」

「どうすればいいの!？」

目が痛いよう。

第二十六話 過保護

……ようやく視界と思考力が回復してきた。未だに目には変な光が見えるものの、物の輪郭くらいは判別できる程度なので、まあいいだろう。……よくないよな、絶対。

「保護者、ちよつとこいや」

「……………」

ん？反応がないな。いつもなら軽口の一つや二つ、返してくるはずなのに。一体どこに消えたんだ？

「なおくん」

「……タツミか？」

「なんで疑問形？」

「こちらにも色々都合があるんだ」

保護者が理不尽に作った都合だが。

「それで……どうかな？」

「すごいな」

「もう！なおくん恥ずかしいよ！？」

「うわ痛っ！叩くなタツミ！どうして恥ずかしいんだよ！？」

「だってすごいって……エッチ」

「なぜ！？」

保護者（らしき人影）が何をとち狂ったのか重そうな棒を振り回しているから、率直な感想を述べただけなのだが。

「大きい人なんてみんな絶滅すればいいんです ！！！」

よく見たらあれ、筋トレ用のシャフト（バーベルの持つところ）じゃね？しかも片手で持つってどんな筋肉の付け方してんだ。保護者には基本逆らわないようにしよう。目をつぶされかけたことといい、危険すぎる。そんなに背の高い人が憎いのか。よかった、平均的身長で。あれで殴られたら生死にかかわる。

「でもなおくん……体格いいね」

「保護者にも言われたぞ、それ。実感はない。上には上がいるものだ」

「だからってむやみに自分を卑下するのもよくないと思うよ」

「卑下はしてないだろ」

「だったら自分に自信を持ちなよ」

「……もてる場所がないから苦労してる」

頭のよさ、運動神経、その他どれをとったとしても、水泳部内ですら一番にはなれないだろう。上には上がいる。この言葉は深い。

「人と比べても無駄でしょ？世界で一番にならない限り上がいるってことなんだから。人と比べて悲観しても、状況は好転しないよ。もっとポジティブにならなきゃ」

「……俺もそうは思うが……性格だから仕方ないな」

だからこそ俺は義人、石井といった前向きな思考をもつやつを尊敬する。奴らのような性格になればたらどんなにいいかとも思うが、俺はそうはなれない。義人の前向きさに引つ張ってもらってようやく人並みになれる、情けない人間　それが俺だ。

「だからそうどうして後ろ向きに考えるかなあ、なおくんは！」

「別によからう」

「よくない！」

そつえば昔もこうやってタツミには叱られていたなあ……。

「こんなんじゃ駄目だよ？」

「はいはい」

「もう……生返事だなあ。よし決めた！」
何をだ。

「私が常にそばにいて、なおくんの性格を矯正してあげる！」

「……はあ！？」

「おま……何言ってるんだ！？」

「だから、私がおくんと一緒にいて、プラス思考になるように指導してあげるってこと」

「そんなの駄目です！！」

保護者、いつの間にいたんだ？息せき切って……いるのはさっきの振り回してたせいかな。

「四六時中一緒にいるつもりですか！？」

「学校ではどうせ一緒だし」

「意味が違ってきます！」

「大丈夫だって。なおくんに変な気は起こしてないから……今のところ」

「それが不気味なんです！」

「お前ら何の話に変わってるんだ？」

「先輩は黙っていてください」

……俺、威厳すらもないのか……。

「だからネガティブになっちゃ駄目だって！」

「どうしろと！？」

第二十七話 係

「大道具係代表、清水！」

「看板から内装の飾りまで、作るものは俺たち大道具係に任せておけ。無理なものもあるだろうが、全力を尽くすことを約束する」

「料理係代表、杉田！」

「模擬店だからと言って手を抜くのは簡単だ。しかし、妥協しても面白くない。旨いものを安く提供する、この信念を持って行動しよう」

「宣伝係代表、石井！」

「この学校にうちの喫茶店を知らないのは当たり前でー、北高祭に来校したすべての人に知ってもらえることを目標とするよー」

「提供兼サービス係代表、三井！」

「異議あり！」

「各部門の代表者の発表は以上です。それぞれ係が何になったかはプリントに印刷してきたので確認してください」

「俺の意志は！？」

「拒否権は存在しません」

「横暴な！？」

それはないだろ！？最近夏目を筆頭に、俺の扱いが酷くなってる。確実に。

「せめて意見くらいは言わせてくれよ！」

「なぜ？」

そんな理解できないみたいな反応されても。

「なおくん、いやなの？」

「ほら！俺の意見を聞きたい人がいたじゃないか！議長、再度発言を求めろ！」

タツミは少なくとも俺の味方か。感謝の意志をこめて、笑顔でタツミを見ていたら顔を赤くして顔を伏せられた。……そんなにか

しいか、俺が笑うのが。

「……ちつ、どうぞ」

「今あからさまに舌打ちしたよこの議長！」

「それが発言の内容ですか」

「流れからして違うつてわかるだろ！？何この「早く終わらせろよ」みたいな空気！？」

「早く発言を終わらせろよカス」

「もつと酷かったよ！」

恐ろしいクラスだ。

「サービス係兼提供つて、要はウェイターだろ？」

「そうだ」

「俺の希望部門は、大道具か料理のどちらかにしたはずだが」

この前のアンケートで、希望を取ったのは何だったんだ。代表以前の問題だろ。

「アンケートの結果だ」

「どういうことだよ」

「ウェイター　執事をやらせたい人間も同時にアンケートを取ったから」

それは確かにそうだったけど。

「でも本人の意志優先だろ！？」

「お客様のためだ、譲歩しろ」

「アンケート取ったのは客からじゃないだろ！？」

「来店するのは同年代の女子がほとんどだと思われる。その女子からあれだけ票をもらってるんだから選出は妥当だっていうか大量に票をもらって調子に乗ってんじゃねえのか水虫にでもなればいいのに」

「後半から怨嗟の言葉になってますけど！？」

しかし俺に票をよこすとは。このクラスはどれほど俺のことが嫌いなんだ。

「全身吹き出物だらけになればいいのに」

「悪化した!？」

第二十八話 一計

「どうしても執事をやるのは嫌なのか、旦那」

「当たり前だ」

「どうしても？」

「どうしてもだ」

「なら強攻策を使うしかないか」

「……………」

暴力にでも訴えるつもりか？

「旦那は約束は必ず守るよな？」

「……………」

まさか！

「察しがいいな。さすが旦那だ」

そんなので褒められても全く嬉しくない。

「料理勝負での旦那一日使用权。これを文化祭当日に使わせてもら
う」

「………… 卑怯者」

「作戦勝ちだと言ってくれ」

「石井が妙に自信を持っていたのもこれだな」

「そうだよー。三井なら約束は破らないよねー」

「お前らとの約束なら破ってもいい気になってきた」

「ということで旦那の執事代表就任決定、みんな拍手ー」

パチパチパチと済し崩し的に決定してしまった。なんてこったい。

「………… はあ」

「旦那、また溜息か」

「若いのにだらしないよー」

「なおくん、ネガティブなのはダメだよ？」

責められれば責められるだけ、余計にネガティブになるのがわからんかな。前向きな人が羨ましい。

「しかしなぜピンポイントに俺が狙われたんだ」

執事役なんてもっとふさわしい人がいるだろうに。

「それは……ねえ？」

「旦那はそこそ顔が整ってるし」

「しっかりしてそうに見えるしねー。実際性格も重箱の隅をつつく感じだけどー」

やかましい。顔がそこそこってことは中の上だろ。その評価は聞きあきたわ。

「だから、なおくんは自己評価が低すぎ！」

「俺の自己評価は妥当な線だと思う」

義人がにやにや笑っているのが気になるが、まあいいだろう。義人と石井が変なのはいつものことだ。気にしない気にしない。

「むー……」

タツミの睨むような目線が気になる。こっちは慣れないためどうしても気になる。

「言いたいことがあるならはっきり言え」

「別にー……」

うん、気まずい。

「ところでタツミは何の係になったんだ？」

話題転換をして矛先を鎮めよう。ナイス判断。

「執事係だけど」

「そうかそうか……執事係！？」

「何驚いてるの？」

「俺の認識では執事は男がやるものだと、相場は決まってるんだが」
「菅原さんの説明聞いてなかったの？女子もやるって言ってたじゃん」

「言ってたか？」

「言ってた」

「言つてたよー」

その時点で突っ込む奴はいなかったのか。どうなのその辺。

「大丈夫！家事全般は好きだから！」

そうだよな。昔みたいなトラウマを作ることはないよな！

しかし三井の希望は、数日の間に脆くも崩れ去ることとなるのだった……

「義人！妙なモノログ入れるんじゃないっ！！」

第二十九話 原石

「三井は執事長なんだから、そのぼさぼさの頭と身だしなみを何とかしろよ」

いつの間にか執事代表から執事長にランク上げされたらしい。嬉しくねえ。

「そんなこと言っただってな……くせ毛だし、水泳部だからセットとかしたところですぐに無駄になるから」

「でも他のクラスの水泳部員は普通だよな」

「田村とか片山とか」

「松田もそうだよな」

「俺、髪型は自然に任せたままにしておくことが普通だと思うんだ」

「その認識は明らかにおかしいだろ」

「そんなことないよな、旦那」

「そうだよー。みんなの方がおかしいよー」

「髪型なんかわざわざセットする必要なんかないよな」

さすが心の友だ。これでこの話題は終わりにしてしまおう。

「それは間違ってるよ!」

「タツミ?」

「そう! 石川さんよく言った!」

「三井君も杉田君も石井君も、自分の容姿に無頓着すぎ!」

「三人ともとがいいいんだから、もつと外見に気を配ろうよ!」

わらわらと女子が湧いてきた。いきなりどうしたんですかあなた方は。

「この中に! この中に美容師志望の方はおられませんか!?」

なんだこの小芝居。

「あの……私でよろしければ……」

続いた!

「おお、あなたは美容師志望で外国に修行に行きたいと思っている

佐伯さんではあーりませんか！」

説明ありがとう。そして「あーりませんか」ってなんだ。古いわ。
「私の野望は埋もれた原石を発掘し、輝かせることです」

じり、と俺たちの方に近づいてくる佐伯さん。目が血走っているように見えるのは気のせいだろうか。

「だからこそ、入学時からこの漫才師三人が埋もれた原石にしか見え、気になっていたので」

さらに距離を詰める佐伯さん。逃げようにもクラスのみんなが退路を断っているため、逃げることができない。素晴らしい団結力。このチームワークをもっと別のことに向けてほしいと切実に思う。

「今回、この三人を変える機会を設けて頂き、皆さんには本当に感謝しています」

「ストップ！変える機会なんてどこにもない！俺たちは別の仕事がある気がするから帰らせてくれ！ほら！義人も石井もなんとか言ってくれ！」

「……旦那、人に嫌なことをしたら、それは返ってくるって言葉なかったっけか」

「因果応報？」

「まさにそれだ」

「俺悪いことなんかしてねえ！」

「まあまあ一蓮托生だよー」

「お前らの都合に付き合わせるな！」

「総員！かかれーっ！！」

「「わああああ」」「

ぎゃあああああ！！

第三十話 脳内変換

「劇的改造！」

「ビフォーア ター！」

「むー！むー！」

現在の状況。……身だしなみがなっていないと難癖をつけられ、ちよつと危ない人（佐伯さん）が暴走し、色々あつて椅子に括りつけられている水泳部員三人。何このアウェーな空気。甲子園球場か。あ、ようやく口を塞いでいたタオルを取ってくれた。こんな些細なことで幸せを感じるって一体どうなんだろう。俺の将来が危ぶまれる。

「旦那、諦めは肝心だぞ」

「……わかつているが、少しも抵抗しないお前ら二人は尊敬に値する」

悟りでも開いているのか。

「むしろこの状況を楽しむくらいでない」と

「か！お前らド なのか！」

「極端に考えるな。俺はどっちでもいける」

「みんな聞いた！？やっぱり杉田君は両刀使いよ！三井君もその手に掛かつてるに違いないわ！」

「何その結論！？言葉をそつも悪意で捻じ曲げる才能はどこから来るんだ！？」

そもそもあなた誰ですか！？菅原さんら、俺が腐女子と認識していたグループとは違う人のようだ。この学校、変人の層厚いよ。不必要なほどに。そして無意味な層が。

「……なおくん……掘られて……」

「タツミ！？なぜそこで真つ青になる！？おかしい！そのセリフはどう考えてもおかしい！」

「さて本題に入ります」

「待て！話は終わってない！誤解を解く機会を与えてくれ！」

「……わかってるよ、三井君」

「絶対理解してないだろ！間違っただまそれを実事として処理してるから！」

タツミに至っては顔面蒼白のまま口をパクパクとさせて、小刻みに震えている。言葉を発することすらできないようだ。……どんな妄想を膨らませているのか、知りたいけど知りたくない。怖くて。

「というかあなたは誰だ！？」

「隣のクラスの者ですけど」

「なぜここにいる！？あくまで文化祭のクラス企画が本旨じゃないのか！？」

「括りつけられたまま、突っ込む旦那はシニールだな」

「冷静な目で今の俺を見るな！しまいにや泣くぞ！」

「まあまあ落ち着いて」

「だからあんたは出てけ　　！！！」

しぶしぶ教室を出て行く隣のクラスの腐女子。なぜ今俺は晒し物になっているのだろうか。本気で俺の存在価値が知りたい。

「佐伯さん、抱負をどうぞ」

なんかいろいろやってるうちに、

「この三つの原石を、磨きに磨いて>アニメ版ポケモン、ポリゴンの回く並みに光輝かせてみせます！」

人体に有害なレベル！？

「そこでテーマを募集します！テーマに沿って、この三人をカットして着飾らせてメイクしてめっためたにしてやりましょう！」

「ノープランだったのか！？そしてめっためたって何！？」

人を改造すると言っておいて、どうしてそれも無計画なんですか！？

「三十分相談して、テーマを決めてください」

「待て！俺たち括りつけられたままでか！？」

「仕様です」

「なんの仕様だよ!？」

第三十一話 カット

「では最初のお便りです！」

「それなんてラジオ番組!？」

「司会進行はこの私、DJ夏目がお送りします！」

「お前絶対俺を憂さ晴らしの標的にしてるだろ!？」

「うん」

「清々しい!堂々と答えるその姿は清々しいが、清々しければ許される問題じゃないからな!？」

「このお便りの要望は「テーマは>わかめ<でよろしく!」だそうです」

「無視しやがった!都合の悪いことを無視するのは、健三さんの異様な空気がこのクラスに蔓延しているからか!？わかめって!海藻かよ!俺の髪をなんだと思ってるんだ!執事と関係ないだろ!かすりもしてねえ!」

「懺悔は終わりでよろしいですか」

「俺の会心の突っ込みが懺悔扱い!？」

「さあ、いくがいいマイスター佐伯」

「素人なのにマイスター!？」

ちなみにマイスターとは名人という意味だ。豆知識。

「ギギギ……カミ……キル……」

「ええ!？急に何!？今までそんな喋り方してなかっただろ佐伯さん!？何が起きた!？」

「いや、キャラが薄いと思って」

「もう濃い人はいらないよ!変人のバーゲンセールだからこの学校は!」

「三井のことか っ!」

「俺じゃねえよ!」

「ではカットを始めます」

「もう始めるのか！？ちょっと待て！まだ心の準備が……」

「基となるのは石井でいこう！」

「ちよつと待って。一言だけ言わせてもらおうからー」

何を言うつもりだ。

「アツ　！」

わかる人だけ分かればよし。

「完成しました」

「……まさかテーマの>わかめくが磯野家のワカメだとは思ひもしなかったよ」

そのため、今の石井はオカツパ状態。髪をほとんど切っていないのでよかった。気持ち悪いくらい、髪がさらさらなのが気になってしょうがない。恐ろしい薬物とか使ってないよな？あともう一度言うが、絶対執事と関係ない。

「次のお便りだＹＯ！」

「……ノリノリだな夏目。今のお前を録画して冷静なときに見せてやりたい」

「テーマは>テライケメンｗｗｗｗをご希望！さあ、ミニスター佐伯、ファイト！」

「佐伯さん出世した！？」

ミニスターは首相の意。テストに出るから覚えとくと吉。

「てかこの書き込みしたの誰だ！２ちゃんねらーが混じってるぞ！怒らないから２ちゃんねらーは拳手しなさい」

「「「はい」」」

「多っ！！」

予想を上回る駄目っぷりだ。かく言う俺も楽天の掲示板をのぞいているから、人のことは言えないが。

「では今回は杉田を素材とする！」

「カツティングスタート！」

「……正直見くびってた。ごめんなさい」

「杉田……なぜいつも前髪を垂らしたままにしてたんだ……？」

「もったいねえ……てか殺意すら覚えてきた……」

義人は見事、二枚目へと変貌を遂げていた。男子は妬み、女子は呆気を取られて言葉が出てこないようだ。このまま自然解散にならんかな。

「……腹立ってきたから三井のテーマを面白いのにしよう……」
事態悪化。義人のアホ。

「冤罪じゃね」

「冤罪なんて警察ではよくあることだろ」

「旦那、問題発言するな」

第三十一話 カット（後書き）

感想が欲しいです。できれば下さい。

第三十二話 変化

「正直反省してる。ごめんなさい」

「……しくしくしく」

「だから三井、もう泣くなよ」

「……ぐすっ」

「今のお前が泣いていると、非常に萌えて襲いかかりたくなる」

「……！」

今、俺は佐伯さんの魔の手に掛かって恐ろしい変貌を遂げている。

「しかし佐伯さん、素晴らしい仕事だ」

「お粗末さまです」

「まさか三井を>萌く<のテーマで、ここまで変化させるとはな……」

「てつきり華奢な少年風に変えるのかと思ったが、性別ごと変えるとは……素晴らしい職人技よ」

「これは知らない人が見たら、十人中八人は男子だと見破れんだろう。メイクとかつらだけでここまで変えるのは凄いとわざるを得ない」

メイクとかつらは美容師の仕事じゃないと思うんだが、どうなのその辺り。佐伯さんの目指すものがわからない。

「しかもその半分は可愛いと言うレベルだ」

「男子用の制服のままだが……しかしそれが又そそるといっつか」

鏡を見せられたときは、衝撃の余り逃げ出したくなった。今だに縛り付けられているから動くことすら儘ままならんが。……舌噛み切つて死のうか……。でもその前に。

「……一言いいか」

「なおちゃん、どうかしたのか」

なおちゃん！？

「背筋が凍りついたわ！気持ち悪い呼び方するな！」

「強気な少女……いい」

「少女！？この俺が少女呼ばわりだと！？」

人生単位でトップクラスの屈辱だ。

「執事と関係ないだろうが！メイドにでもするつもりか！？」

「それいいな」

「検討してんじゃねえよ！」

健三さんの指摘で中止になったのをもう忘れたのか。このクラスは自分に都合の悪いことをすぐ忘れるから困る。しかも自然と。

「では三人に使命を与える」

「使命？」

とりあえずこの化粧とかつらをどうにかしてからでいいか。

「もちろんそのままの状態でだ」

苛めですかそうですか。

「このクラスの執事喫茶を、他のクラスに存分に宣伝してきたまえ」

「はあ！？」

「もちろん説明等は宣伝係代表、石井に一任する」

「待て！この状態で行ったら間違いなく変人扱いされるだろうが！」

「「はっ、何を今さら」「」」

「クラス全員で失笑だと！？」

「さあとつとと行つて来い」

「嫌に決まってるだろうが！」

「でも行かないと……」

「どうなるって言うんだ！？」

脅しか？なんて卑怯な……。

「清水の理性がそろそろ飛びそうだ」

「ハアハア……もう可愛ければ男子でもいいや……」

「行ってきます！だから早くこのひもを解きたまえ！」

貞操の危機には変えられん！

第三十三話 宣伝活動

「しかし宣伝活動といったって、具体的には何をすればいいんだ？
とうかこのかつらと化粧、どうにかしてくれ」

清水の理性が崩壊する直前に辛くも脱出を果たした俺たちは、周囲の人から奇異の視線を受けながら廊下を移動していた。これなんて羞恥プレイ？このまま俺に女装癖があるという噂が立つたらどうしてくれる。

「大丈夫ー。そこら辺はまず、僕たち二人が見本を見せるからー」

「わかった。で、かつらと化粧はどうすれば……」

「イツシー、一組から始めるぞ」

話聞け。

「三井はそこで待つててねー」

「だから恥ずかしいって言ってるだろうが！」

「失礼しまーす」

マイペースって便利だなあ、おい！

「ハアイ、ジェシー！最近疲れがたまつて困ってるんだよ！」

「ブライアン、そんなあなたにとっておきの商品をお薦めするわ！
なにこれ！？アメリカ風通販！？

「私がお薦めするのはこれ！特製栄養ドウリンク！」

無駄に発音いいな！

「なんておいしそうなドリンクなんだ！いったいどんな効果があるんだい！？」

「疲労回復に素晴らしい効果があるのよ！早速飲んでみて！」

「では喜んで頂くよ！GOKUGOKU」

擬音まで！？

「プハア！なんてエキサイティングでスリリングな味なんだ！」

それ栄養ドリンクにとって、高評価ではないだろ！

「疲れの方はどう！？ブラアーイウワァーン！」

鬱陶しい！必要以上に鬱陶しい！

「なんてことだ！さっきまでの疲れがまるでない！」

嘘だ！

「今なら二十四時間テレビをマラソンしながら全部ぶっ通しで見ることだってできるよ！」

効果ありすぎだろ！胡散臭すぎて疑うことが馬鹿馬鹿しくなってくるわ！

「それはよかったわ！勧めた甲斐があつたというものよ！」

「ところでこのドリンクは、どこで手に入れることができるんだい！？」

そうか。この商品を執事喫茶（うちのだしもの）で出すと宣伝するわけだな。宣伝になつていゝとは思えんが。

「通販よ！お申込みは - - ！いまならもう一本おまけでついてくるのよ！」

執事喫茶で出せよ！

「それはいい！早速申し込むことにするよ！それじゃ！」
今までの茶番は何だったんだ！？

「ちなみに原料は中国産だから！気をつけて！」

なら勧めるなよ！

「ふう、いい宣伝になった」

「どこがだよ！」

生徒のほとんどが呆気にとられてるじゃねえか！反応に困るようなことするな！松ちゃんだけ大爆笑してたけど！

「こんな感じで次は三井も一緒にやるよー」

やりたくねえ！

「さあついてこい、旦那」

ついて来いって強制的にじゃん！拒否権はないのか！？

「ないよー」

ひでえ！

「……はあい、ジェシー……」

「どうしたの、鳳明琳！」

俺中国人の設定！？

「旦那、台湾人の設定だ」

どうでもいいよそんなの！

第三十三話 宣伝活動（後書き）

ええじゃないか（そのにはない方）の累計アクセス数が十万件突破！ひとえに読者様のおかげです。そこで、特別編のリクエストを受け付けたいと思います。三井のトラウマ話からなぜ保護者が三井になついているかの過去話まで、リクエストがあれば書きたいと思います（ただし一日一話投稿なのでその間本編の流れは止まります）。そんなリクエストとかどうでもいいから続き書けと仰るなら、その意見を尊重します。

これからも頑張って書きますので、この駄文を読んでやってください。

第三十四話 制裁

「宣伝活動御苦労、諸君」

「とりあえず殴っていいか」

「妙に偉そうだ。人にこれほどの屈辱を与えておきながら、奴は無傷とは気に食わん。」

「まあなおちゃん、そう怒るな」

「火に油を注いでいるのがわからないのかな？これはお仕置きが必要なようだ。」

「えい」

「……………」

「俺、握力ないからあんまり効果ないだろうなあ」

「男子高校生平均以下の握力だし。これで痛がるようでは男じゃないだろう。」

「……………ギブ、ギブ……………」

「聞こえないなあ」

「頼み事ははつきりということ。これは最低条件だろう。」

「……………すまん……………アイアンクローは……………やめてくれ……………」

「旦那、夏目の顔が変色してる。これくらいでやめとけって」

「もとからこの色だろ」

「青紫色が人間の顔の元々の色なら俺も文句は言わん。しかし俺たちの顔は肌色がデフォルトだ。したがって今の夏目の状態は非常にまずい。OK？」

「ふむ。義人の言うことにも一理あるな。しかし。」

「夏目は人間じゃなかったんだ、きつと」

「現在進行形で別のものになりかけていることを除けば、夏目は人間のはずだぞ、たぶん」

「……………たぶんって……………どういうことだ……………」

「命乞いのかわりに突っ込むとはなかなかやるな。褒美に手を離し

てやろう。

「……………」

「おーい、夏目生きてるか」

「義人もほっとけよ」

「おーい」

「……………」

「返事がない。ただの屍のようだ」

「それが言いたかっただけか」

一度は言ってみたいセリフではあるが。

「……………死んでねえよ……………」

よくもまあ倒れながらも突っ込めるものだ。

「旦那も大して変わらんと思う」

うるさい。人を突っ込みマシーンとでも思ってるのか。

「……………もう一度彼女を作るまで……………俺は死ぬわけにはいかんだ……………」

……………」

しかし夏目はどうしてもボケずにはいられないらしい。この発言はマジで言っているから、天然ボケということ。それでも立ち上がろうとする姿勢は立派だ。

「彼女のために死ぬわけにはいかん！というなら格好いいのにね」

「ぐはっ！」

「まあ、今の発言じゃ本当に可哀想な人にしか聞こえんな」

「ぐふっ！」

「……………ドンマイ」

「けはっ……………」

夏目が再び倒れ込んでしまった。肉体的な痛みには耐えられても、精神的な痛みには耐えきれなかったようだ。残念。修行が足りんよ。「精神面を鍛えるって……………どうしろというんだ？」

「経験を積み」

「精神面を鍛えるような経験をしないように努力しろよ」

第三十五話 思い違い

「準備も着々と進んでいますね、感心感心」

健三さん、せっかくスーツ姿になって常識人に見えるんですから、おかしな行動は取らないでください。いい大人が文化祭の出し物の試作品をつまみ食いするってどういうことですか。

「三井、食べ物食べるためにあるんです」

それに限っていえば、作った人、もしくは来店するのに近い人物が食べることに意義があると思います。さっきから食べても感想一つ漏らさないんじゃない迷惑です。

「でもさー三井ー」

「ん？」

「この中だとー、健三さんが一番執事っぽく見えるよねー」

見た目だけはな。やはり年をそれなりに取ってるだけあって、貫禄というものがある。全員（係問わず）スーツとネクタイを着用することになったのだが、義人は身長の高さがネックになっているし、石井は未だにワカメヘアのまま（気に入ったらしい）で論外、清水は体格の良さが災いして、カジノにいる用心棒に見える。他の連中も高校生であるが故に、スーツに着られている感が拭えない。やはり、執事喫茶は無理があつたのではなからうか。

「でも、なおくんはまともに見えるよ？」

「見えるだけじゃなくて実際まともだからな」

「はいはい」

「義人、軽くないすな」

失礼な奴だ。

「しかし……」

「どうしたの？」

「タツミは違和感があるな」

「スーツ姿だからじゃなくて？」

「それもあるが、それ以外にもなんか変なんだよ」

男性用のスーツを着ているのに変に見える理由……ああ。

「胸か」

「……なおくんのエッチ」

「違和感の原因を探し出したただけだ。やましいことはない」

「……………」

なんだろう。タツミの視線が冷たい。

「三井ってそのことに今さら気付いたのか？」

「俺たちは一番に目がいったのに……………」

「杉田、三井って去勢手術でもうけたのか？」

「いや、旦那が女子に関心がないのは、主にトラウマのせいであつて、肉体的なもののせいではない」

「トラウマ？」

「逢ってきた女性のほとんどからひどい目を受けてきたらしい。旦那の話によると」

「例えば？」

「実の姉によるスキンシップの名を借りたDV」

「……………」

「幼なじみによる毒殺未遂」

「……………」

「後輩による罵倒」

「……………もういい、やめてくれ」

「でも、三井が嫌われてるわけではないんだよね？」

「むしろ逆。愛情の裏返し？」

「疑問形なのが気になるな」

「俺女子じゃないし」

「それもそうか」

「……はっはっは」「……」

……どうしてだろう。タツミからは軽蔑されてる気がするし、あそこで笑ってる男子連中からは馬鹿にされている気がする。

「なあタツミ、どうしたんだよ」

「……別に」

「何かまずいことでもしたか？したなら謝るが」

「……少し不快にはなった」

「すまん」

「……そう思うなら行動で示して」

「……なにか奢るか？」

「奢らなくてもいい。ただ……」

「ただ？」

「この執事喫茶のプレオープンのとき、なおくんがエスコートしてくれる？」

「……そんなことでいいのか？」

プレオープンとは、文化祭の前に一度実際に執事喫茶を開いてみる実験のことである。クラスで半分ずつ分かれて、提供する側とされる側でどのような問題が浮かんできるかを試すために行われる。その中でのエスコートだ。普通にサービスすればいいんだろ？それくらいならお安い御用だ。

「約束だよ？」

「男子相手にやるよりかマシだ。喜んでやってやる」

「……なおくんでもそんな風に思うんだよね？」

失敬な。俺を同姓愛好者だとも思ってるのか。

「だってなおくん、女子に冷たくない？」

「女子が俺を嫌ってるんだろ」

逆だ、逆。

第三十六話 交渉

執事喫茶＞KENZO'S BAR＜（あくまで酒は販売していない。調子に乗った義人^{バカ}たちが「響きがいいから」という理由で名付けた）プレオープンの日（土曜日）、俺たちは休みだというのに北高の教室に集まっていた。まだ暑いのにスーツ着用で。

「あちい……」

「旦那、準備してこなかったのか？」

「準備？」

「背中に冷えピタ張るとか、濡れタオルを持ってくるとか」

「しまったな。俺もそうすればよかった」

「一ついい経験になったな。本番で準備してなかったら悲惨な目にあうところだった」

事前に一度実践しておくのはいい意見だったようだ。現に今、俺は一つ学んだことだし。

「こんな感じで改善点を見つけていくことが今日の課題だな」

「三井、何言ってるんですか」

今日はあるはずのない声が聞こえてきた。

「今日の課題はいかに私の暇をつぶせるか、です」

「……健三さん、休みだというのになぜ学校に？」

面倒臭がりに定評のある健三さんらしくもない。

「休みくらい家でゆっくりさせると、娘に追い出されました」

「……なんかすいません」

世間の親と同じ哀愁が漂ってる。この話に触れるのはよしておこう。

「さあ、早く私の喫茶店を開店させてください」

「……健三さんの喫茶店なんですか……」

確かに店名からしたらその通りなのだが。何もしてない人物が店長ってそれでいいのか。

「ああ、でも不祥事……食中毒とか起こしても責任は取りませんから、起こさないよう注意してください」

……好意的に解釈しよう。食中毒とか起こしたら駄目だ、自分の尻拭いを人にさせるなという高潔な教えなんだ、きつと。

「ちなみに売上の九十パーセントは名前の使用料ということで私の懐に……」

とんでもないこと言いたしたよこの人！

「というのも考えましたが、喫茶店のメニュー食べ放題というので妥協しましょう」

「……いいのか、義人」

「健三さんには賄いとか、作り置きで古くなったやつとか売り物以外を提供する……のでは駄目ですか？」

調理係代表の義人には、譲れない一線があるようだ。……さて、

健三さんの返答は？

「ちつ、しけてますね……しかしいいでしょう。感謝しなさい」

なんか理不尽に威張られた気がする。

「旦那、健三さんだから仕方ない」

「それもそうだな」

健三さんに文句を言っても始まらない。

「さあプレオープンの開始です。前半に仕事が入ってる人は準備してください」

「……はい、健三さん」「……」

「店長と呼びなさい！」

「……はい、店長！」「……」

……健三さんが取り仕切ってる。この人でも楽しんでるんだ……よな？

第三十七話 確認

「……いらつしやいませ、お嬢様、旦那様」「」

「こちらの窓側の席でよろしいですか？」

「ご注文をお伺いしてもよろしいですか？」

「苺パフェをお一つですね、かしこまりました」

プレオープンを開始して三十分。ミスをしながらも順番に客の相手をした結果、ようやくウエイター業務に慣れてきた。

「旦那、そんな仏頂面で注文聞いてどうするよ。もつと笑え」

「そんなこと言われてもな……」

「執事なんだから、使える人に喜んでもらわないと。だからスマイルスマイル」

そう。ウエイター業務には慣れたものの、執事という業務には慣れていない。執事喫茶という職種柄、相手を喜ばせなくてはならないそうだ（数人の腐女子が激しく主張）。特に俺は目を付けられているらしく、相手をした客の十割にもつと笑えと言われている。

「仕事をしてるのに笑うつてのもどうかと思うが……」

「どの仕事だって不機嫌な相手に対応してもらいたくはないだろ」

「別に不機嫌つてわけじゃない」

単純にミスをしないうちが張ってるだけだ。

「それでも気持ちに余裕を持てよ。緊張のし過ぎはミスにつながる」

「……わかった。次の客からはにこやかに対応する」

「よし。ああそれとだ」

「なんででしょうか旦那様？」

「このパフェ作った奴呼んで来い。クリームの量が多すぎる。適正な量で提供しないと不公平になるからな」

「……かしこまりました」

調理係代表としてしっかり仕事もしているようだ。感心。

「しかし笑って対応するのか……馬鹿にされていると思われないか？」

「問題ない。どう思われるかどうかの確認も、このプレオープンの目的の一つだ」

近くにいた原君に相談したら、このような答えが返ってきた。なるほど。俺はミスをしないうよう神経質になっていたが、それは間違っていたな。ミスするのが目的と考えれば問題ない。

「ありがとう原君。では次のお客さんの応対をしてくる」

「礼には及ばん。それと、三井にお嬢様から指名がかかっている」

「ん？誰だ？」

「石川さんだ」

ああ、もうタツミの番が回ってきたのか。よし、ここはタツミに実験台となってもらおう。タツミなら多少のミスも許されるだろうし……ただ、改善点を最後に聞かんとな。忘れないようにしよう。

「わかった。あと一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「原君は執事喫茶どう思ってる？」

常識人に近い原君の意見を聞きたい。

「……儲かりそうだから妥協してる。執事をやりたいとは思わんかったが」

うん、現実的な意見ありがとう。原君は執事似合っていると思うんだがなあ。

「冗談だろ。知らん人のために何かするのは性に合わん」

さいですか。

第三十八話 立場

……しまった。タツミに呼ばれているというから、てつきり一人で座っていると思つたのだが、予想に反して三人で座っていた。一緒にいるのは副会長と書記の人（名前は忘れた）だと思う。転校して二週間も経つてないのに、仲良くなつたようで宜しいことだ。その社交性は見習いたい。

「お呼びでしょうか、お嬢様？」

まずは用件を聞こう。話はそれからだ。そう思つて、できる限りにこやかに用件を尋ねてみた。……気持ち悪いとか言われたらどうしようか。

「なおくんが笑うなんて珍しいね」

そこに食いつく前に用件を言つてくれ。恥ずかしいから。

「うんうん、三井君はいつも笑つてた方がいいよ。杉田君と石井君みたいに」

四六時中頭の中が花畑になつてゐる奴らと一緒にするな。あいつらは気苦労をしない体質なんだ。もしくは

「身だしなみも常に整えるようにしようよ。佐伯さんが原石とか言つてたのも、今なら納得できるし」

あなたは一学期の間、俺のことをなんだと思つてたんですか。

「佐伯さんも見る目ないな」と

失礼なこと言つてゐるって自覚してますか？

「で、用件だけど……」

ようやく本題に入るのか。

「二人が聞きたいことがあるんだつて」

この二人が？ 接点なんてほばないに等しいのに。

「朋ちゃん、聞きたいことがあるんでしょ？」

書記の人は朋がつく名前のようなうだ。どうでもいいけど。

「うん」

「なんですか？」

「三井君って彼女いないんだよね？」

「生まれてこの方、一度もできたことはありませんが何か？」

今の立場（仕える側と奉仕される側）を利用したいいじめが発生します。

「じゃあ辰美ちゃんのことどう思ってる？」

「ちよつと、朋ちゃん！？」

はい？

「質問の意図がわかりかねるんですけど」

「だから、辰美ちゃんのこと好き？」

「んー！んー！」

タツミが何か叫ぼうとするが、口を塞がれている。……ほんとに仲が良いのかわからんな。

「……まあ、嫌いではないのは確かです」

「……………」

「じゃあ好きなんだね？」

なぜそう短絡的になるんですか。

「……そんなこと言えません」

「なら女性の中で何番目の存在？」

「は？」

「ああ、名前は言わなくていいよ」

そういうこと言ってるんじゃないんですけど。

「三、二、一、はい！」

「……五番以内？」

「だってさー！」

「……………」

もう口は塞がれてないのに、タツミがさっきから黙ったままだ。

「どうかなさいましたか、お嬢様？」

「……なんでもない」

「それでは御注文を伺ってもよろしいですか？」

「……紅茶で」

「お二方は？」

「私たちはコーヒーで」

「かしこまりました」

さて、バックに伝えるか。

「ああそうそう」

「なんででしょうか？」

「紅茶には愛情をたっぷり入れてあげて！」

「そのようなサービスは行っておりません」
「スマイル0円とかじゃないんだから。」

第三十九話 具体策

「プレオープンで気が付いたことを挙げていってー」

「さあどんどん挙げていってくれ」

前後半のプレオープンも終わり、俺たちは反省会（司会は義人、石井のコンビ）を行っていた。

「そうだな……注文を取りに来るのが遅い」

「執事係ファイト」

「それで終わりかよ！解決策を出し合うのが目的だろうが！執事係に負担を押し付けるな！」

「そうだよー。もっと具体策を立てないとー」

「そうだよな！確かに執事係の不慣れもあるが、カバーできる点があるはずだ！」

「執事係が二倍速で動くってことでおっけーだよなー」

「全く具体策じゃない！」

「なんかそういうアイテムありそうだな」

「ねえよ！現実世界には、そう都合のいいアイテムねえよ！」

「ある薬を使えば数十倍になるが……」

「マジで！？」

「パフェの甘さが」

「必要ない！今の話の流れからわかるだろうが！」

「ちなみにその薬品は戦後砂糖の代わりに使われていて、入れすぎると味覚が馬鹿になるほどだったそうだ」

「怖いよ！戦後でないと許されないような薬品だなおい！そしてなぜその薬品の話を今ここでする！？」

「あまり夢ばかり見ているようならお灸を据えようかと」

「リスクが高すぎる！」

「まあ、客の出入りをチェックする係も必要だな。シフトがきつくなりそうだが致し方あるまい」

「健三さんが手伝ってくれば楽になるんですけど……」

「手伝うわけがないだろう、あの健三さんだぞ」

その健三さんは、教室の隅で居眠りをこいている。

「……頼んだところで使えそうにないような……」

「係を増員するってことでいいな」

皆異議はないようだ。……あの健三さんの姿を見れば頷くしかないが。

「他に意見は？」

「執事の衣装がバラバラなのも気になるな」

スーツは各自で持ってきているため、色からメーカーまで揃っているものが一つとしてない。確かにこれは客から見たら不自然かもしれない。

「どうすればいいと思うー？」

「別に気にしなくてもいいだろ」

「いや、せつかくやるんだから、少しくらい統一感を持たせたい」

「方法はないものか……」

「なんか一つくらい費用から金出して買おうぜ」

「何を」

「執事に必要なもの……」

「蝶ネクタイはどう？」

「それだ！」

「よし、それでいいか？」

異議なし、と声を揃えるクラスメイト達。団結感があるのはいいことだ。

「それじゃ、誰か買い出しに行ってくれる人はいるか？明日にでもめんどいな」

「今日わざわざ出てきてんだから、明日くらい休ませてよ」

「慈善事業じゃあるまいし」

うん、こっちのやる気のなさでも一致団結してるな。団結感があるというのも困りものだ。

「それならー、執事係から代表者二人出してー」

「どうして執事係？」

「一番お客さんの目につくからねー」

「それもそうか。しかし……」。

「それなら代表者は男女二人で」

「男子の買い出しは俺がやる!!」

「清水、お前は大道具係だ。お呼びでない」

男女二人のところに反応するなよ。切なくなるだろ。

「男子は三井でいいねー」

「なぜに!？」

面倒臭っ！

「旦那、執事係代表だろ」

強制で決められた代表だというのに理不尽なことだ。

「それじゃあー、女子は誰か立候補いるー？」

「石井くーん、辰美ちゃんがやりたいそうでーす」

「そ、そんなこと言ってないって!」

「えー？三井君が決まってからそわそわしてたじゃん？」

「それでは石川さんで決定でいいかね、諸君？」

なんだ義人、偉そうに。それでもクラスのほとんどが賛成したので（清水は断固反対の様子、タツミは俯いたまま何も言わず）良しとしよう。

「なんか悪いな、タツミ」

「別になおくんは悪くないよ」

そうだな。悪ノリした連中がいかんだ。

「そんなに人に面倒を押し付けるのが楽しいかね」
「性格がねじ曲がってるな。人のこと言えんけど。」

「……そういう解釈だったのね……」
なぜ呆れる。

第四十話 デジャヴ

「なんですと!？」

「ああ、旦那と石川さんが明日二人で買い物に行く」

「あの朴念仁が!？石川先輩が誘ったんですか!？どうなんですか
そのところは杉田先輩!」

「色々と事情があつてな。本人たちに聞けよ」

「……なぜそんな情報を私に？」

「イツシーと俺とで旦那をつけるから。あの二人の邪魔をしない約束ができるなら集合場所を教えよう」

「……目的地は教えてくれないんですか？」

「そしたら一人で暴走するだろ、保護者ちゃん」

「……否定はしません」

「そしたら面白い展開がなくなるからな。まあ気が向いたら後で掛け直して」

「その必要はありません」

「というと？」

「……邪魔をしないで見てるだけでもいいです。このままじゃ気になつて眠れません」

「わかった。じゃあ俺たちの集合場所は……」

集合時刻になつても待ち合わせ相手が来ないというのは、イライラするものである。そこそこ几帳面なタツミならこんなことはないだろうと思っていたが、予想が外れた。こんなことなら読書用に本でも持つてくるんだつた。

「もしかすると道に迷つてるのか？」

あり得る話だ。まだこの土地に来てから一ヶ月も経っていないの

だから。ましてや駅周辺など混雑していて、どこが西口かなどわからんかもしれん。

「仕方ない。俺が動くか」

注意しながら周りを探せば見つかるかもしれない……と思って角を曲がってみた。

「……いた」

そこには男に絡まれているタツミの姿があった。……デジャヴ？前にもこんなことがあったような……。

「だからさあ、合コン一緒に来ない？」

「そうそう、一人女の子がキャンセルしちゃって」

「待ち合わせ相手がいるんです」

「男でしょ？ほっとけばいいって」

「……ずいぶん勝手な物言いをしてくれるな……」

「あ、なおくん」

「なんだ？お前が待ち合わせ相手か？」

「お前一体この子の何なんだよ」

「答える義理はないな」

「うぜえな、お前」

「君たちほどではないな」

「はあ？調子乗ってんじゃねえぞ？」

「自覚すらないとは重症だな。脳外科に行くことを推奨する」

「ふざけんな！」

少しばかりからかってやってただけで殴りかかってきた。もっともかすりすらしない、恥ずかしいものだったが。

「周りが見えないとは……馬鹿もここに極まれり、だな」

「何言ってんだてめえ！」

「ギャラリーがいるのがわからんか？」

ここは駅前。喧嘩が起れば人が集まってくることなど考えずともわかりそうなのに、馬鹿なやつだ。

「ちっ、覚えてろよ！」

そう言つてナンパ男二人は去つていった。まさか「覚えてろよ！」などこの耳で聞こうとは思わなかった。いるんだな、そんな奴。

「なおくん、大丈夫？」

「何が」

「……今、殴られてたじゃない」

「当たつてないわ、あんなの」

「なおくんつて格闘技やつてた？」

「いや、全然」

「それにしても慣れた様子だったけど……」

「……あれの五百倍は強い相手に苛められてたからな……」

いかん、目にも写らない速さの正拳突きを思い出すだけでちびりそうになった。おのれ姉上、記憶だけでダメージを与えるとはどれだけ俺のことが憎いんだ。

「……なおくんも苦労してるんだね」

苦労させられた相手がうちの姉ちゃんだと知ったら、タツミはどう思うのだろうか。昔は慕ってたし……信じなさそうだ。

「まあそれより、買い物が終わらせるぞ」

時間がもつたいない。

「そのまえになおくん、一つだけいい？」

「なんだ？」

忘れ物でもしたか。

「……助けてくれてありがとう」

……別に。当然のことをしたまでだ。

第四十一話 普段着

三軒ほど服飾店（洋服の 山など）を回ってみたものの、手ごろな値段で四十個もの発注を一週間以内にこなせる……という都合のいい蝶ネクタイは見つからなかった。蝶ネクタイ自体にあまり需要がないせいだろう。分析するのはいいが、どうすればいいかは思いつかない。困ったものだ。

「なおくん、他にお店は知らないの？」

「もともとそういう店には立ち寄らないから……」

「じゃあいつも服はどうしてるの？」

「親に買ってきてもらってる。主にユ クロとかで」

安くて長持ち。なんていい響きだろうか。

「……もつと身だしなみに気を使おうよ……」

「普段は制服で、外出するのなんて図書館か本屋くらいなもんだし。気を使う相手もないから問題ない」

「もつと青春を謳歌しなよ」

「十分しとる。人によって人生の楽しみ方など千差万別なのだから、その言い方はおかしいな」

「……まあいいや。今は」

あとでまた小言はあるのか。

「蝶ネクタイならどんなのでもいいんでしょ？ 予算があるから、安いのにしないといけないだけで」

「そうだな。よし」

困った時の義人頼みだ。電話して有力な情報を得よう。

「……ん？」

こんな時に限って出ない……というより電源が切つてあるのか？ いつもは迷惑も考えずに掛けてくるくせに、自分では取らないとはなんて奴だ。

「しまったな……義人が駄目となると……タツミは知らないよな？

いい店とか」

「うーん、まだ来て一ヶ月も経ってないしね」

そりゃそうか。むしろそれで俺より知ってたら俺の十年近くがなんだったんだって話になるわな。

「でもほんとに知らないの？」

「知ってるのと調べた店は全部当たった。これでないならみんな納得……」

「どうしたの？」

「……いや、一つ思い当たる個所があった」

そんなわけでたどり着いたのは、以前保護者と一緒にきたアクセスサリーシヨップ。

「ダメもとで当たってみた割にはいいものがあつたな」

蝶ネクタイといってもそう畏まったものではない、なおかつ安価なものが見つかった。しかも発注するまでもなく倉庫（別の場所にあるらしい）に在庫があるそうで、明日学校に届けてもらえることに。いいこと続きで罰でも当たりそうだ。

「ここでこのミサンガ買ってくれてただね」

そうやって手首を上げると、ミサンガが巻きつけられていた。せっかくプレゼントしたものだ。長く使ってやってくれ。

「ミサンガが切れると願いがかなうって言うから、あんまり長くは使いたくないな……」

「何か願掛けしてるのか？」

「……なおくんはどうなの？」

質問に質問で返すとはいかん奴め。

「とりあえず平和な日常を願ってある」

でも答える俺。立場が弱いことに起因するわけでは決していない。

……決してない！

「頑張って生きようね、なおくん」
慰め方がひどいぞ、タツミ。

第四十二話 得意分野

発注も終わり、頼まれごと他にはない。予想より多少時間はかかったものの、ようやく俺は晴れて自由の身となった。行く手を遮るものは何もない。

「じゃあな、タツミ。お疲れさん」

「ちよつと待って!」

「なぜだ。俺にはこれから崇高な使命があるというのに」

「用事があるの?」

「図書館で>楊令伝<の最新刊を読まねばならんだ」

「暇なんだね」

失敬な。俺にとってはこれ以上ない有効な時間活用法だ。

「それなら、町の案内してくれない?」

「誰か女子に連れて行ってもらったんじゃないか」

俺の記憶では、転校初日に例の副会長と書記が案内するみたいに言っていたはずだが。

「人によつて案内する場所は変わってくるでしょ」

「この田舎都市（野菜の生産量日本一）に特別案内するところがあるとしても?」

「案内する場所がなくていいんじゃないの?」

……笑ってはいえるものの、タツミに引く気はないようだ。子供の頃より頑固さが増している、確実に。

「……いいだろう。それなら俺が知ってるいい場所に連れてってやる」

「本当に?」

それがタツミにとっていい場所かどうかはわからんが。

数分後、目的地に辿り着いた。

「……ここは……本屋だよね？」

「見ての通りだ」

「……どこがいい場所なの？」

まるで俺が立ち読みするために来て、それを案内と言って誤魔化そうとしている。そう言いたげだな。まあその積もりが全くなかったと言えば嘘になる。かといって決してそれだけではない。

「見る、この有名漫画家のサインの数々を！」

新装開店した時に、こういうコネかは知らんがこの店に大量に漫画家のサインが届けられた。

「有名漫画家って……私が知ってる人にはないと思うけど……」

「タツミは>あらぬけいいちく先生を知らんのか？」

コンプティークで>日常くという素晴らしい漫画を連載してる、注目度ナンバーワンの漫画家だというのに。……そのうちアニメ化しないかなあ……。

「それ以外にも>美氷かがみく先生（らきすたの作者）のサインとか色々あるけど」

「誰？」

知らないようだ。この価値がわからんとはもったいない奴。

「まあそれを抜きにしても品揃えがよくていい店だ。ゆっくり立ち読みして行け」

「……店に迷惑でしょ……」

「いや、月にかんりの金を落としてるから問題ない」

「問題あるでしょ……」

そんなことはない。だつてほら。

「おつ、三井君じゃないか。いつも鼻屑にしてもらって悪いねえ」

「まあ、こつちもいつも立ち読みさせてもらってますから」

「立ち読みくらい三井君の買った本の総額に比べれば安いもんだよ。もちろん買ってくれるに越したことはないが」

「全部買つてたら破産しますよ」

「それもそうだな。ところでそこのお嬢さんは三井君の彼女かい？」

「か、彼じよ……！？」

「違いますよ。新しく越してきた知り合いです」

「そうかそうか、ぜひこの店を御贖に。じゃあいつもながらいい人だ。」

「おい、タツミ。店長の許可も下りたことだ。これから立ち読みするから別行動な」

「……………」

なぜかフリーズしているタツミだが、この本に囲まれた空間ならそのうち基に戻るだろ。楊令伝は立ち読みで済ませてしまおう。

俺は充実した午後（四時間立ち読みしっぱなし）を過ごすことができ、充実した気分で帰路に就いたのだった。めでたしめでたし。

……あれ？何か忘れてるような……。気のせいかな。

第四十三話 希望

「ごめん、待った？」

「うっんー、私も今来たところー」

「……人を待たせておいて、コントをするとはどういう見ですか、杉田先輩」

「ここはお約束だろ。保護者はどうしてカリカリしてんだ？」

「それはもうー、三井が女子と二人きりで遊びに行くからだろうねー。ビバ青春ー」

「なるほど。嫉妬か」

「なんとでも言えばいいです。あとビバってなんですか。いつの時代の産物？久しぶりに聞いて混乱しましたよ」

「石井、ところでお前はどれくらい前に来た？」

「僕は集合時刻十分前くらいかなー。その時に古木さんはもういたけどー」

「……張り切りすぎだろ」

「集合時刻の十五分後に来た杉田先輩はふざけ過ぎです」

「ちなみにどれくらい前にきた？」

「一時間前です」

「……受験生がそれでいいのか？」

「勉強よりも大切なことがあるんです」

「その心はー？」

「人生に関わってくるかもしれないことです」

「おお、燃えているな」

「惜しむらくはー、その熱意に三井が気付いてないってことだねー」

「……先輩は、本当に私の気持ちに気づいてないんですか？」

「ほぼ百パーセント気づいてないだろうな」

「それが三井だよー」

「はあ……どうすれば気づいてもらえるんでしょうか？」

「知らんよ。それに知ってたとしても、俺としてはこのまま三角関係に移行するのが一番面白い展開だから、何も言わん」

「最低ですね。可愛い後輩のために何かしようとは思わないんですか？」

「何が旦那にとって一番幸せかわからん今、俺にしてやることは何も無い」

「僕はー、みんなが幸せになるように動くつもりだよー。だから今は何もしないで傍観ー」

「……いいこと言ってるんだかいなんだか……要は自分の気分しだいで行動するんですよ」

「その通り」

「そうだよー」

「……わかりました。お二人の先輩には手を貸してもらいませぬ。自分の手で先輩の心を振り向かせてみせます！」

「おおー」

「いい覚悟だ」

「さあ、その野望のために今日はしっかり観察してやります」

「おもしろい展開になるといいな」

「そうだねー」

「少なくとも、私とお二人では価値基準が天と地ほど違うので、そのおもしろい展開とやらにならないことを望みます」

「そんなー。僕たちはただー、純粹に三井と石川さんの距離が縮まらないかなーって言ってるだけなのにー。あわよくば第二のステップへとー」

「どこが純粹なんですか！あと第二のステップって!？」

「にやんにやんするステップだな」

「いつの時代の人間ですか！あとステップが進み過ぎです！」

「意味知ってるじゃん」

第四十四話 巻込

「おお、見る二人とも。例によつて旦那がToo overに巻き込まれてるぞ」

「なんかアクセントが違いますか」

「気にすんなよ保護者ちゃん」

「今回は石川さんが巻き込まれた側っぱいけどねー」

「どうせ先輩の能力でトラブルを呼び寄せたんでしょう。全くもつて迷惑体質な人ですね、あの先輩は」

「旦那がどんな星の下に生まれついているのか調べたら、論文が書ける気がする」

「大学の卒業論文の時にはー、三井に協力してもらおうかー」

「そんな戯言はどうでもいいです」

「杉田ー。まずくないー？三井がナンパ男相手に喧嘩売ってるよー？」

「加勢しましょうか」

「この状況で出てつたらー、いくら三井でも怪しむでしょー。でもどうしようかー？」

「安心しろ、旦那は何の考えもなしに喧嘩は売らん」

「……みたいですな。人が集まってきました」

「なるほどー。ストレスを解消して問題も片付けるー石二鳥の作戦だったわけだねー」

「それは違うな。旦那の性格からして、ストレスを馬鹿にぶつけるのが一番の目的だろう」

「……人を集めたのがついですか」

「まあ誰も怪我とかがなくてよかったよー」

「よくないですよ！助けられて石川さんちよつとほほ染めてるじゃないですか！危険ですよ！」

「落ち着け。まだ恋愛感情は抱いてないらしい。……フラグはたっ

たが」

「旗をたてるの大好きだもんねー、三井はー」

「そうだな。しかしこれで安心して旦那と石川さんのデートが見れる」

「やっぱりデートだったんですか！？妨害してきます！」

「落ち着きなよー」

「約束は守れよ。そうでないと旦那に一部始終を報告する」

「……わかりましたよ」

「あと心配しなくていいよー。この買物はただの文化祭の備品買い出しにすぎないから」

「そうそう」

「男女二人きりで買い物に行く時点で>ただのくとは言えません」

「保護者ちゃんだって旦那と二人で出掛けたじゃん」

「どうしてそれを！？」

「おもしろそうな出来事には便乗する。それが俺たち北高生」

「最低です！あの時も見てたんですか！？」

「黙秘するミサング」

「僕の口からは何も言えないよミサング」

「語尾になんかついてます！間違いなく知ってるでしょう！？」

「知られて困るようなことしてたのー？」

「……それは……何もなかったんですが……」

「映画館であと少しだったのにな」

「三井の空気の読めなさは偉大さすら感じるよねー」

「聞いてたんじゃないですか！余計なお世話です！」

「あと最低で……その行為を今まさに君もしてるわけなんだが」

「僕たちは最低な行為とは思わないけどねー。誰も損しないしー」

「……私には事情があるから仕方ないんです！」

「政府高官じゃないんだから。言い訳しない」

「良心の呵責を覚えるあたりまだまだだねー」

「……少なくともその一線は越えないようにします」

第四十五話 電源

「旦那たちは真面目すぎだな。もっと小物の店とか回った方が、安くて意外な掘り出し物とか見つかるかもしれないに」

「確かに」。洋服の青とかで文化祭用の蝶ネクタイを探すのはおかしいよね」

「教えてあげたらどうなんですか？」

「そんなことしたら楽しむ時間が減るだろうが！」

「減っていいじゃないですか」

「携帯の電源切っておいたらー？誰かから下手に掛かってきたら厄介だよ」

「そうだな。追跡途中で掛かってきて見失ったら目も当てられん。

電源は切っておこう」

「友達なら力を貸してあげましようよ」

「保護者ちゃん、間違えるな。親友だ」

「親友なら力を貸してあげましようよ」

「親友だからこそ成長を見守ってやりたいんだよ。>ひとりでできるもんくみたいな？」

「訂正を求められた意味がわかりません」

「気分」

「……一人じゃないですよね」

「>ふたりでできるもんくみたいな？」

「どうでもいいです」

「二人とも」。三件目を出てきたところでお手上げ状態になったみたいだよ」

「はや！」

「いくら田舎都市だからといって服飾店三件で打ち止めは少ないでしょう。先輩ってもしかして店とか同じところではっかり買う人ですか？」

「もしかしなくても旦那はそうだな。趣味以外のことに関しては興味を持たないし、淡泊」

「古木さんが三井に教えてあげなよ」

「おおそれだ！旦那は保護者ちゃんに感謝。その感謝の気持ちはやがて愛へ……」

「……………（／／／）」

「保護者ちゃん、そこは「ありえませんよ」みたく突っ込んでくれ……なに満更でもなさそうな顔してるんだよ」

「……冗談だったんですか」

「結構恥ずかしいよ」

「自覚してるんだから言わないでください」

「旦那が電話してるな。誰かに相談でもするつもりか」

「杉田にじゃない？」

「まさか、このタイミングではないだろ」

「「H A H A H A」」

「二人揃ってアメリカな笑い方しないでください」

「おやおや？二人が移動を始めましたよ？」

「変なナレーション入れないでください」

「さて、後をつけようか」

「ストーカーみだいだね」

「ふへへへへへ」

「石井先輩、この方角は……」

「あそこに行くのかもね」

「二人とも！おいてかないで！ツツコミ放棄で放置するのはさみしすぎる！周りの視線も痛いし！」

「杉田先輩でも周りの視線を気にするんですね」

「そこに感心するならツツコミを入れようぜ！」

「きゃーだれかー。ここに変態がいますー」

「気持ちこもってねえ！適当にやられて余計に傷ついた！」

「だったら黙ってつけますよ」

「……はい」

「では、れつつら」

「石井は悩みなさそうでいいな……」

第四十六話 裏工作

「予想通りー、例のアクセサリーショップに来たねー」

「さて、旦那と保護者ちゃんの思い出の地を、他人に紹介された今の心境はいかに!？」

「……先輩の役に立てて光栄なような……もつと別の場所はなかったのかと腹立たしいような……って何言わせるんですか!」

「なるほどねー。でも三井、助かっただろうからいいんじゃないー?」

「そうそう。あそこは結構いろんなものが揃ってるから、旦那がまた世話になるかもしれん。恩を売ったと考えれば悪くないんじゃないか」

「それもそうですね。この恩を理由に何かできないですかね」

「文化祭でデートでもしてもらえばー?」

「で、でーと!？」

「それはいいな。あえて旦那と石川さんの休憩時間をずらすよう仕向けてやろう」

「ち、ちよつと待つてください!」

「三井が誰かと約束することもないだろうしー、誘えばホイホイついてくると思うよー」

「先輩はゴキブリですか!」

「オイオイ馬鹿言っちゃあいかん。確かに何度殺されかけても死ななかった生命力の強さは、近いものがあるかもしれないが」

「……それは私も悪いことをしたとは思ってますよ」

「安心しろ。旦那は少なくともあと二名から同様に殺されかけてる」
「私の知らないところで、先輩はどれだけ凄惨な人生を送ってるんですか!」

「それでも生きてるって素晴らしいことだよねー。後ろ向きな人生だけどー」

「石橋を叩いて渡つても、妨害が入って悲劇にあつ不幸体質だから仕方ない」

「先輩が可哀想になつてきました」

「だからー、古木さんがたつぷり慰めてあげなよー？そうしたらコロッと逝くかもしれないよー？」

「死んだら意味ないじゃないですか！」

「旦那と石川さん、また移動を始めたな。もしや見つからなかったのか？」

「そうかもねー。そしたらさっきの計画は中止ということぞー」

「……中止ですか」

「残念そうだな。やつぱデートしたかったのか」

「そんなことないです！」

「そうー？それなら三井と石川さんを一緒に休憩時間にするけどー」

「どうしてそうなるんですか！？」

「なら旦那とデートするか？」

「二択の内容がひどいです！」

「いえす、おあ、のー？」

「……………」

「沈黙は肯定の証か」

「……………」

「早くしないと二人とも行っちゃうよー？」

「……………」

「さあ答えは！」

「………お願いします……………」

「よしキタ……………」

「セッティングは僕たちに任せてー」

「………誘うのくらい自分でやります……………」

「積極的だな！いいぞいいぞ！」

「答えも出たところでー、追跡を続けようかー」

「……なぜに本屋？」
「旦那が来たかったんだろ」
「そうでしょー」
「立ち読みしながら答えないでください。先輩が気付いたらどうするんですか」
「旦那が本屋で他のことに気を取られるなんてありえん」
「その通りー」
「……まさかこのまま流れ解散ですか」
「そうなるな」
「お疲れー」
「……みんな何してるの？」
「……！石川先輩！」
「立ち読みだけど」
「右に同じー」
「……少しの動揺もないところに大物さを感じさせます」
「何か言った？」
「いや、何も」
「そう……。ねえ、今ひま？」
「暇といえば暇ですが」
「それなら近くの案内とかしてくれない？古木さんとの親睦も深めたいし」
「構いませんが」
「よかった！なおくんに言ってもここにだけ連れてきて終わりにされちゃったから」
「それでこんなところに来たんですか」
「じゃあ、案内してくれる？」
「はい。まず安いカラオケの店ですが……」

「杉田！。石川さんと古木さん行っちゃったよー」

「別によくね」

「そっだね！。じっくり読書でしようかー」

第四十七話 反抗期

ここは山本家。せつかくの休日、三井のクラスの担任である山本健三は特にすることもなくだらだらと過ごしていた。

「父さん。休日くらいどこか出かけたらどうですか」

「せつかくの休みだからこそ疲れを癒すでしょう」

「常日頃から疲れる行動も取ってないのに何を言ってるんですか」

「やれやれ。娘が反抗期のようなのです。口の悪い性格は誰から遺伝したんでしょうか。つい先日まではおしめも代え粉ミルクも作ってあげていたというのに、時が経つのは早いものです。」

「まあ早い話、勉強の邪魔なので出ていってください」

反抗期です。親の威厳はどこへ行つたのでしょうか。

「自分で言うのもなんですが、静かにしてますよ？なんならテレビも消しますし」

何が悲しくて二日連続で外へ出なければいけないのでしょうか。私の家なのに。

「大してお酒に強くないのにちびちびと高い酒を飲まれているのが散ります。いつの間にか寝てる時もありますし」

「自分の部屋で勉強すればいいじゃないですか」

「自分の部屋だと集中できないんです」

困った娘です。しかし受験生相手に向きになっても仕方ありません。大人の対応をしましょう。

「では書斎でぐっすり眠ることにしましょう」

目的もなく外に出ることほど、時間の無駄もありません。

「親が駄目だと反面教師となっていていいですね」

嫌みを言われたようですが気にしないようにしましょう。別に構いませんし。

「ところであなたはどこの高校を受験するつもりですか？」

「北高ですが」

「よりによってうちの高校ですか。何故に？」

「市内一の進学校ですから」

「そういえばそうでしたね。我が娘は勉強はそこそこできるのですた。

「将来を考えるなら私立でも構いませんよ？」

「勉強するのにわざわざ高いお金を払う必要もないでしょう」
「いい心がけです。」

「ただでさえうちは無駄に高いお酒を好んで買う、浪費癖のある大黒柱がいますから」

「早く反抗期が終わってほしいものです。一々親に突っかかってこなくてもよさそうなものですが。」

「ところで、文化祭には見学に来るのですか？」

「一応聞いておきましょう。」

「行きます。校内の見学にもなりますし、来年からは私も参加することになるでしょうから」

「自信過剰ですね。ないよりあった方がいいですが、程度をわきまえるべきでしょう。」

「父さんのクラスは何をやるんですか？」

「執事喫茶だそうです」

「我がクラスながら意味がわかりませんね。それがまたいいのですか。」

「気が向いたら行きます」

「そうですか」

「無理に勧誘する必要ありませんし。自主性を尊重しましょう。」

「では、本格的に勉強を始めるので出て行ってください」

「大変ですね。そんなあなたにこれを進呈しましょう」

「親からの気持ちのこもったプレゼントです。」

「元氣ハツラツですか？」

「わざわざリポビンドをありがとうございます」

「礼には及びませんよ。さあ、飽きるまで寝るとしましょうか。」

第四十八話 悪質

開催まで一週間と迫った文化祭、それに続く体育祭。しかしこの休みの間に、思わぬアクシデントがあったようだ。

「どうしたんだ清水！？松葉杖なんか突いて！？」

「……ラグビーの練習試合でな……」

話を聞くと、日曜日に行われた練習試合で相手に悪質なタックルをくらったらしい。俺はラグビーに詳しくないのでよくわからないが、危険なタックルとそうでないタックルとがあり、下手をすれば二度と競技ができなくなる怪我を負わせるものまであるそうだ。……見ている分には面白いが、恐ろしいスポーツだ。俺には絶対にできん。

「それで、一週間後までに治るのか？」

「絶望的だ。……くそっ！あのバック次の試合で合法的に押し折ってやる！」

無理なのか……。しかし、怪我をしたばかりだというのに復讐心に燃えている清水はある意味凄い。誇り高い戦闘民族の王子かお前は。

「大道具係のリーダーがこれだときついか……。？看板とかの製作状況はどうなってる？」

「未だ四割にも達していない。この一週間は修羅場になるな」

「執事係は手が空いてるからカバーに入るぞ」

完成できなかったら洒落にならん。どれだけ費用がかかったと思ってるんだ。何としても黒字を叩き出さんといかん。

「おお、助け合いの精神は立派ですね」

「……そういうなら健三さんも手伝ってくださいよ」

「嫌ですよ、面倒くさい」

教え子が怪我をしたのに変わらない態度、ご立派です。

「一人でも援軍が欲しいんです」

「この老体を働かせるつもりですか？私は燃費が悪いんですよ」

老けて見えても四十代でしょうが。

「まだまだ若いですよ」

「褒めても働きませんよ」

駄目か。

「三井！。健三さんに求める方が酷だよ！。自分たちでがんばろー」
それもそうだな。

「よし、看板製作分担するぞ！」

一致団結して仕事に取り掛かろうとするクラスの面々。青春だ。

「ところで旦那」

「いい気分に浸つてるところになんだ」

「清水が怪我したから、二人三脚は補欠と出ることになる」

そうだった。清水とペアを組んでたんだ。やる気こそなかったが
こうなると残念な気持ちにもなるな。せつかく練習したのに。

「それで？補欠は？」

「体育祭執行委員の石川さん」

タツミか。

「……なぜ女子？」

色々と問題があるだろ。

「補欠だからな。執行委員の旦那と石井と石川さんで適当に埋めて
る」

勝手に何してくれてるんだこいつらは。

「まあ實際けが人なんて出ると思わなかったしな……石川さんなら
いいだろ」

「よくないだろ」

清水と練習をやった感じ、かなり体が密着する。やめておいた方
が無難だろう。

「ふーん？まあ旦那がそういうならそれでもいいが。今は
今はってなんだよ。」

「もしかしたら清水の怪我也治るかもしれんし」

「本人が無理だつて言つてたろ」

「病は気から、気合いを入れればなんとかなる」

「わけないだろ」

さすがの清水も、人体の限界を超えるような真似はしない……で頂きたい。

「ヤバイ……清水ならやりかねない気がしてきた……」

「それが北高スキルなのだよ、旦那」

……常識を破るのはできる限りやめてほしい。

第四十九話 忙殺

「時間がたつのが遅く感じられますねえ、清水」

「そうですね、健三さん」

「しかしこんな時間を過ごすのは贅沢だと思いませんか？」

「俺は動かないでいるのに慣れてないので、無駄に感じるんですけど」

「そうですね、若いですねえ」

「若い？」

「年をとればわかりますよ。このように何をするわけでもない時間が一番有意義だということが」

「そうですね」

「ん？お茶菓子が切れてしまいましたね。緑茶も残り少ないですし

……誰か、持ってきてください」

「忙しいから勝手にやってください！」

今、うちのクラスは文化祭の準備で修羅場中。

「飾り付け用の備品は完成したか！？」

「まだ終わらん！あと三日はかかる！」

「飾り付ける時間がなくなるだろ！突貫作業にかかれ！」

「サー！イエッサー！」

「テーブルの数は足りるか！？」

「クラスを使えば余るくらいだ！問題ない！」

「テーブルクロスは！？」

「家から持ってこれる奴は何人いる！？」

「うちのを一枚持って行くわ！」

「私の家にあるやつも使つていいよ！」

「他にはいないか！？ないなら購入することになって費用がかさむ

からできれば阻止したい！

「仕方ない！俺んちのを使え！」

「助かる！ありがとう！」

「バナナはおやつに入りますか！？」

「糖度が高いからおやつにしとけ！」

「おい、お茶」

「だから勝手に注いでください！」

こちらら忙しくて目が回りそうだというのに、呑気なものだ。仕事ができない状態の清水に生贄となってもらってるからいいものの、健三さんはクラスの空気を読もうとしないのだろうか。

「旦那、それは違うな」

「何がだ」

「空気を読んでるからこそあの態度なんだろう」

「そうだよー」

石井も同調する。俺の周りは敵だらけか。

「張りつめた空気を和らげるためにー、わざと道化を演じているんだと思うなー」

そこまで考えているんだろうか、あの人が。

「先生！それは試食のための試作品です！」

「なら食べてもいいんでしょう？」

「どれくらい置いておけるかの実験も兼ねてるんです……ってああ！もう食べてるし！」

「味は上々です。これでおっけーでしょう」

「全然役に立たないです！どれくらい、ばさついてるかとか……」

「わからないですよそんなの」

「だから食べないでほしかったのに！」

調理係の方が悲惨な様相を醸し出している。

「義人、大丈夫かあれ」

「だいじょばない」

「それでもお前は、健三さんが空気を読んでいると？」

「健三さんの思惑を俺ごときが理解するのは百年早かったようだ」
「だろうな。」

「とりあえず……義人も一からやり直し？」

「……旦那、お互い頑張るぞ」

「絶対文化祭成功させようねー」

「実際、間に合うのだろうか……それでも間に合わせないといけない。」

「よっしゃあ！徹夜してでも今日のノルマは達成させるぞ！」

「死ぬ気でやればなんとかなるはず！」

「ああ、学校には七時までしか残れませんよ？色々と規則があるので」

「……食後の一服の最中、うれしくない情報ありがとうございます、健三さん。そういえば一応教師でしたね。……それでもノルマは達成させよう。俺もみんなも死に物狂いでやればなんとかなるはず……」。

「ぎゃあ！看板圧し折れた!？」

「……公園かどこかで製作してたら、不審者通報とかされるのかなあ……」。

第五十話 シフト

「ひやつほーい！」

「看板製作しゅーりょー！」

「自分で自分を褒めてあげたい！いやいつそみんな俺を褒めてくれ
！！」

「お前はよくやったよ！そして俺も！」

「大道具係、ヘルプの執事係ばんじゃーい！！！」

「「「ばんじゃーい！！！！」」」

俺たちのテンションは最高潮。その理由は長きにわたった看板制作の完成だけにはあらず。

「朝日が昇ってきたZE！」

「きれいな朝日だ！そしてこれから看板を運ぶと考えると鬱になって死にたくなるな！」

文化祭本番前日の朝。ここまで俺たちは一睡もせずに看板制作を続けていたのである。つまりは徹夜。地主の息子である義人のおかげで制作場所（余った空地）を確保できたため、ギリギリで間に合った。明かりが足らず色塗りに失敗したり、塗料に使ったシンナーの臭いで通報されたりとさんざんだったが、夜中にも関わらずどこからか見守っていた健三さんのフォローで事なきを得たりした。この出来事で健三さんの評価はウナギ登り、俺たちのやる気は急上昇。そうして急ピッチで進められた制作は日の出とともに終わりを告げたのだった。今日は授業はなく、丸一日準備に使えるため、このまま飾り付けに移る。この場所は少しばかり北高から離れているため運ばなくてはならないのが厄介だが、この場所がなければ完成すら不可能だったに違いない。グッジョブ義人、そしてみんな。

「凱旋帰校じゃー！熟睡してる健三さんを胴上げしながら帰るぞー
！」

「いつそ看板の上に乗せて王の帰還みたくしようぜ！」

「いいなそれ！乗せろやあ！！」

気分が高揚しすぎていたせいだろう。せつかく完成した看板が壊れることも心配せず、寝たままの健三さんを担ぎあげた。……まあ、一度圧し折れた後はかなり補強したので大丈夫だろう、たぶん。

「……旦那、終わったか……」

「義人、お前も死にそうだな……」

看板を校内に運び入れると同時に倒れ込むようにして眠りだした制作班の面々（健三さんは途中で起きて「気分はいいですが高いとこ嫌いです。降ろしてください」と言って降り、登校途中の生徒から自転車を強奪、登校。せつかく上がった評価が暴落した）。俺も寝たいが、一応トップのためそれすらも許されない。義人、石井、清水も同様だ。

「さてー、明日の予定だけどー、この時間が仕事になるからー」

「おお、忙しい俺たちのかわりにシフトを作ってくれたのか。助かる」

「それで眠くって……俺眠くて倒れそうだ」

「感謝する。お前たちを見なおした」

なんて友達思いな奴らだ。何の旨みもないのに、自主的に仕事を片付けてくれるなんて……。これで残る仕事は飾り付けのみ。

「気を緩めたら眠りそうだから、俺は早めに仕事に取り掛かる。あとは任せろ」

二人に助けられてばかりでは目覚めが悪い。俺の全精力を注いでやる！

「罪悪感が生まれたよー」

「そうだな……」

二人でまた何か話しているが、構うまい。俺が指揮をとり、徹夜していないメンバーで仕事を終わらせてやる……！

第五十一話 ハイ

「では皆の衆！カウントダウンを始める！」

「「「イエ イ！！！」「」」

文化祭当日。北高の全生徒は体育館に集まり、生徒会主催のオーピング企画に参加していた。この学校の生徒はテンションがおかしすぎると思うのだけれう。

「俺の後に続いて叫べ！五！」

「「「五！！！」「」」

「四！」

「「「四！！！」「」」

「スリー！」

なぜ急に英語！？

「「「トゥリー！！！！」「」」

そしてなぜ対応できる！？未来予知でもできるのかこいつら！？

「二ーゼロ！文化祭開幕じゃコノヤロー！！！」
にいち

「「「イエ イ！！！！」「」」

生徒会長のやつ端折りよった！そしてそれに動ぜず盛り上がってる！？相も変わらずスペックが高いなあおい！

「オーピング企画その一！ライブ演奏イン体育館！」

かつこ悪！イン体育館で！

「最初の演奏者は……サッティーアンドケンゾーのお二人だあ
！！！」

いきなり大御所だ！？？冒険しすぎだろ！？何やってるの健三さん！？

「「ドナドナドーナードーナー、仔をのーせーてー」」

テンション下がる歌を初っ端から歌わないでください！

「盛り上がってまいりましたあ!!」

どこに盛り上がる要素が!?

「「「おおーっ!!」」」

熱狂してる!?! 所々から「健三さん声が洪いぜ!」(無茶苦茶いい声だった)「サッティー宿題減らせ!」「カッラは潔くないぞ!」などの声が響いてるし。ああ、このテンションでつい言っちゃったのはわかるが、間違いなく顔を覚えられたな。サッティー、カッラの一言で珍しい笑顔が消えたぞ。南無阿弥陀仏、玉野。

「次の団体はビジュアル系バンド、Censusのメンバーだ!」

おお、意味はわからんが格好いい名前だな。

「曲目は、>アンパンマンのマーチ<!」

ビジュアル系台無し!! バンドの意味ねえ!

「」

いい声といい編曲だ! 才能の無駄遣いをするな!

この後も続々と企画が進められていった。放送部(全国大会入賞の常連)製作のミニドラマや吹奏楽部の演奏、漫才などバラエティに富んだ内容で、会場(体育館)はヒートアップ。なんだかんだで文化祭の出だしはこれ以上とないものになった。

「オープニング企画はこれで終了とする! 各自クラス企画の準備に取り掛かりたまえ!」

「「「おおーっ!!」」」

「これにて解散!」

さて、俺の活動はここからだ。出だしがよかっただけに言い訳はできない。見事に花を咲かせてやろう!

「ラフレシア?」

「そんなくっさい花咲かせたくねえよ!」

第五十二話 確認

「執事喫茶＞KENZO'S BAR＜、仕事の最終確認を行う！接客係は執事係ができる限り単独で行うこと。忙しくてどうしても回らないようなら、メールを回せ。空いてる奴が駆け付けるから。ミスがあつたらすぐに謝る。お客様には誠心誠意をこめた対応をすること！最悪クレームが発生した時には、執事長で在らせられる三井を呼べ！全責任を被ってくれる」

嫌な役回りだ。しかし誰かがやらんといかんだ。黙って犠牲者になろう。ついてない。

「調理班はオーダーの順番を確実に。メニュー作成で混雑の仕方も変わってくる……んだよな、杉田？」

「ああ、その辺はしっかり叩き込んだから気にしなくていい」

それで調理班の連中も、この一週間忙しそうだったのか。義人は料理のことには厳しいし、大変だっただろう。お疲れさん。……いや、忙しいのはこれからか。

「石井筆頭の宣伝係は、大道具係が作成したプチ看板を持って校内を練り歩いて来い。人を呼び込めるなら方法は問わん」

「本当にー？」

「……合法的なので頼む」

「了解」

どうして当然なことをわざわざ確認しているんだろうか。そして弱冠石井が残念そうなのが気になる。何考えてたんだあいつは。

「シフトは以前作成してもらったのを最終とする。仕事開始の十分前には来て、着替えておくこと。時間を間違えるな。もしすっぱかしたりしたら、石井による世にも恐ろしい制裁が下されることとなる」

「僕はすっぱかしてくれても構わないよー」

機嫌が直る石井。だから何を考えてるんだお前。何やらせるつも

りだ。しかしこの脅しは相当効いたようで、皆の表情が引き締まる。きつとこれで、誰も時間を間違えることはないだろう。結果オーライ。

「よし、これで事前確認は終了だ。健闘を祈る」

開店まであと少しと迫り、執事係のメンバーは緊張をほぐすためにも談笑していた。

「なおくと私って休憩時間バラバラだね」

「そうだな。俺がいない時の仕事は任せたぞ」

「わかった。でも残念だなあ。なおくと文化祭回ったりしたかったのに」

「いや、恥ずかしいから」

文化祭で二人でいるところを知り合いにでも見られてみる。どんな根も葉もないうわさが立つことやら。そんなことになったら俺は不登校にならないでいられる自信がない。

「旦那、そんなこと言うなよ」

「そうだよー。別に噂なんて立たないってー」

うわー、こいつらが言っても全く説得力ねえー。大体執事係に交じって来るなよ。二人とも係のトップなのに。

「でも旦那は一人で回るのか？」

「さみしくないー？」

大きなお世話だ。

「まあ司書室でゆっくりさせてもらうかな」

「ダメだよー、そんなのー」

「そうそう。俺たちに任せておけ。いいことしてやるから」

「いいこと？」

「ああ、休憩を楽しみにしとけ」

開始前に不安を増やさないでほしいものだ。

第五十二話 確認（後書き）

以前書いた美容師ですが、メイクとかする美容師さんもいるそうです（読者さんがメッセージで教えてくれました）。……偶然ってあるんですね。

五万アクセス突破しました。読んでくださってありがとうございます。

第五十三話 順調

開店早々忽ち満員 とはいかなかったものの、執事喫茶はそこそこの入客数を確保していた。初めは慣れないだろうと多めに動員しておいたこともあり、今のところ大きなトラブルは発生していない。メニューを間違えたり、釣銭勘定を間違えたりと細かなミスはあるものの、それでもフォローに回っている俺を含めた数名がミスを指摘することで悲劇までには至っていない。ちなみに入客の八割が女子、一割がその彼氏らしき人物、残りの一割はよくわからん男子となっている。話したこともない女子に執事的サービス（笑顔、丁寧な物腰、要求の対応）をするのは骨が折れる……というより心労がきつい。

「ふう……、入客が途切れないな、原君」

空いた食器を片づけながら、小声で話す俺。不真面目だろうか。

「いいことだ。それでもまだ満員でないのが恐ろしいな」

「そうだな、昼飯時になったら嫌でも増えるだろうし……」

「その前に休憩行っておきな、三井。もうすぐ時間だろ？」

確かに、いつの間にか休憩時間まであと少しと迫っていた。集中していたせいか時間がたつのが早い。

「あまり疲れてないから、残ってもいいぞ？」

特にやることも、回るところもないし。

「後で疲労が来るかもしれん。休めるときに休んどけ」

それもそうか。実際、こんな仕事やったことがないから、どうなるか見当もつかんし。

「そういう原君はまだ休憩じゃないのか？」

「ああ。俺は昼の忙しい時休ませてもらえらしい」

うわ、ズルイ。不公平だ。俺は忙しくなりそうな時間帯（最初、昼飯時、三時頃）全部入ってるのに。

「シフト作っただのは俺じゃないし」

「作ってもらって贅沢は言えんか。じゃあもう少ししたら休憩入るわ」

もつ少し頑張るか。ん？客か？

「あ、いらつしやいませお嬢様……ってなんだ、保護者か」

「先輩、私も今はお客様ですよ」

まだ営業中だった。営業モードに入らんと。

「いらつしやいませお嬢様、御注文を伺ってもよろしいですか？」

今ではこんな言葉と笑顔を躊躇いもなく提供できる。慣れってるらしい。

「……………」

「どうかなさいましたか？」

「……はっ！何でもないです！」

俺の顔を見てフリーズしたかと思ったら、急に大声で否定しようた。何なんだこいつは。

「それで、ご注文は？」

「……先輩を一人、持ち帰りをお願いします」

「お帰りはあちらの扉となっております」

「いつもは滅多に見せないさわやかな笑顔でそんなこと言わないでください！」

先に営業妨害をしたのは保護者そっちだと思っんだが、どうなのその辺。

「このクレープと紅茶のセットをください」

「かしこまりました。クレープ、紅茶セット一つ！」

「クレープ、紅茶ですね、かしこまりました！」

バックに注文を伝え、手が空いた。手持無沙汰な様子が伝わったのか、保護者が話しかけてきた。

「先輩、ちよつといいですか」

「なんででしょうかお嬢様？」

「暇ですか？」

「暇ではありませんが」

少なくとも今は仕事中だ。

「え？もうすぐ休憩ですよね？」

「なぜ知ってる」

「それは……杉田先輩と石井先輩がそんなことを言っていました」
個人情報なんて思ってるんだあいつら。

「それがどうかなさいましたか？」

「それでですね、あの……」

保護者が言いよどむ。どうしたのか。

「あの……」

うん？あ。

「一緒に文化祭回りませんか！？……っていない！？」

「お待たせしました。クレープと紅茶のセットとなります。それで、先ほどの御用件はなんですか？」

危なかった。商品が完成しているのに提供しないで、冷ましてしまつところだった。気付いてよかったよ。

「……………」

「あれ、保護者さん？どうしてそんなに怒っているのかな？顔が怖いよ？」

黒いオーラが立ち上っているようにすら見える。怖くて逃げ出したいのに立場上逃げ出せない。拷問だ。

「……先輩、休憩に入ったら私のところまで来てください」

「はい」

即答してしまった。このオーラにだれが逆らえようか。俺まだ死にたくないし。

「……それならいいです」

「……ごゆっくりどうぞ」

……おかしいな。……喫茶店ってこんなに殺伐とした場所だっけ？

第五十四話 巡回

休憩時間だというのに後輩に拉致される俺。我ながらこれからの人生がとても心配である。

「……それで、俺は何をすればいいんだ？」

恐る恐る保護者に聞いてみる。先ほどの剣幕を目の当たりにしては、俺には抵抗ができない。年下相手にこの体たらく。重ね重ね思うが、これからの人生がとても心配である。

「そんなにおっかなびつくり聞かないで下さいよ。もう怒ってませんから」

「本当か？」

それにしても表情が強張っているように見えるが。

「……緊張しているんです。……これくらい察してください……」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

それならいいけど。

「それならもう一度聞こう。要求は何だ」

理由はともかく不快にさせてしまったんだ。何かしら埋め合わせはしてやろう。

「……そうですね……一緒に歩いてるだけでもいいんですけど……」

「もう少し大きな声で頼む。聞こえん」

「独り言です。気にしないでください。デリカシーがないですよ」

それならこつちを窺いながらつぶやくのはやめてほしい。気になる。

「一緒に適当に回って、奢ってもらってことでいいです」「了解」

それくらいが妥当な線だな。財布の中身が心許無いが。

「それでは……えい」

「腕を組むな！？恥ずかしい！」

「一緒に回るって言ったじゃないですか」

「くつついて回る意味は!？」

「恥じらう先輩を見て楽しむためです」

「趣味悪いぞ!」

今日はなんだかんだ言って離れようとしなかった。

……俺、羞恥心で死ぬかもしれない。

「あそこの店はなんですか？」

「フランクフルトだな。チーズを付けただけで200円はぼったくりすぎだろ」

「そうですね。流石お祭り騒ぎ。こんな商法に騙される人がいるんですね」

「そうだな。いつもなら絶対に買わんだろうに」

「二本ください」

「でも買うのかよ!？」

「早く先輩、代金を払ってください」

「人の財布だと思って!」

言ってることやってることが違うではないか!

「あそこの出し物はなんですか？」

「お化け屋敷だな」

「……行きましょう」

「目が光ったように見えたのは、俺の目の錯覚か？」
保護者が獲物を狙う肉食獣に見える。

「入りましょう!」

「だから引つ張るなって!」

「きゃーこわーい」

「棒読み！？抱きつくな恥ずかしい！」

「真っ暗なんだから誰も見てませんって」

「理性残ってるじゃねえか！」

「ここはなんでしよう？」

「アーケードみたいだな。景品も出るみたいだ」

「あれいいですね……取ってください」

「彦にゃんぬいぐるみだと！？むしろ俺が欲しいわ！」

「この輪投げが二回入れば手に入ります」

「挑戦権は？」

「三回です」

「ハードル高っ！」

景品渡すつもりないだろ！

「楽しかったですねー」

「休憩にならんかった……」

むしろ余計に疲れた。

「楽しくなかったんですか？」

「いや、楽しくはあったよ。お前といると退屈せんで済む」

財布が軽くなっただが。

「……それは光荣です」

保護者が殊勝な態度だ。珍しい。

「あのですね、もし先輩が良ければ……」

「三井！ここにいたか！」

「どうした？」

クラスメイトの大林が走ってきた。かなり慌てているようだ。

「クレームが発生して」

「義人がいるはずだろ」

奴も一応代表だし、対応は俺よりも適役だろう。

「それが、杉田が使い物にならなくなっ」

「はあ？」

「とにかく来てくれ！」

そう言っ て俺を引きずり出した。流石剣道部、力が強い。

「悪いな、保護者。また今度な」

「いいですよ別に！」

なぜか怒ってる。今日は感情がコロコロ変わるな、あいつ。
……
今日も、か。

第五十五話 天敵

「しかし義人が使い物にならんってのはどういう意味だ？」

「見ればわかるから……早く！」

全く義人も肝心なところで役に立たない。俺がバシッとクレーム対応の手本を見せてやろう。

「ようやく着いたな。これだから広い校舎は嫌なんだ」

全国公立高校で二番目の広さは弊害にしかない気がする。

「文化祭だからってこんな安っぽいクリームを使うのはおかしい！」
声が聞こえてきた。まあ確かに安いを使っているけど、そこま
で味は落ちないと思うんだが。まあ俺は味オンチだから、レベルの
高い人の感性はわからんが。

「あの二人だ。なんとかしてくれ！」

「よしわかつ……」

……………。

ダッ。

「おい三井！？無言で逃げるとはどういう見だ！？」

「離して！帰るー！俺帰るー！」

「どうした三井！？理性が吹き飛んで……これじゃ杉田とほとんど
同じじゃないか！」

そりゃあそうだ！義人も使い物にならなくなるわけだ！だってあ
の二人！

「どうして姉ちゃんがいるんだよ！？」

大林に捕縛された俺は、義人ともども別の空いている教室で、姉
ちゃんズ（二人とも大学一回生）の前に出されていた。何これ？人

身御供？

「ん？直樹じゃん。あんた今まで何してたの」

「……休憩中。姉ちゃんこそ何やってたんだよ。夏休み（大学の夏休みは八〇九月）なのにうちに帰ってこなくて、ラッキー……じゃなくて心労がたまらずに済んだのに」

「ほう、それが本音か」

「しまった！動揺して本音が出てしまった！

「あんた帰ったら覚悟しときな」

「覚悟なんて怖くてできません」

「それより姉ちゃんはそんな怒ってないよな？やつぱあっちか」

「うむ。私も味にはうるさくないし」

「怒っているのは義人姉（柔道黒帯）だけのようだ。……ほんとよかつた……！」

「旦那の薄情者！助けてくれよう！」

「あんたが調理班のトップらしいじゃないか。人に頼るな」

「俺には手のつけようがありません」

「私の味覚が壊れたらどうしてくれんだ、ああ？」

杉田家は母親が家庭科の先生のため、幼い頃から家事を叩きこまれ、旨いものを食べてきた。そのため味覚が発達し、味にうるさくなっているらしい。……ただ、義人の姉ちゃんは学ぶ気がなかった。で、義人にしわ寄せがいったそう。味にはうるさいが、家事はできるのにやる意思がない、重量級で重度のオタクの長女。それが杉田家の最終兵器、義人姉なのである！

「ああ、そうだ。私たち北海道に行ってきたから。これお土産」

それで夏休みなのに帰ってこなかったのか。しかしこの熊の木彫り人形、用途は何なんだ。無駄に思える。

「武者修行か？熊と戦ってきたとか」

「お前を狩ってやるのか」

「……すいません……調子こきました」

とりあえずその握った拳は開いてください。俺に太刀打ちなんて

できません。

第五十六話 相応

「まあ綾乃（義人姉）、それくらいにしとけ。文化祭の出し物でそこまでの味を求めるのは酷だと思っぞ？」

「しかしこの愚弟の不始末だし、私が落とし前をつけんと」

「私にとってはそこそこ美味しかったし、値段相応かそれ以上の価値はあったんじゃないか？義人君泣いてるじゃない」

締めあげられて数分経つし、幼い頃から恐怖のみを植え付けられていたのだから仕方あるまい。よかった……うちの姉ちゃんは怒ってなくてよかった……！

「仕方ない。弘美（俺の姉）がそこまで言うなら許してやろう。…

…義人、次はないから覚悟しときな」

脅されてさらに怯える義人。同情くらいしかできないが、頑張れ。俺も頑張るから。

「それで、二人はどうしてここに？」

「OBが文化祭を訪れたらいかんのか」

なぜそんな喧嘩腰に！？温厚にいきましようよ。

「うちのクラスに来たのは？」

「綾乃が執事喫茶に興味があつてね。サービスはどうだった？」

「まあ及第点だな」

「……それはよかったです」

これでサービスも不満だったら、さらに魔人化していたのか。…助かった。

「そういえば辰美ちゃんに会ったよ。直樹と同じクラスなんだって？運命つてのはあるもんだね」

「そんな大げさな。偶然に偶然が重なっただけだろ」

「いやいや、いい子に育つてたじゃない。中身も外見も……ボリューム感たっぷりだ」

ここにエロオヤジがいるんだが、通報したら警察は駆けつけてく

れるだろうか。……できれば武術有段者の。

「しかしあれだね。あんな格好させて……直樹の趣味か？」

「なぜにそうなる!？」

クラスの出し物なのに、責任はすべて俺に転嫁されるのか!？」

「そうだね、直樹はどちらかといえばセーラー服が好みだもんね」

「なぜ!？根も葉もないデマを流すな!」

「……はっ」

「鼻で笑われた!？」

まさか奴は……俺の秘密を握っているのか!？」

「まあこの話は、後ほどうちでゆっくりとしようじゃないか……ぷっ」

堪え切れなくて嘔き出した!？何を握られたんだ!？あれか!？それともあっちか!？」

「ああ、健三さんに会ったらよろしく伝えといて。まともに仕事しろとも」

「伝えはするが、そりゃ無理だ」

あの健三さんがまともになったら天地が崩壊する。それくらいありえん。

「……旦那」

「どうした、義人？」

「お互い頑張ろうな……」

「……ああ」

今日帰ったらあれがいるわけだよ……。早く大学は後期日程を始める。頼むから。

第五十七話 敬意

「よくもまあこんなに……」

現在は昼飯時。そのため、予想通り数多くの客が来店している。中に入ることができる人数は限られているため、今では外で並んで待っている人までいる始末だ。商品の味も、義人の姉ちゃんに酷評された以外では全く文句を言われていない。むしろ「おいしかったです！」とか「ごちそうさま。おいしかったよ」などとお褒めの言葉を頂くくらい。あの料理やお菓子がとても美味しいと思った俺の舌も、異常ではなかったようでありだ。あの義人が作ったのだから俺としては当然なのだが、義人の姉ちゃんは義人以上に味覚が発達しているらしい。海原雄山かあの人は。至高のメニューでも食べ過ぎてください。

「いやー、混んでますねえ」

そう思うならいい席を陣取ってないで手伝うなりなんなりしてください。いや、健三さん相手に無理なお願いだとはわかっているんだけど。それでも愚痴らずにはいられない。

「さあ、皆さん働くのです。この私のために」

少なくともあなたのためではありません。しいて言うなら自己満足のからです。

「……あー、誰も構ってくれないって寂しいですね」

みんな健三さんに構っている余裕がないんです。察してください。あ、一句思いつきました」

……フリーダムですね。どういう思考回路ですか。

「安上がり 金のかわりに 手間かけて 値段つり上げ 客騙される」

「健三さん！営業妨害になりますからやめてください！」

事実であるのがまた嫌らしい。反論できないし。これは営業努力だよ？悪いことしてない、当然のことだよ？でも口に出したらいか

んことつてあるのです。

「調子に乗りんこ。ごめりんこ」

意味がわからないし反省の気持ちが見えない！

「お客様！安上がりと言つても、そこその品質のものを使用して
おります！ですから安心なさってください！」

明らかに客が不審の目だよ。疑つてるよ。無用なトラブルを引き
起こさないでほしい。

「……健三さんも少しは自重してください……」

「何度飲んでもこの紅茶は美味しいですねえ」

反省してねえ！

「旦那、健三さんに構うな。手と足が止まつてるぞ」

「……悪い」

突っ込む前に仕事を片付けないと。忙しくて目が回りそうなのに、
健三さんがいるだけで場の空気が和む。……いい点でも悪い点でも
あるがな。

「しかし、この部屋暑いですねえ。扇風機ありませんか扇風機」

あつたら厨房に真っ先に入れます。健三さん専用機になどさせま
せん。

「生徒がもつと教師を敬ってくれないのですかねえ」

そうしてほしいなら、まず健三さんが態度を改めてください。

第五十八話 写真

「交代時間だよー。休憩の人は仕事を引き継いでから休憩に入っ
ねー」

石井が交代時間をわざわざ告げに来た。……嫌がらせか？俺は続
けて接客し続けねばならないのに。

「なおくん、まだ休憩じゃないの？」

休憩に入らない俺を疑問に思ったのか、率直に尋ねてきた。新た
に加わった執事の中にはタツミもいたようだ。

「俺は名ばかりの最高職だからな。サービス残業が多いんだよ」

「残業とは違うでしょ」

素早く返してくるな。まあタダ働きさせられるのは一緒だ。さし
たる違いはない。

「仕事頑張ろうね」

「言ってるそばから客が来てるんだ。さっさと対応するぞ」

「あっ！ごめん！」

俺に謝られても困る。謝るくらいなら働けばいいじゃない。

「いらっしやいませ、お嬢様、旦那様」

この仕事にも大分慣れてきて、ピーク時の混雑も緩和されてきた
からか、俺たちには余裕が生まれていた。やればできる子なのだ、俺
たちは。

「ご注文はお決まりですか？」

「あ、あの、一緒に写真撮ってくれませんか？」

空いている執事がいると、こんな注文も出てくるほどだ。忙しい
と客も遠慮してくれるが、余裕があるように見えるとダメもとで言
ってくるのだろう。物珍しさで記念に残したい気持ちはよくわかる。
「かしこまりました。その携帯でよろしいですか？」

「はい！」

許可されるとは思っていなかったのか、若干驚きつつ携帯を渡してきた。余裕があれば無料でサービスをする。なんて良心的な店なのだろうかと自画自賛してみる。

「じゃあ夏目。俺が写真を撮るから一緒に写ってあげてくれ」
「了解」

俺は写りたくないの、基本この>写真撮られる係くには夏目が就任している。適材適所はいいことだ。

「はい並んでー。はいチーズ」

一仕事完了。喜んでもらえたようだしなによりだ。いい思い出になるだろ。

「ところで携帯のアドレス交換しない？」

……夏目、毎回毎回女の子にがつきすぎだ。いい思い出が台無しになるから。店の評判が悪くなるから。

「なぜ写真係が俺じゃないんだー！」

駄々をこねている、怪我人清水は無視。理由は顔（夏目はイケメン、清水は無骨）と体型（夏目はスラッとしてる。清水は筋骨隆々、執事に見えない。威圧感あり）とはつきりしているが言わないでいてやるう。事実残酷で人を傷つけるからな。

「……そうか、男子の連中が俺に人気が出るのを恐れているんだな……それなら仕方ない」

……ポジティブ思考は最強の武器なんだと俺は思う。

第五十九話 苦情

「なおくん、お客さんから苦情が出てるんだけど」

「何かこつちに不手際でもあったか？」

「まずいようならクレームの対応、俺がでないといかんかな。」

「ううん、そうじゃなくて……あそこに座ってる男のお客さんのことなだけどね」

「そう言つてタツミが促した先には、この店には不釣り合いな男が座っていた。」

「あの客か。さっきからずっといるように思えるんだが……気のせいか？」

「ただでさえ男性の数が少ないのに、ずっといるようでは目立って当然だ。同席している人もおらず、テーブルの上には空になったカップが、テーブルの下にはその男のものだと思われるカバンが置いてある。何をするわけでもなく、ただ周りを見渡すばかりで得体が知れない。」

「気のせいじゃないよ。私たちもそう言ってるもん」

「一時間近くいるよな……退席するよう頼んではないのか？」

「夏目君が頼んではみたんだけど、「客に対する態度か？」って凄まれちゃって……」

「肝心な時に役に立たんな。」

「それじゃ、苦情の方は？」

「その人が女子を観察してるみたいで……にやにやしてて気味が悪いって言われて」

「そりやあまた不気味なことだ。営業妨害にあたるのか？」

「よしわかった。俺が行つて帰つてもらうわ」

「いいよ、私が行くから。なおくんのところにはその確認に来ただけ」

「大丈夫か？」

「うん。女子相手の方が相手も対応が優しいでしょ」

それもそうか。何が目的かはわからんが、女子にキレル男子もいないだろ。

「じゃあ頼んだ。でも無理はするなよ？」

「わかってるって」

タツミならなんとかなるだろ。夏目より頼りになるし。

俺が雑用をしている間に、タツミが交渉を始めたようだ。任せたいはいえ、相手が素直に従うとは限らない。気になってつい視線がそちらを向いてしまう。

「お客様、そろそろ退席していただいてもよろしいでしょうか？」

「ああん？なんで俺が帰らねーといけねーんだよ？俺は客だぞ？」

「ですが、限度というものがありまして……限度を越えますと、私たちの方も対処をしなければなりませんので」

「高飛車な店だな。客がゆっくり疲れも癒すことも許されねーのかよ」

「御注文の品を飲み終えてから一時間も経つのですが」

「うるせーな、黙れよ」

「他のお客様さまからも来店しますので、席を退いていただけると……」

「うるせーつつつてんだろ！」

そう叫ぶと。

その男はタツミを突き飛ばした。

第六十話 逆鱗

「大丈夫か!？」

突き飛ばされたタツミを見て、何事かと店内が静まり返る。

「平気、ちよつとぶつただけだから……」

急いで駆け付けた俺を、タツミはそう言ってなだめた。理不尽に怪我をさせられたこの状況でも、人の心配か?人が好すぎる……そう思ったのも束の間。突き飛ばした男は、悪いとも思っていない様子でこう続けた。

「あーあー、何だよこの店は!最低だな!」

「……………」

「なおくん?」

「……石井、頼む」

「りょうかーい」

石井はそう言つて姿を消した。俺は俺の仕事に取り掛かる。

「……お客様、よろしいでしょうか」

「あん?何がだよ」

「こちらが何か不手際をいたしましたか」

「客に対して帰れつつってんだからな」

「私どもの見解では、飲み終わってから一人で一時間も席を占領されているのは、想定の範囲外です」

「はあ?」

「まさかこのお祭り騒ぎの文化祭で、休憩、食事以外の目的で来店されるお客様がいるなど思いもしなかったものでね」

「何が言いてーんだ?」

「女性のお客様さ方から苦情が出ているんですよ、あなたのことで何でもじろじろ見られて気味が悪いとか」

「……自意識過剰なんだろ、そいつが」

「一人ならそうかもしれません、そう何人も同じ苦情が出ると、

あなたの方を疑うのが筋でしょう」

「……客を疑うのか、この店は」

「お客様の行動によりますね。見たところ同年代のようですが、そのポケットに見えるタバコはなんですか？怪しまれたいと思ってるんじゃないかと逆に疑問が生まれましたよ」

「関係ねーだろ！」

「そうですね。あなたが肺ガンで死のうと私には何の関わりもありません。この年でそんなもの吸わない限り気分が紛わせないかと思うと、同情したくなりますよ」

「喧嘩売ってんのか！？」

「同情しているのにそう思われたなら心外ですね。私たちは煙草そんなものに頼らなくても楽しい生活が送れるんですから、あなたに喧嘩を売る必要なんてないんですよ。そんなこともわからないんですか？それにですね」

「あ？」

「男子よりも力の劣る女子に暴力を奮っておいて、謝りもしない。その時点で私はあなたをその程度のモノとしか扱っていませんから」
「ふざけんな！」

我慢がきかなくなつたのか、その男は俺の顔を殴ってきた。静まり返っていた教室から、女子生徒の悲鳴が上がった。口の中を切ったのか、血の味が広がる。……だがこれで、条件は整った。

「……殴りましたね？」

「それがどうかしたのか？」

「石井」

「ばつちり録画したよー」

「はあ！？」

石井に頼んだのは決定的な場面の録画。これで後はどうとでもなる。

「この録画を出すべきところに出したらどうなるでしょうね？営業妨害まがいのことをした拳句、説得する店員に暴力を振るう男。ど

この高校かは知りませんが停学くらいになっても不思議じゃないですね」

「そのビデオを寄こしやがれ！」

「まずは話し合いです。こちらの部屋に来ていただけますか」

「……くそが」

「承諾と判断します。ついてきてください」

舌打ちをしつつも、後ろに従っているようだ。……これで一段落か。

第六十一話 救援

部屋を移る前に、言っておかないといけないことを忘れていた。男は石井と清水に任せ、一旦店内に戻る。

「タツミ、怪我は大丈夫だな？」

「……あ、うん」

「それなら後は任せた。こんな状況を纏めるのは大変だろうが、頼んだぞ」

騒ぎの余韻で、店内はざわついている。このままでは売り上げにも響くし、何より客として来ている人に失礼だ。

「……うん」

「どうした？ボケつとして……やっぱり具合が悪くなったんじゃないか？」

「いやいや！大丈夫大丈夫！」

困ったな。頼りのタツミがこの調子だと、人数も減るわけだしきついか……？

「お困りのようですね！」

「困ったな……夏目は意外と役立たずと判明したわけだし……」
「堂々と無視しないでください！聞こえているんですよ！？」

「……再びの御来店、ありがとうございます」

「用件が違うこと、わかって言ってますよね！？」

「……一応聞いてやろう。何のためだ？」

「私がかわりにメイドをやってあげましょう！」
「はいはい。」

「ここ、執事喫茶だから。メイドはここの範囲外だから」

「なら代わりに執事をやって差し上げましょう！」

「……お前に出来るのか？」

「私にできないことがあるとでも？」

何その自信。

「……やったこともないのになぜそう言える」

「先輩ごときにできて、わたしにできないわけがありません」

「……ああそうですか。」

「要求は何だ」

「承諾する、ということですか」

「ああ」

他に手段もない。この時間も勿体ない。

「先輩に恩を売る……これだけでも大きなメリットです」

「……しわ寄せは俺に来るわけか。」

「……つくづくついてない……」

「何を言ってるんですか。こんな幸運ありませんよ」

うるさいわ。

「ただ、執事服スーツをどうするかだな……予備なんてないぞ？」

こんな事態想定していないし。

「！いい考えがあります」

「期待はしてないが言ってみろ」

「せ、先輩の服を……」

却下だ」

「まだ全部言ってますんよ!？」

「なぜ俺が貸さんといかんのだ」

「あ、おいしいけど違います」

「は？」

「先輩の服をはぎ取って私が着るんです」

「俺が考えてたのよりたちが悪いわ！却下だ却下!」

「でも他に方法があるんですか？」

「……上だけな。汚すなよ？」

「いいんですか!？」

「早くしろ仕事はしっかりやれ応援が来たら帰ってもいい何やってんだお前!」

「すーはーすーはー」

「人の上着の臭いをかぐな！」

「……先輩の臭いがします……それを着るってことは……先輩に抱かれていても同然……」

「何言ってるんだお前は!？」

アホなことやってないで、やるなら早くやってくれ！

第六十二話 罪

「調子はどうですか？」

「……いいわけねーだろ、早く帰せよ」

まあ、暴力を振るったことで部屋に連れてこられたんだから当然か。しかしこの男、まだ反省してないのか。

「ずっとこんな調子なんだよー。まあ、もっとも三井が来るまで待つてたつてのもあるけどー」

「？」

「さてとー、なら本題に入ろうかー」

「本題だと？」

なぜか焦り始める男。他に何かやましいことでもあるのだろうか。石井が何のことを言っているのかわからない。

「そのかばんの中身、見せてもらってもいいかなー？」

男の様子が目に見えて挙動不審になってきた。状況がつかめていない俺にとっては謎が多すぎる。

「帰らせてもらう！」

「往生際が悪いよー。気持ちわかるけどねー、なにせ」

一呼吸おいて、石井が男にとっては決定的な、俺にとっては衝撃的な一言を放った。

「盗撮なんて発覚したらー、人生終わったようなものだもんねー」

「なん……だつて……？」

正直耳を疑った。そんな馬鹿げたことをやる人間が、実際にいるとは思わなかったからだ。

「……冗談、だよな、石井」

「そう思うならー、その黙りこくってるお客様のかばんの中ー、確

「認しなよー」

「……よろしいですか？」

俯き、何も話さなくなった男からかばんを取ろうとした途端、男は立ち上がり勢いよく俺を突き飛ばした。

「つつ……！やばい！逃げられる！」

突然の出来事だったため、男を捕らえられる人がいない。石井は座っており、清水は怪我をしているので咄嗟には動けない。しかし石井の言うことが事実なら、男を逃がすわけには

ドン。

そう考えたところで、扉からの脱出を図った男は立っていた人によつて阻まれた。

「どけよ！」

「……この状況で退くと思うのですか？そう思うのだとしたら脳外科に行くべきですね」

我らが担任、健三さんによつて。

「邪魔なんだよ！」

「……うちのクラスの者に手をあげておいて、言いたいことはそれだけですか」

健三さんの様子がいつもとは違う。飄々として受け流す、つかみどころのない健三さんではない。単純に怒っているとは思えない、無表情の健三さんだ。

「三井、そこに落ちているかばんを広げなさい」

見ると、ぶつかつた衝撃からか男の手を離れたかばんが落ちていた。急いで拾い、中を見る。

「うわ、マジでか……」

そこには、隠して何かを撮ろうとする、悪意を持って動いている
としか思えないビデオカメラがあった。

「確定ですね」

その言葉に、男も俺も立ち竦むだけだった。

第六十三話 賢者

「健三さんー、こいつどうするんですかー？警察に通報しますかー？」

「……こうなつた以上、通報しないわけにはいかんだろう。しかし健三さんの答えは予想外のものだった。」

「いや、それはやめておきましょう」

「どうしてですか！？犯罪ですよ！？庇いだてをするのなんておかしいですよ！」

何を言っているんだ健三さんは。どうかしているとしか思えない。

「三井、違いますよ。私が言っているのはですね」

「なんだって言うんです！」

「このまま通報したら、文化祭は台無しになりますよ？それでもいいんですか？」

「……！」

「怒りと正義感はごもつともです。しかしそれと引き換えにこの文化祭は終わりを告げますよ？」

「……だからといって……」

「もちろんこの男は警察へ突き出します。ただし、私の教え子に警察関係者がいますから、それを通して内密に処理させます」

「……盗撮された女子は……」

うちの店員はスーツ姿のため、男が机の下に設置したローアングルからの盗撮画像には関係ないだろう。問題は制服姿で来た他のクラス及び他校の生徒だ。

「それは私が探し出します」

「どうやってですか！？？」

混雑していなかったとはいえ、それでもかなりの女子生徒が来店していた。男は一時以上席を動いていないため、十人二十人ではすまない数のはずだ。

「目と頭を使うんですよ」

「……？」

「わかりませんか？簡単なことです」

俺にはまだわからない。目？頭？

「私が覚えていますから問題ないということです」

「そんなわけないでしょう！？不可能です！」

「疑いますか？」

「いつもの行動で信じるという方が無理です」

「……三井の評価を改める必要がありますね」

しまった、つい本音が。

「冗談ではなく本気ですよ。うちの生徒で見覚えがない人は来店しませんでしたし、他校の生徒は一度見れば覚ええます」

「……そんなことが……」

「できますよ。思い出すのが面倒ではありますが……警察から下手な事情聴取受けるよりマシでしょうから」

……そういえば誰かから聞いたことがある。

健三さんは図ることのできない天才なのだと。

「……任せてもいいんですね？」

「思い出すところまでは任せましょう」

「……はい？」

「だからそれを調べ、盗撮されたことに対する謝罪に行くのはもちろん三井です」

「……面倒なことは俺任せですか？」

「はい」

清々しい即答をありがとうございます。

「むしろこれだけ手伝ってあげるのですから、感謝はいくらしてく

れても構いませんよ?」

高騰状態にあった、健三さんへの尊敬と感謝の気持ちが急激に萎むのはどうしてだろう。

「さて、その男は文化祭終了まで軟禁しておきますか」

「くそが! 離せ!」

「おやおや、罪状を増やしたいんですか? おとなしくした方が身のためですよ?」

教師とは思えない発言です。

「後は頼みましたよ。やることはやっておきますので。勿論余分なことはしませんけど」

……尊敬していいんだか悪いんだか。

第六十四話 団結

今行動を起こしても、騒ぎが全校に広がるだけでメリットが少ない……そう判断したため、盗撮騒ぎの処分と謝罪は文化祭が終了してからにすることとなった。……おそらく俺は今日、眠る暇なく働くことになるだろう。……名ばかりの管理職で大変なんだなあ。全国の間管理職の皆さん、頑張ってください。

「三井ー、現実逃避はそれくらいにしてー、ヘルプに入っただけであらう？」

そうだった。保護者に手伝ってもらうくらいに人材が不足してたんだ。俺が早く手伝わんでどうする。

「早速入る。保護者には感謝せんといかん……」

そう呟きながら店内へと戻ると、なぜか執事があふれかえっていた。

「先輩、私いない子ですか？なんかどんどん集まってきたんですけど……」

「この文化祭を成功させたかったのは俺だけじゃなかったんだ……」

シフトの時間から外れ、本来は自由時間だというのにヘルプに来てくれたクラスメイト達。普通に感動できる光景だ。

「それじゃ、悪かったな。手伝わせて」

「いえいえ。私が好きでやったことですから。先輩を自由にできる権利で十分におつりが来ますよ」

「報酬高い！俺の人権は三十分にも満たないバイトで崩壊するレベルなのか」

「ふん、何を思いあがっていたんですか。その程度ですよ」

「せめてオブラートに包むとかしてくれ！」

「先輩の人権なんて、駅前で配られるティッシュ程度ですよ」

「むしろ下がってる！？オブラートに包んでもないし！」

また一段と俺の価値が下がっているようだ。デフレスパイラル到来？

「まあいい、とりあえず上着返してくれ」

「嫌です」

「即答！？」

「俺の一張羅なんだが」

「先輩は女子の上着をはぎ取った揚句、それを着て笑って人前に出るつもりなんですか？最低ですね」

「声がでかい！その言い方だと俺が変態に聞こえるだろうが！やめてくれ！」

「事実でしょう？」

「事実だが言い方によって印象が大幅に変わることを覚える！」

保護者の今の上着は俺が貸したものだし、笑って人前に出るのは執事という名のウエイターをするから愛想よくせんといかんからだ！決してやましい部分はない！

「大体お前から借りたいって言ったのに、返すのを拒否ってどういうことだ！？」

「……着心地がよかったとか？」

「同じ製品買え！」

「そういう問題じゃないんですよ……でもまあ返してあげます。条件付きで」

また条件か。拒否権もどうせないんだ。手早くいこう。

「大抵の要求は呑むからはよ言え」

「……先輩が休みの日に、私の勉強を見る……のはどうですか？」

「わかったから早く上着を返せ」

「いいんですか！？」

予想より遙かに楽そうな要求だったので、気が変わらないうちに承諾。

「日程は今後相談でいいな？」

「……………先輩と二人きり……………」

「いいな？」

自分の世界に浸り込む保護者に再度確認するも、返事が得られない。そのため上着が返ってきたのは五分後となったのだった。

第六十四話 団結（後書き）

もうシリアスの展開を書くのは止めます……。疲れるしアクセス数は減るし……。下手な挑戦はマイナスにしかならんことが判明したので……。

誰か文章を書く力をください。

第六十五話 労働

「忙しい

忙しいったら

忙しい よつを」

「ぼやいてる暇があつたら働け」

義人、お前はいつから改名したんだ。センスのかけらもない句を詠むな。疲れがどつとたまるから。

「忙しければ死にたくもなるさ。人間だもの。 よつを」

後ろ向きすぎるだろ人間！気持ちはわからんでもないけど！でもさらにネガティブになるようなこと言うんじゃないやねえよ！

なんだかんだでクラスのほとんどが集まったものの、執事喫茶の忙しさは終了間際となつてピークを迎えていた。その理由はこの看板にある。

> 今なら執事と一緒に写真が撮れます！この文化祭の記念にぜひお立ち寄りください！<

……こんな時間を食う企画を、最後の最後に宣伝に使ったことが最大の原因だ。いくら人手が足りているとはいえ、ほぼ全員の客が写真を求めるため、店内の混雑は最高潮かつ混乱していた。どの客がいつ席に座つたのかもわからない有様で、お冷やを出すタイミングもつかめない。……石井ももつと前にこのイベントをすればいいものを……。

「ふう、疲れましたねえ。ねぎらいの意味も込めてお茶を一杯、くらいしてくれても罰は当たらないと思いますよ？」

「旦那！旦那も写真の方へいつてくれ！給仕は俺が手伝うから！」

「マジでか！？」

写真に撮られるのは本当に嫌なんだが。

「そんなこと言ってる場合か！あと三十分乗り切るためだ！自己中

になるな！」

「……了解」

簡単に言ってくれるな。俺と一緒に写るといつて拒否されたらどうするよ？一生もののトラウマになるぞ。今さらまた一つ増えたところで大したことはない？ほっとけ。いや、同情してくれ。

「ぐつとらつくー、みついー」

気の抜ける応援、ありがとう石井。

「……気付かれないのは応えますねえ……。悪気はないんでしょうが。終わるまでひと眠りしますか」

「ZZZZZZZZZZ」

「……健三さんうるさい！！」「」

何か起こしていないと気がすまないんですかあなたは！いつもは静かに寝てるのに、今日に限って大きないびきをかくのは理由でもあるんですか！？

「疲れてるんだろ」

「それにしても限度があるだろ！？」

爆音かと思つたぞ！？一斉に客が振り向いたじゃねえか！

「旦那、気を取り直して写真へGO」

「……落ち着け、俺」

自分でいってりゃ世話はないな。

幸いにも、一緒に写るのを拒否されることはなかった。……心の底からホッとした……。嫌な思い出が増えなくてよかったよ……。

第六十六話 束縛

「ごちそうさま。この写真、記念にずっと取って置きますね！」

「「「ありがとうございます！」」」

最後の客が執事喫茶を後にしたとき、一斉に歓声が上がった。

「終わった　　！！」

「これは大成功と言ってもいいんじゃない？」

「間違いなくそうだろ！余る予定（クラスで分担して持ち帰る予定だった）で仕入れた材料、ほとんど底をついてるぞ！」

「こんなに繁盛するとは……俺のおかげだな！」

「清水、お前も確かによく頑張ったが、一人だけの力ではない。皆の力が合わさったからこそこの文化祭は成功したのだ！」

「おお、夏目が尋常でなくいいこと言ったぞ！」

「しかしその通りだ！俺たちは最高だ！ノーベル賞ものだ！」

ハイテンションすぎてわけわからんことを口走ってるぞ。ノーベル賞で。何か該当するものがあるのか？平和に貢献したとはとても思えんが。

「それにしても悪かったねー。中学生に手伝わせちゃうなんて」

「三井君の後輩なんだって？いい子だねー」

手伝わってもらったこともあり、保護者にはクラスに残ってもらっていた。少しばかり残った材料で賄いを作り、閉幕式が始まるまで早目の打ち上げをするのでそこで労おうという寸法だ。

「そんなことないですよ。好きでやったことですし。それに」

謙遜なんか柄じゃなかるうに。年上の女子相手では勝手が違うのか？

「……私は先輩に体も心も束縛されていて、拒否権がないんです」
何言っちゃってんのこの後輩！？

「ありもしないことを口走るな！？こら清水！怪我人が殺気を放つな振りかぶるな」……相討ちでもこいつを倒す……」とか言っな！

ほれ見る怪我が悪化して苦しんでるじゃねえか！」

立ち上がって足に体重を乗せた結果、痛みが走って顔が青ざめていく清水。変なところで熱血するな。

「すいません、半分は冗談です」

「半分！？」

全部の間違いだろうか！

「束縛されているのは肉体のみです」

「だから根も葉もない嘘をばらまくな貴様！俺のこのクラスでの立場をどうするつもりだ！？」

四方八方から軽蔑の視線が突き刺さる。俺が一体何をした！？そして清水、もう動くのは諦める。悪化するばかりなのは自明だからそれと女子！「……やっぱり……」ってどういうことだ！？俺は今までどんな風に女子に思われてたんだ！？

「まあそれも冗談です」

今の嘘で得することはあったのか。俺の評判が下がったことしか利害はないと思うんだが……そこまでして俺の評判を下げたいか。

「……半分、というのは事実なんですけどね……」

「まだ何か俺を貶めるつもりか！？」

「それにも飽きたので、せっかくですからプチ打ち上げを楽しみましょう」

流行り廃りがあるのか、俺苛めには。

「一発芸誰か見せろー！」

「よし俺が！円周率を際限なく言っぜ！」

「すごいけど無駄だ！盛り下がるから止めい！」

第六十七話 大切

女子の集団に保護者が拉致されたため、俺は何となく手持無沙汰になった。静かに一人疲れを癒すのもいいが、一つ気になっていたことがあったため、その確認をすることにした。

「タツミ、突き飛ばされたときの怪我の調子はどうだ？」

「あ、なおくん……」

何か考え事をしていたのか、女子の輪に加わらず一人で紅茶（残り物）を飲んでいたタツミに確認。あの嫌な事件の後、元気がなかったような気もするし、励ましてやった方がいいだろう。

「まあ、あれだ。あの最低な奴に怪我させられたのは屈辱だっただろうが、元気出せ。そんな嫌なことは忘れるのが吉だ」

忘れようにも忘れられんかもしれんが。痣でも残ったら目も当てられんし。

「……まさか、あのネガティブなおくんに励まされるとは思わなかったよ……」

失礼な。気持ちはわからんでもないが、嫌なことを何度も受けている俺としては当然の対処法なのだよ。

「……それに今悩んでるのは別のこと……」

「別のこと？」

「！いや、なおくんのことじゃないよ！？」

そんなこと言つたらんのだが。

「俺のことじゃないならちようどいい。相談くらいにならるぞ？」

「そんなことしなくても……でも……」

「俺じゃ役不足か」

「むしろなおくんじゃないと相談できないことなんだけど……なおくんだけには相談できないとも言えるし……」

どっちだ。

「……なおくん、あのお客さんに対して怒ってた？」

あんなのを今さら客呼ばわりする義理はないと思う。

「あんな嘗めた態度を取られてキレないほど、俺は人間ができてない」

「……その理由は？」

そんなもん。

「大切な仲間と、その努力の結晶を馬鹿にされたんだ。手を出さなかっただけ俺は大人だと思ってる」

「……た、大切……！？た、他意はないんだよね？」

他意も何も言葉通りの意味だ。

「……もしかしてなおくん、誰相手でも同じようなことしてるの？」

「立場はわきまえてるからな。相手が確実に悪いときだけだ」

若い頃（小中学生時代）は義人と馬鹿をしたこともあったが。

「そっか……何はさておき、私のために怒ってくれてありがとう」

「どういたしまして」

考えてやったことではないけどな。

「……後で古木さんに謝らないとな……」

「何か迷惑でもかけたのか？」

「うん、まあ……一つしかないものを取り合うことになったって言うか……」

？よくわからんな。

第六十八話 建前

「これで文化祭は終了となるが、月曜日には体育祭も残っている。打ち上げは原則禁止となっておるので、騒いで北高に連絡が来るようなことは避けるように」

生徒指導部長、小倉さんのありがたいご指導を受け、文化祭はひとまず終了。打ち上げは原則禁止だとは言うものの、小倉さんの口ぶりでは打ち上げすることが前提のようだ。そりゃあクラス一丸となつて一つのことをやり遂げた後だ。打ち上げくらいしたくなるのが人情というものだろう。もちろんその辺りは先生方も承知で、騒いで苦情が来たときに「打ち上げは禁止となっているのだが、生徒が勝手にやってこちらも困っている」との言い訳に使うために言っているのだろう。先生は先生で打ち上げをやっているくせ（情報源は健三さん。堂々と口にだして「今夜の飲み会は楽しみですねえ」などと宣っていた）、やることがみみっちい。いや、生徒が騒がなければ全くもって問題はないのだが。

「打ち上げは体育祭も終わつた後でいいよな？」

「せっかくだから二回行こうぜ！」

「そんなことしたら儲け全部飛ぶだろ」

「儲けが出ただけいいんだから、自分たちで出せばいいんじゃない？」
こいつら騒ぐ気満々だな。迷惑になるからカラオケでも行つて叫ぶだけ叫んでから参加すればいい。そうすれば多少はマシになるだろう。

「今から俺たちはカラオケ行くけど、一緒に行く奴いるかー！？」

マジで行くらしい。こちとら一日で全精力を使い果たすほど疲れたというのに、元気な奴らだ。……あれが若さか……。

「旦那も年齢同じだろ」

「奴らとは精神年齢が違うんだ」

「そうか、俺たちは大人だもんな！」

「そうだよー。アダルトイーって言うのかなー？」

誰がお前らを含めとるか。俺の分類によれば、お前らの精神年齢は幼稚園児並みだ。

「ところで旦那は行かんのか？」

「本気で疲れ切ってるんだ。帰って眠らせてくれ」

「残念ながらそうはいかないな」

「……なんで？」

「三井にはトップとして、謝罪に出向いてもらわないとー」

ぐは。そうだった。脳が忘れようと務めていたらしい。

「旦那、人はそれを現実逃避と呼ぶ」

「大体、まだ謝罪に行く人とかのリストができてないだろ。それは健三さんの仕事のはず……」

「悪あがきはよしなよー。健三さんはその作業すでに終わらせてるからー」

「どれだけ優秀なのあの人！？」

その優秀さをもっと別の時に発揮してほしかった！

「飲み会に参加するためにちよつと本気を出したみたいだねー。はいリストー」

「予想以上に多い！？これでちよつと本気とかどうなってんだ！？」

「それが健三さんのだよ、旦那」

あの人は確実に才能の使い方を誤ってる……！

第六十九話 謝罪と召集

手土産に写真と義人謹製のお菓子（これもほとんど余った材料で作った）を持参し、片っぱしから住所を回ること数時間。「あなたは悪くありませんから」と優しい言葉をかけられることもあれば、「最低な気分です。済んだことだから我慢しますが、盗撮した奴の顔と名前教えてくれませんか？殴りに行くんで」などと物騒なことをおっしゃる御仁もありました。しかしこれで最後のお方、これが済めばもう帰れるのです。あなたのおっしゃる場所に向かえるのです。だから今しばらくの辛抱を……

「五月蠅い。早くしろ。五分以内に帰って来なかったら捻じ切る」
「……勘弁してください姉上様」

どこを！？などというツツコミは命を削る事態を引き起こしかねないため、してはならない。やるとなったら本気でやるのが姉ちゃんの怖いところだ。

せつかく幼なじみ（うちの姉ちゃんとツツコの姉さんも幼なじみ、当然その妹のツツミも姉ちゃんの幼なじみ）が再開、集合したということで、四人一緒に飯を食いに行こう と急に告げられた（ちなみに料金は割り勘らしい。あのケチめ……背は低くても年上なんだからここは奢るくらい器量の大きさは見せるよ……）。もちろん俺には相談もなければ拒否権もない。ところが仕事が残ってる……という命に関わる最大の危機になったのだが、謝罪を終わらせるのは最低限の義務。悲劇を考えないように先延ばしにしてみても来たが、今はもう恐怖から逃れることもできません。嫌な予感ばかりが胸をよぎる。指……？それとも足……？嫌だ！まだ五体満足な姿でいたい！なにか打開策はないものか……？

「……着いた」

重要な案件を一心不乱に考えているうちに、目的地に着いてしまった。とりあえず謝罪を済ませよう。恐怖に怯えるのは後回しにして……ぴんぼーん。

「どちら様ですか？」

「北高の者です。じつは赫々云々で」

「それはひどいですね」

「これはお詫びと謝罪を兼ねてで……」

「それはどうもすみません」

……何の問題もなく終わってしまった。できればここでアクショント（主に叱咤など）が起きて時間を潰せれば……などと考えていたのだが、そう都合よくは進まないらしい。

「ん？携帯にメールが……」

発信者姉ちゃん。件名 コロス。

「罰則がきつくなってる！？俺死ぬのか！？」

全力で自転車をこぎつつ、目的地（居酒屋）へと向かうのだった。

……どうか五体満足で体育祭に出られますように。

第七十話 俗物

「あら、久しぶりねえ直くん。私のこと覚えてるかしら？」

居酒屋に辿り着いたとき、幸いにも姉ちゃんはずでに酔っぱらっていた。そのおかげで俺への処罰は忘却のかなたにあるようだ。代わりにタツミへのセクハラの真つ最中（まさに酔っぱらいオヤジ。手がつけられない）で、俺が見るのはためらわれる光景が広がっていた。必然的に俺はもう一人の幼なじみ、三歳年上の望さんの相手をする事となった。

「望さんでしょう？ お久しぶりです。正直顔は覚えてませんでしたけど」

「失礼ねえ」

実際忘れてたんだから仕方ない。人間は忘却する生き物なんだ。

あそこで「よいではないか、よいではないか」などと迫っている馬鹿と同じで。

「私は一度だつて直くんたちのことを忘れなかったっていうのにー」

「それは失礼しました。姉ちゃんから聞いたんですけど、関東の大学ですって？ 一人暮らしつてやつぱり大変ですか？」

「んー？ 一人暮らしも慣れちゃえば楽よ？ 好きなもの作れるし好きなことして過ごせるし」

面倒そうだが、慣れたらそういうものなのかもしれない。

「それよりどうなのよ？ 直くん、彼女とかいるの？」

またその話か。どうしてそう人を落ち込ませようとするかな、女子ってのは。

「いませんよ。てかいたことはありません」

「そうなの？ じゃあうちのはどう？」

「はい？」

「辰美よ、た・つ・み。お買い得よ？」

妹をモノ扱いで売りに出すってどういうことですか。これだから

姉って人種は困る。

「なんでそうなるんですか……」

「あら？だって昔から仲良かったし、今も仲良くやってるんでしょ？うちでよく話してるわよ、直くんのこと」

「はいはい、それはよかったですね」

「あらあら、本気にしてないのね？つまんない」
「からかうのもいい加減にしてほしいものだ。」

「でも直くんと辰美が結婚したら、私と直くんは義姉弟よ？」

「何工程すつ飛ばした結論に辿り着いてるんですか。それと、それは丁重にお断りさせていただきます」

「これ以上にハチャメチャな姉が増えたらどうしろというんだ。心労で倒れかねん。」

「あら？もしかして私の方がよかった？駄目よ？私彼氏いるし」

「はあ、そうなんですか。大人ですね」

「もう、反応がつまんない。彼氏彼女がいる関係なんて中学高校ならいくらでもいるでしょうに」

「だから俺に何を期待してるんだ。」

「あいにくと、近くにそういった人がいないもので」

「もっと人生楽しまないと損だよ？お姉さんからの忠告」

「楽しんでいきますよ。若干正規ルートから逸れているだけで。」

第七十一話 悪魔超人

「……弘美さん！？ちよつとそこは……！」

「むふふふ、久しぶりだろう？よいではないかよいではないか」

「久しぶりに会ったその日に、変なところを触らないでください！」

「私と辰美ちゃんの仲だろう？垣根なんぞなくて当然」

「どういう理屈ですか！？酔っ払い過ぎですよ！」

「私は酔ってなどいない。ただ頭の中がふらついているだけのことだ」

「それを世間一般では酔ってるって言ってます！」

「まあまあ、お姉さんの酌をしてくれ、可愛いお嬢さん」

「もう飲み過ぎです。お酒はやめておきましょう？」

「だが断る」

「ダメです」

「抵抗しようとは無駄だ。私の戦闘力は六十万を超える」

「フリーザ以上じゃないですか！？全宇宙最強を超えた存在！？」

「おお、よくわかったな。女子でこのネタ（ドラゴンボール）がぱつとわかるのは少ないぞ？」

「え？有名じゃないですか？」

「有名と言えば有名だ……一部の人には。辰美ちゃんは漫画、結構いけるクチ？」

「そうですね……ジャンプ系統は結構読んでますよ。スラムダンクとか、るろくに剣心とか……ワンピースとか」

「あとそうだな、ナルトとかブリーチとかかな？」

「そうですね。単行本は買ってませんけど」

「そりゃあ、読む本全部買ってたら金がいくらあっても足りんし」

「くすっ」

「どうした？」

「いや……なおくんと同じこと言ってるなあと思って」

「姉弟だからな。多少は似ることもあるだろう。とりあえず直樹はボコることに決定したが」

「どうしてそうなるんですか!？」

「なんとなく」

「なんとなくで、なおくんは暴力を奮われるんですか!？」

「しいて言うなら不愉快だったから」

「理不尽でしょう!？」

「んー？直樹のことに必死になるねえ。何かあるのかなあ？」

「……………」

「にまにま」

「…………口に出してまでいやらしい擬音を言わないでください」

「どうした辰美ちゃん？声が小さくなつたぞ？これは面白そうだ」

「……本音が出てますよ」

「楽しいことにはつい反応してしまつてな。それで？直樹のことをどう思つてる？」

「……直球ですね」

「そういう君は慎重だな？ふふふ、心の中を見透かされたくないのはわかるが、私にその手は通じないぞ？」

「どうしてですか？」

「それは…………こうするからさ！」

「!？」

「直樹！ちよつちこつち来い！一秒以内」

「物理的に無理だろ!？」

「ブー、時間切れ罰ゲーム質問に答える拒否権なし」

「ひどつ！暴虐無人だ！」

「直くん？弘美に今さらそんなことを言つても無駄よ？」

「そうですね…………いだっ!？」

「失礼なことしか言えないのかこの口は」

「姉ちゃんだけには言われたくねえ！」

第七十一話 悪魔超人（後書き）

誕生日というのにテスト＋バイト（しかも交通の便が悪いところ）
……。なんて誕生日だ（泣）
……

第七十二話 敵前逃亡

酔っ払った姉ちゃんに呼び出しをかけられた俺。何やらタツミも顔が赤くなっているようだし、二人仲良く酒盛りでもしていたのだから？それなら俺を呼ばずともよかるうに。ましてや強制罰ゲームとはどういうことだ。

「さあ正直に答えてもらおうか」

「何を」

「……言ってなかったか」

「言っていないですね」

「この酔っ払いが。……ぎっ！？」

「今失礼なことを考えたろう」

「……なぜわかる……」

間髪入れずに突きを入れてきよって。危うく二度と声が出なくなるところだったわ。

「直樹、辰美ちゃんのこと好きか？」

「なぜそんなことを聞く」

「お前はただ質問に答えればいい」

「やれやれ。質問するときはまず自分から答えるのが筋だろう。そんなこともわからないのか？」

「ああ？」

「すいません調子こきました」

酔っ払っていてもこの反応。嫌になるな。

「好きか嫌いかで言えば好きに分類されるな」

「そうか、それは上々」

何が。

「……だ、そうだ辰美ちゃん。どうする？」

「どうするって何をですか！？」

質問の意図はこれか。本人の前でこんなことを言わせることで両

方をなぶる、と。鬼め……まるでこれじゃ俺が告白したみたいじゃないか。恥ずかしい。タツミはタツミで真っ赤になってるし。俺たちは姉ちゃんの遊び道具か。

「どうせこんなのには彼女はおらん。売れ残り商品だし安くしとくぞ」
誰が売れ残りだ。彼女がいないのは否定できないが、姉ちゃんだって同じようなもんだろ。

「私と一緒にするんじゃない。私は彼氏を作れないのではなく、作らないだけだ」

わーい、負け組のセリフだ。

「誰が負け組だって？」

「……心を読んでまで俺を苦しめないうでください……」

握力五十オーバーは伊達じゃなかった……死ぬ……から……離して……。

「反省したみたいだし、離してあげなよ、弘美」

「む、望がそう言うなら」

……ありがとうございます望さん。九死に一生を得ました。

「じゃあ、辰美は返答といこうか？」

望さんもからかう為にやってきたようだ。俺の周りは敵ばかりか。
「~~~~！」

タツミが返答に困っている。さすがに「気持ちが悪いかから勘弁してください」などとは言わないようだ。……自分で考えておいてなんだが、言われたら一週間は立ち直れんだろうな……。なんとかブライトに包んだ拒否をしてくれよ？（断ること前提）

「さあ答えは？」

「もらってやってくれ」

じりじりと追い詰められ、タツミは

「みゃあああああああ！！！！」

何を思ったか目の前にあった酒を一气飲みした。

「逃げたな」

「逃げたわね」

「きゆう」

相当酒に弱かったのだろう。飲み終えたタツミは突っ伏したまま動かなくなった。……一気飲みって死ぬこともあるから、やったらまずいんだよね……。

「俺を傷つけないためにそこまでしてくれたのか……なんて立派な殉職……」

「いや、ただ逃げただけでしょ」

「この反応は……青春だなあ」

姉ちゃんの考える青春は、一気飲みでぶっ倒れるものなのか。異常だ。

第七十三話 戦意

タツミがつぶれた後、年上二人（精神年齢は不明）から集中砲火を受けた翌日。体育祭の前日ということで、クラス全員が出場する長縄の練習にわざわざ北高のグラウンドに来ていた。

「……頭痛い……」

「どうした旦那、寿命か？」

「俺の人生短っ！？違うわ、二日酔いだ！」

「そっちの方が問題だと思っただけどー、どうなのその辺ー」
しまった、墓穴を掘ったか。

「まあ今の時代、酒くらい飲むことはあるよな。それで、飲み過ぎたのか？」

「ああ。飲まされた」

「やつぱりー、例の三井の姉さんに誘われてー？」

「誘われたのではなく、強引に飲まされたんだよ、二人に」

「二人？」

「……そうか、言ってなかったか。昨日は四人で飲んだんだ」

「あと二人はー？」

「タツミとその姉さん。幼なじみ四人で飲んだんだよ」

「それなら別によくないか？」

それだけならな。

「色々と尋問されたんだよ、酔っぱらい二人に」

「あれー？石川さんもいたんだよねー？その時石川さんはどうしたのー？」

「同じように質問の返答を強要されて、服毒自殺を図った」

「どういうこと！？」

「酒を一气飲みして潰れた」

「なんだ、つまらん」

「事実を話してなぜ失望されんといかん」

話せと言ったのは貴様だろうが。

「もつと詳しく話してもらうよー？」

「なぜに」

「だってー、石川さんが明らかに挙動不審なんだもんー」

確かに。こつちを見たかと思えば、目が合った瞬間逸らされるし。昨日のあの質問が尾を引いているのだろうか？だとしたら、姉ちゃんはまだ余計な事をしたことになる。

「明日は二人三脚一緒に出るんだろ？清水の怪我が直らなければ」

「無理だろ」

ただでさえ酷かった清水の怪我は、昨日調子に乗りすぎたせいで悪化したらしい。驚異的な速さで回復していたそうなのに、馬鹿な事をしたもんだ。それが清水と言えはそれまでだが。

「出るつもりはねえよ。体調が悪いことにでもしとけば休めるだろ」
「それで済めば一番なんだろうけどねー」

体育祭か……めんどい。

「体育祭に意味ってあるのかね？学生の本分は勉強だろ」

「うわー、旦那が駄目人間の発言してるー」

「駄目人間言うな」

「腐敗人間の臭いがするー」

腐敗人間！？

「旦那は運動ができないわけじゃないんだから、しっかりやれよ」

「この高校では平均以下だけど」

球技ならまだしも、ただの陸上競技で太刀打ちはできん。

「ならー、二人三脚はいけるじゃんー」

「女子とやって恥ずかしい思いをするなら、成績くらい捨ててやる」
胸を張っていつてやる。

「やっぱり腐敗人間だねー」

「日本の政治並みに腐ってるな」

もはや修正不可能なほどに！？

第七十四話 リーダーシップ

「長縄……それはクラスとクラスが全身全霊の力を籠め闘う、いわば体育祭一クラスが団結できる競技である。この種目を疎かにしての上位入賞など有り得ず、団結力と勝利への意志を問われる、血沸き肉踊る決戦である」

「……よくもまあそこまで捏造できたものだな……」

なぜ長縄如きに熱血要素を加えようとする。バトルとかいらないから。無事に一日が過ぎればそれでいいから。

「旦那、つまらんぞ？せつかくの行事なんだから、楽しめ」

「楽しもうなんて気力、昨日で尽きたわ」

「文化祭でか？」

「それもあるが、その後にあつた謝罪巡りと実の姉による苛めが大きかったな」

「若いんだからー、精力でなんとかしなよー」

精力で。俺にどうしろってんだ。

「それはともかく、他の皆のテンションを下げるようなことはしないでくれよ？」

「……善処する」

自信はない。

「みんなー！？元気かー！？」

「「オオーツー！！」」」

「……おおう」

テンション高いぞ皆の集。俺は疲れに加えて寝不足だつてのに、どうしてその高いテンションを維持できるんだ？話によれば、昨日クラスの一部の連中（音頭を取ってる夏目含む）は打ち上げに行った揚句に二次会^{ボーリング}に三次会^{カラオケ}をやり、数人に至っては徹夜らしいのに…

…体を労われよ。

「せーの！」

「……いーち、にーの、さん！！」

心の中でクラスの若者たちに苦言をしていると、練習が始まった。

「……いち……あ」

記録ゼロ回。当然といえば当然の結果だ。初めてやるわけだし。

「まあ最初だしな、ドンマイドンマイ。次いこう、せーの！」

……しかし何度やってもうまくいかない。飛べたと思ってても数回、最高でも十回に届かないという駄目っぷりで、不安ばかりが募っていった。……クラスマッチの時は異常な好成績を残したのに……。

意外とこのクラス、結束力はないのかもしれない。

「ふははははは、まるで駄目だな、お前ら！！」

「な、何者！？」

悪いイメージばかりが先行して、結果もそれ相応になるという悪循環に陥っていた俺たちのもとに、聞き覚えのある豪快な笑い声が聞こえてきた。

「あ……あなたは清水師範！？」

いつの間に昇進してたんだ清水！？

「やはり俺がいないと結束力が高まらないようだな！」

怪我のこともあり、縄を回すこともできない清水だったが、怪我を押して声出しをしてくれることになった。やはりこいつがいないとこのクラスはまとまらない……いい意味でも悪い意味でもムードメーカーだな。

「さあ俺を崇めろ！讃えろ！さすれば我が力、貴様らへと十二分に分け与えてやろう！！」

「……調子に乗るな戦力外」けがにん

「……すいませんでした……」

ホントにいい意味でも悪い意味でも、我がクラスのムードメーカーである。

第七十五話 掛声

「声出しは俺がやるから、あとに続けて叫べ！」

叫ぶのか。むしろそっちの方が飛ぶよりも疲れそうだ。

「せーの！ワン、トゥー、スリー！」

「なぜ英語！？」

普通にやれ、普通に！」

「おおー、三井が突っ込みを入れたねー」

「疲れてるだろうに……旦那の本能が疲労に勝ったのか」

やかましいわ。俺の本能は突っ込みの特化してるのか。嫌だぞそんな本能。

「一致団結するかと思っただが」

「どういう理屈で！？いないよ！掛け声が英語になったら一致団結する、アメリカな人はここにはいないよ！」

「I want to eat beef bowl」

「知らないよ！何を証明したかったのかは知らんけど、「私は牛丼を食べたいです」ではアメリカな感じは一向に出ない！牛丼って日本人丸出しじゃねえか！」

「そうか……訂正しよう」

……やっと声だしが普通になるのか。清水が納得してくれたようだなによりだ。

「I want to eat girl」（性的な意味で）

「訂正するのそっちかよ！しかも悪化してる！？「私は女の子を食べたいです」！？犯罪臭がバリバリするわ！危ない人だ！危ない人がここにいますよ！」

「しまった……つい本音が」

「本音！？本気で言ってたのかよ！？」

思春期の男子なら少しは考えるのもやむを得ないかもしれんが、声に出して言うなよ！女子いるのに！クラスの女子が勢揃いしてる

のに！

「……………」

「うわー！女子が清水のことをけだものを見る目で見てる！でも半分くらい「清水だしそのくらい考えてただろうよ」みたいな達観した表情なのが気になる！清水の評価は、女子内でどれだけ低いものになってんだ！？」

「そんな目で見るなよ。俺が変な趣味に目覚めたらどうするつもりだ！？」

清水は清水で反省の色なしだし！こんなで大丈夫なのか、このクラスの長縄は！？」

「……はい、では長縄続きやります」

清水が普通に戻った！テンションが下がるとそれはそれで不気味だな！

「ワン、トゥー、ヒアウィーゴー！！」

全く改善してないし！

……その後一時間かけて練習した結果、最高記録十八回、平均十回程度は飛べるようになった。なんだかんだで清水の声だしはかなりの効果があったようだ。

「でも隣で練習してたクラス、最高三十回飛んだみたいだな」

「本番勝負だからな……うまくいけば最高記録更新できるだろ」

皆の集中力も格段に上がるだろうし。集中すれば長縄はなんとかなると思うんだがどうよ？

「まあ回数飛べなかったからって、何かあるわけでもないしな」

「うわー、旦那ネガティブ」

「いつものことだろうが」

「それを自分で言ってるのはー、終わってると思うよー」
何が。

「人生」

スケールが大きいわ！

第七十六話 弾ける

体育祭当日の朝。体と心の疲れは未だ回復していないというのに、長縄の練習をやることで朝もはよから登校。例によって寝ていた義人をたたき起こし、時間どおりにグラウンドに集合（体操服には着替えた）したのだが……。

「……人口密度高いな……」

どこのクラスも考えることは同じなのだろう。二つあるグラウンドは生徒達の練習風景で埋め尽くされていた。やる気に満ち溢れるな……落ち着けよ。

「どのクラスも燃えてるな……お祭り騒ぎがそこまで好きか」

「そりゃ好きだろ。中でも二年の先輩方は盛り上がりが異常だ」

「理由は何かあるのか？」

「それはねー、二年が優勝の可能性が一番高いからだよー」

「三年じゃなくてか？」

「うんー。だって三年は部活引退してー、体力が落ちてるからねー」

「なるほど。それなら二年の先輩方のやる気にも頷けるな」

ただ、三年の先輩もやる気がないわけではない。はっちゃけ具合ではトップだろう。そんなに受験勉強は大変なのだろうか……？背中に旗（三年四組ばんじゃーい）と書いてある）を挿しながら、縄を回す姿はなかなかシユールだ。

「……はっ！まさか笑わせて他のクラスの戦意を喪失させる作戦か！？なんて恐ろしい……注意が必要だな、旦那！？」

「いらねえよ！もしその作戦だったとしても、出オチじゃねえか！」

「こ……これは負けてられねえ……」

「清水！怪我人が何考えてんだ！？対抗しようとしなくていいから！そういう勝負は種目にないから！ちよつとどこ行くんだ！」

「開会式までには戻るから練習はお前らだけでやっつけ！」

清水はそう言い残すと、松葉杖を突きながらも、かなりの速さで

去っていった。……一体何に対抗意識を燃やしてんだ……あいつは……。
「……掛け声はあいつが出すって言ってたのにな……夏目？練習どうする？」
「やるだけやっところ。清水がいなくてもできるってことを証明しところ」
そうは言ったものの、結局朝の練習では記録は伸びず。不安を残したまま本番に臨むこととなった。……まあ、いい記録が出なかったところでペナルティがあるわけではないし、いいんだが。

「ただいま！待たせたな！」

「清水、いまさら待ってねえよ。もうすぐ開会式だから並ぶぞ」

「何持ってたんだ？競技に必要ななら置いてこいよ」

「ふふ、これこそクラスの士気を盛り上げる秘密兵器だというのに……」

「はいはい、妄想も大概にしておけよ？」

「反応冷たっ！？」

「霸王 優勝は我が手にあり？ダサいな」

例の三年の旗に触発されてだろう。清水が作ってきたのは旗だった。文化祭で余っていた段ボールで作ったようで、即席にしてはそこそこ良くできていた。……文章にセンスが見られないのは致命的欠陥だと思うが。

「そのくせネタばれして、拳句の果てに酷評だと！？」

「……そんなことに時間かけるなら、練習手伝えよ」

「声出しはやるって自分で言ってたのに……清水君って自分の発言に責任をもてすらないんだね」

「このKYが」

「四面楚歌だ！この俺が、そんなに空気読めないと！？」

「いや、K Yだ」
キモチワザデヤレ

「ひどい！あまりにもひどすぎる！」

「ま、まあ清水君も悪気があってやったわけではないんだし……」

「石川さん結婚してください」

「いくら清水君が駄目人間でも、正直に言うのはよくないと思うよ？」

「やっぱり敵だらけだ！」

……今になって気付くとは、哀れなやつ。

第七十七話 敵命

「あなたたちに敵命を下します。藤田先生のクラスに絶対に勝ちなさい」

「何かあつたんですか健三さん」

また藤田先生とトラブルですか。厭きないですね、本当に。

「あの藤田先生、朝の会議でほんの十五分ほど寝ていただけで、いたい山本先生は何歳児ですか？乳幼児並みの睡眠時間を取らないと生きていけない奇病にでもかかっているんでしょうね。可哀想に」などと仰るんですよ？これは宣戦布告ととらえて構わないでしょう」

「……ちなみに会議は何分ほどかかったんですか？」

「十五分ですが」

時間いっぱいだよ！出席した意味ねえ！藤田先生もそりや怒るよ！血管そのうち切れるよ！

「そんなことはありませんよ。会議は出席することに意義があるんです」

「……その会議での連絡事項はわかりますか？」

「さあ」

さあつておい！しっかりしてくれ担任教師！
けんそうさん

「どうせ校長が気取って「生徒たちには北高生らしい毅然とした態度を守らせるように」とか、「体育祭で求められるのは結果ではなく過程だ」とかの、聞こえは良くても中身の無い話を延々と繰り返しただけでしょから」

校長の話を 中身ない 呼ばわり！？しかも聞いてもいないのに！？実際校長が毎回そんな話するのは事実だけど、それを教師が堂々と言っちゃうのはどうかと思うんだ！……それと……。

「……何気に校長のモノマネがそっくりですね」

「去年の忘年会での隠し芸ですから」

……そついう無駄なところへかける努力と情熱を、ほんの少しで

いいから会議に使ってくれたら、藤田先生もイライラで高血圧に苦しむこともなくなると思うんですが。

「私の貴重な睡眠時間は、どなたであろうとも削らせません」

「……あれ？それにしては文化祭の準備の日、わざわざ学校に来てましたよね？あの日は家でじつくり休めなかつたんですか？」

「訂正します。私の貴重な睡眠時間は、妻と娘以外には削らせません」

「……つまりは、家にあんまり居場所がないんですね……健三さん……。」

「受験生だからという言い訳は卑怯ですよ」

どこか遠くを見ながらつぶやく健三さん。……やはり世の中のお父さんの一人には違いありません……。

「なんか、健三さんに同情したくなりましたよ」

「同情するなら私のために働きなさい」

高圧的だ！

「……健三さんのためにも、頑張るぞー！」

「……おおーっ！」「」「」

……クラス間の空気が微妙だ……。

第七十八話 正直

校長の長話が大半を占めた開会式も終わり、第一種目の長縄に入った。一年 二年 三年の順に行われるため、俺たちが最初に競技をすることになる。全学年中、三分間で連続して多く飛べたクラスの順に高得点となる。他のクラスが何回くらい飛ぶのかはわからないが、ベストを尽くすことしかできない（妨害は反則。妨害をありにするか、生徒会では真剣に議論したらしい……が、「教育上まづいだろ、弱肉強食の世界にしたら」という数人の良識ある教師の反対により挫折した）ため、ガチンコ勝負である。

「いよし！気合入れてくぞー！！」

怪我はしても気合いは衰えない清水。立派だ。本番になると段違いに存在感が出てくるな。怪我人がしゃばってどうするということ意見もあるが。

「兼子、夏目！縄を回すときは大きく、できる限り飛びやすくしろ！」

「了解だ、死傷！」

なんか漢字違う！傷は負ってるけど、そこは師匠にしろってやれよ！

「死に物狂いでやれよ！長縄の後、お前らの腕が壊れてもいい！俺が許可する！」

「知らないよそんな自虐的許可！」

「了解、マスター！」

そこは了解するなよ！？

「途中で回せなくなったら俺が代わりに回してやる！」

だからお前は怪我人だろうが！つかお前の怪我で夏目にお鉢が回ってきたんだからな！？そこんとこ理解してるか！？

「……そんなこともあったな。てへ？」

気持ちが悪い！忘却の彼方へと消え去っていた事実もさることな

がら、筋肉質の大的男が「てへ？」とか言っな！あまりの気持ちの悪さに血の気が引いたわ！

「競技本番一分前です！一年は所定の位置へ集まってください」

馬鹿言いいあつてゐる間にもう本番か。

「いいか、一つ約束しろ」

清水がマジ顔になった。全力で勝ちに行く態勢に入ったらしい。

「第一声は俺が出す。だが、それに続いてお前ら全員も声をだせ！一致団結こそ長縄勝利の秘訣だ！」

……清水がまともなこと言ってる！格好いいぞ清水！

「……それと女子は高く飛べ！」

？

「理由は？」

「揺れるから……あ」

アホ清水！団結しかけたのに女子から大ブーイングが来たじゃねえか！台無しにすんな！

「競技開始です！三分間頑張れ！」

……この状況で開始ですかい……。

しかし、清水に対する変なエネルギーが功を奏したのか、うちのクラスは最高記録を更新する二十三回の記録をたたき出した。全体で十三位（三学年合計二十四クラス中）なのでまあまあだろう。……やってみなくちゃわからんものだな……。

第七十九話 工作

長縄が終わった後のリレー種目では、うちのクラスは残念ながら決勝に進めず。運動神経があまり良くない、精鋭陣から外されたメンバーだからやむを得ないか。

「俺も本来、そのメンバーだったわけだしな」

「やっぱ、ただ走るだけの種目はつまらんよなー、旦那」

「そうだよなー。障害物競走みたいなー、色モノ競技こそ体育祭の華だと思うなー」

色モノ競技と言っておきながら、体育祭の華と断言するのはどうかと。

「高校生が真剣に、全力疾走するのは青春って感じでよくないか？」

「そんなこと言ってもー、実力あるクラスは予選では手を抜いてるしねー」

「そうそう。いくら頑張っても陸上部、野球部とかを集中して配置してるクラスには勝てんよ」

そうなのである。体育祭ではクラスマッチと違い、チームワークなどより純粋な身体能力を競うものばかり。よって波乱万丈な展開はほとんどなく、予想通りの流れで進んでしまう。バトンパスも予選では安全策を取るところがほとんど。だから燃えようがない。

「しかし次は、うちが有利なトライアスロンだろ？予選なしの一発勝負だし、浜ちゃんの応援頑張ろうぜ」

「旦那、そう樂觀視するのはよくないな」

「む？」

「トライアスロンに参加する選手が水泳部なのは、うちだけじゃないってこった」

義人の言ったように、トライアスロン出場選手には、見覚えのあ

る顔が揃っていた。

「旦那、トトカルチョでもやるか？」

「堂々と博打に誘うな……しかし予想するのはいいかもしれんな」

「優勝候補筆頭はー、現部長の池山先輩かなー？」

「田村も捨てがたいな。元部長もいい線行くと思うが」

「ブランクがあるしねー。あとは松ちゃんとマサかなー？」

「どいつもこいつも強敵ばっかだな……まあ競技するのは俺じゃないけど」

気楽に応援するかな。誰が勝っても問題ない。

「そんなことでどうするんですか、あなたたち」

「健三さん？」

「藤田先生のクラスの選手は……片山ですか。ちょっと行ってきます」

どこにですか……あ。マサと接触してる。

「……………」

「……………」

「何か話してるな」

「マサに何か渡してる？」

「あー、藤田先生出てきたー」

「健三さんの頭をひっぱりたいな」

「そのまま強制退場させられてる……何したんだあの人」
真相を知ろうとマサに話しかけてみる。

「おーい、マサ」

「ん？どうした？応援に来てくれたか？」

「いや、一応クラスの浜ちゃん応援するから。マサもついでに応援するけど」

「ついでかよー！まあいいけど。じゃあなんだ？」

「今健三さんから何話しかけられた？」

「……なんか「私のクラスが体育祭で勝たなければ娘が受験に失敗すると天啓を受けまして……」って相談された」

何やってんだあの人!?

「その後「これで手を打ってください」って言ってこれを渡された」
マサの手にあったのは……>ポケモン青（ローソン限定版）<。
「懐かしい!しかしそれでどうこうなると本気で思ってたのか健三さん!？」

「危うく買収されるところだったよ」

「されるなよ!？脆い!脆いぞマサ!」

「で、その後藤田先生が出てきて「何バカなことやってんですか!」
って穏便に引き取ってもらった」

「周りで見てたけどあれは穏便と言わないから!」

「トライアスロンに出場する選手は集まってください」

「集合来たな。じゃあやってくるわ」

「……そのポケモン青はどうするつもりだ?」

「そうだった。預かつといてくれ」

そう言つて義人に預け、去っていった。まあ、頑張れ。

池山先輩一位、田村二位、マサ三位、松ちゃん四位、浜ちゃん五位、元部長六位。上位を水泳部が独占して、トライアスロンは終了。残念ながら藤田先生のクラスとの差は開いてしまった。

「全く、浜口は何をやってるんですか」

足の速さ（長距離）ではマサの方が上だったし、仕方がないと思います。

「……中間テストの査定が厳しくなるでしょうね、可哀想に」

健三さん!？職権濫用するな!？

「冗談です」

……わかりづらい冗談はやめてください。

第八十話 変化

午前中の競技は大半が終わり、残すは二人三脚のみとなった。この種目も予選はなく、一発勝負となる。かといって全クラス同時に走り出すのではなく、何組かに分かれてタイムで順位を決めることになる。

「まあ、うちのクラスは出場しないから関係ないかな」

「何言ってるんだ旦那。出場しろよ」

「そつだよー」

「男相手とならまだしも、女子とペア組んでなんか出れるか。俺の心には尊厳と羞恥心が同居してるんだ。お前らと違って」

「失礼だな。俺たちのどこが羞恥心がないって言うんだ」

「羞恥心のあるやつは人前でオタ芸を披露しない」

「それは置いておいて」

「強引に話を切りかえるな」

「出場しなつて。体育祭は参加することに意義があるんだぞ？えらい人が言ってた」

「校長を偉い人と呼ぶなら、確かにそう言ってたな。長縄に参加したし、午後の応援合戦にも出るぞ？だからオツケーだろ」

「どっちもクラス全員の強制参加種目じゃんー。つまんないよー」

「体育祭に面白さを求める生徒がどこにいる。一応授業の一環だぞ」「あそこー」

石井が指で示した先には、狂ったように応援する最高学年の先輩方。肩を組み、体を揺らしながら応援歌を歌う姿は常軌を逸していると言わざるを得ない。中には冷静で通っていた我らが水泳部の元部長もいるし……。受験勉強が変えてしまったのか？そうなのか？

「……恐るべし大学受験……」

「ああなりたくなかったら、今この二人三脚に出場することだ」

「趣旨変わっるとる！？」

「そうですよ。参加しなさい」

「健三さん」

「今、我がクラスは藤田先生のクラスに点数で負けています」

「しかもー、それなりに点差が開いてるよねー」

「そうです。その点差を少しでも返すため、不戦敗など認めません

……あくまで教師として」

後付けですよねその理由！

「でもですね？俺がよかったとしても二人三脚にはもう一人必要なんですよ？」

タツミだつて恥ずかしいだろう。もし出ようもんならからかわれることは間違いない。害はあつても利はないのだ。おまけに、少し前から避けられてる気がしないでもない。

「わかりました。石川さんが良ければ出るのですね？」

「そこまでは言つて……」

「かもん、れつどすねーく」

そのネタがわかる人はこの世代にいるのか？

「お呼びですか？マスターケンゾウ」

HR副会長？いいのかこんなノリについてきてしまつて？間違つた道に進んでるぞ。

「石川さんを出場させるよう説得してきてください」

「わかりました。三井君、期待しててください。ミッションは必ず成功させます」

「俺は成功を求めてないから」

頼むから欠場させてくれ。

第八十一話 囁き（前書き）

ええじゃないかそのに、十万アクセス突破です。八十話を超えてようやく……です。遅い（人気はない）大して面白くない）のでしようが、それでも読んでくださっている読者さんに最大級の感謝を。本当にありがとうございます。何かできることがあればできる限り応えたいので、ご意見待ってます。

第八十一話 囁き

「辰美、二人三脚でるよね？三井君と一緒に」

「え！？だってなおくん出たくないって言ってたし……」

「私は辰美の意見を聞いてるんだけどな？」

「……………」

「文化祭の時の様子だと、後輩の子……古木ちゃんとかかなり仲良さそうだったよね、三井君」

「……………」

「やけに親密そうだったし……あのまま付き合うことになっちゃうかなあ？このままだと」

「……………」

「でも辰美、三井君に助けられて惚れ直しちゃったんじゃないの？ん？」

「……………！」

「もしこの競技に一緒に出たら、心も体も三井君に近づけるんじゃない？」

「…………物理的には近づくけどね」

「いい思い出にもなると思うな。青春のページ」

「沈黙は肯定と受け取ってもいいのかな？それでどうする？出たいの？出たくないの？」

「…………出る」

「んー？声が小さいなあ。聞こえない」

「出たいです！二人三脚、なおくんと一緒に出たいです！」

「一名様ごあんなーい！センサー！辰美、参加承諾したよ！」

「上々です」

「さて、三井。退路は断られました。あとは出場する以外に道は残

されておりません」

「急に持病の喘息が……」

「諦めが悪いぞ、旦那」

「それにねー？石川さんの勇気を台無しにするのはよくないと思うよー？」

「勇気？……ああ、男子と参加することで注目を浴びるのは確定だからな……それでも健三さんのために出場するとは見上げた度胸だ」
「うわ……こいつマジで言ってるよ……」

「……義人、引きすぎだろ。俺が一体何をした」

「まあいい。旦那には不参加と言う選択肢はない。出場しろ。面白くなりそうだし」

「明らかに最後のが本音だよな！？」

「その通りだ」

「堂々と言いやがって！」

「人ごとだし」

「どうでもいいけどー、もうすぐ参加者の集合始まるよー」

「いけ！三井」

「……タツミ呼んでくる」

この後、陰口とか大いにたたかれることになるんだろうな……。

「タツミ、二人三脚いくぞ」

「……参加してくれるんだね？」

「怖気づいたか？なら不参加にするか」

「後ろ向きなものほどほどにね……そんなに参加したくない？」

「タツミが嫌なら、いつでも出場を取りやめる準備はできてる」

「……参加はしたいんだけど……」

「それならそれでいい。出るぞ」

そう言ってタツミの手首をつかみ、連れて行こうとすると、近くにいたクラスメイト（女子）から黄色い声が上がった。

「きゃー、三井君だいたーん」

「愛の逃避行！？そのままどこか別の場所に行ってもいいよ？」

「ちょ、みんな!？」

「やかましい黙ってくださいお願いします」

くっ、参加する前からこんないじめを受けることになるうとは。くじけそうだけ。

「三井は女子相手には弱いな」

うるさい。俺はジエントルマンなんだ。

「紳士はやかましいと言わねえよ」

「タツミ、いいから行くぞ……練習とかしてないけど、大丈夫だよな？」

「……うん、頑張る」

「愛の力で頑張るってか、ハハハ。ふざけんじゃねえ三井!!」

「清水、勝手に妄想して切れてんじゃねえよ!」

「あああ愛の力!？」

「タツミも過剰反応すんな!」

……こんなんで完走できるのか？

第八十二話 視線（前書き）

……夏休みまであと一日……会計のテスト……単位落とせない……
ファイト俺……。

第八十二話 視線

競技に参加するために、手拭いで俺の右足とタツミの左足を結びつけた。周りの出場選手を見渡しても、男女ペアは見当たらない。

それは当然だろう。男女では体格が異なるし、何より股下のリーチに開きがある。そのため普通に息を合わせて走っては転ぶ確率は格段に高くなる。クラス対抗戦であるこの体育祭において、そのようなりスクを負うのは無謀だ。よって、そんな珍しいペアは俺たちだけということになる。

「だからこそ、俺たちは注目的になっているわけだが」

「そ、そうだね……」

足を結んだことで、俺たちは密着状態。やわらかいタツミの体が触れているので、俺は緊張しっぱなしだ。それ故、俺の口数は少なくなっている。

「旦那ー！今の気持ちを一言ー！」

「こんなプライバシーのない空間で喋れるか！」

わざわざグラウンドの外、クラスの応援席から煽るセリフを吐くとは……。

「見せつけてくれちゃってー！このこのー！」

「いいぞ、辰美ー！このまま既成事実を作っちゃえー！」

こんな煽り文句を叫ぶのは皆、クラスメイト達。敵は応援席にあり。本能寺にはない。

「ちっ！彼女もちはいいいな！」

「まあ待て落ち着け。ここはな、合法的に制裁を与えるのが一番だ」
「体育祭か……事故で体が動かなくなってもおかしくないな」

「怪我人がでないよう気をつけないといかん？あくまで可能な限りで、でたら仕方がないと諦めるしかない」

「真剣勝負に怪我人はつきものだ。場合によっては死人も」

「つきものだな」

つきものじゃねえええ！！何これ！？安全なはずの体育祭が、このままでは死地が変わってしまう！

「違うぞ！？俺とタツミはそういう、なんていうか……お前らが妄想するような関係ではない！」

「おいおい、何か言ってるぜ？」

「なに？俺たちの関係はお前らが想像している関係からは、数十歩先に進んでるぜ？君たちのピュアな半生では想像もできないような関係にな」だど！？」

「ふざけやがって！」

「どうやら死にたいらしいな……」

「そんなこと言ってるねえ！」

駄目だ！こいつら正気を失ってる！中には二年や三年も含まれて
いるのが恐ろしいぜ！

「タツミも何か言ってくれ！お前が否定すればまだ何とかなるはず

……」

起死回生の一手だ！ナイスアイディア俺！

「……………」（ぎゅっ）

「！？なぜに体をさらに密着させる！？恥ずかしい！んでもって、こんなことしたら余計に嫉妬が……！」

「Fuck you」

「Kill you」

「Shit！」

やつぱり！このまま出場したらやばい！彼女なしの男子ペアと一緒に走ろうもんなら、何をされるかわかったもんじゃねえ！

「……別に勘違いされてもいいもん……！」

タツミのつぶやいた言葉は、周りの男子からの罵声によってかき消され、俺の耳には届かなかった。

第八十三話 只管

「位置について……よいい」

パン！

「位置について……用意」

バン！

「位置について……ヨーイ」

ズギユウウウウン……！！

「待て！？最後のスタートの合図だけ、明らかに別物だったぞ！？」

「落ち着きなよ、なおくん」

しかもジョジョ風ってどういうことだ！？しかもそれに構わず、一系乱れずスタートする連中……訓練されてるのか！？突っ込みを入れないように調教されてるのか！？

変な噂を助長しそうなタツミの行動、それに過剰反応する一部の生徒のおかげで、俺は協議開始前から疲れ切っていた。五、六ペアが同時にスタートして、それを五回繰り返しタイムを競うのがこの種目のやり方。最終組に登録されている俺とタツミのペアは順番待ちで、足を繋がれたまま直射日光のあたるグラウンドの中央で座っていた。日陰くらい作ってくれればいいものを……生徒（と言っか俺）が脱水症とか熱中症になったらどうするつもりだ。もしなかったら盛大に騒ぎ立てて問題にしてやる……！

「なおくん、それは日頃から直射日光に当たってる水泳部が言うセリフじゃないと思うよ？」

「それでもあえて俺は言う。インドア派の人たちのためにも……！」
「後ろ向きな発言をそこまで真剣にされても……」

なんやかんやしているうちに、四組目がスタートした。次が最終

組、つまりは俺たちの出番だ。

「ほれ、行くぞタツミ」

「待って……あっ！」

すっと立ち上がった俺だったが、一つのことを失念していた。今、俺とタツミは足が繋がれているのである。よって俺一人が立ち上がっただけではバランスが崩れる。バランスが取れなければ人間は立つていられなくなる。つまり。

「おおっと！？旦那が石川さんを押し倒した　ッ！！」

「三井ー、いくら耐えきれなくなったからってー、白昼堂々人目があるところで押し倒すのはどうかと思うよー？欲望に忠実なだけではけだもの同然だよー」

人聞きの悪いこと言うんじゃないやねえお前ら！タツミの上に倒れ込んでしまったただけだろうが！俺が全面的に悪いのは認めるが、騒ぎを大きくするな！

「すまんタツミ、すぐどくから！」

「……………」

顔を真っ赤に染めてしまったタツミに罪悪感を覚えながら、すぐに立とうとする俺。しかし立つても足が繋がれている事実は変わらない。そんな当然のことにも気付かないほど俺は動転していたらしい。同じ過ちをもう一度繰り返してしまった。

「二度目！二度目！」

「旦那！もういいや！そのまま行け！俺が許す！」

「いいよー」

よくねえよ！写真撮るな！こっちに注目するな！競技中……ああもうゴールしてるし！

「ごめんな、タツミ。本当にごめんなさい……………」

やっとのことで足の手拭いがほどけ、どくことができた。その後、はひたすらタツミに平謝りである。

「…………この件は、後でゆっくり話そう？」

「わかりましたごめんなさい」

「もう二人三脚もスタートするし……」

「そうだなごめんなさい」

「い、今は競技に集中しよう?」

「可能な限り頑張るごめんなさい」

「……なおくん罪悪感芽生えすぎでしょ……」

そんなことはないぞごめんなさい。

第八十四話 再認識

悪いことは重なるもので、二人三脚で女子と出場 疑惑＋嫉妬の視線に晒される 順番待ちしてたら転んでタツミを押し倒す格好に注目度がさらにアップ……という事態に陥ってしまった。それでもまだスタートしていないとは、何と人生とは辛いものであるのか。「いちゃいちゃいちゃいちゃしやがって……俺の隣になったのが運のつきだ……正々堂々と潰してやるからな……！」

一学年上の先輩（つまり二年）が凄んできた。……もつとも、涙目なので迫力は薄れているが。

「落ち着いてくださいよ、名も知らぬ先輩」

「後輩のくせに、彼女と仲の良さを見せつけるための参加とはいいい度胸じゃねえか」

「そんな目的ありませんよ。そもそもタツミとはただの友達で

」

（ぎゅっ）

「なっ……！タツミ、冗談は後にしてくれ！笑って済ませられる状況でなくなる！？」

「ちくしょう！俺に何が足りないというんだ！」

「しいて言えば出会いだろうね、落ち着きたまえ」

騒ぎ立ててた先輩のパートナーは、冷静な人だった。というか、大人？

「女子と組んで二人三脚に出るなんて、変わってるね？なにか事情でも？」

「そうなんですよ！実は本来のパートナーが、部活で怪我して出れなくなっただんです。困ったものです」

よかった、良識人で……。これなら下手に妨害されたり……ってことはないだろうな。……あれ？なんで俺、こんな当然なことに喜んでるんだ？末期症状？

「ところで、質問してもいいかな？」

「どうぞ？」

常識人には誠意ある対応を見せる、それが俺の信念だ。

「……競技中はギア2^{セカンド}まで使っつてことでよろしいかな？」

「よろしくないですよ！どんな化け物ですかあなた！？」

……不覚……！やはりこの高校に常識人など望むべきではなかった……！

「だいたい妨害自体反則ですから！ギア2で俺を殺す気ですか！？
……いや、そもそもギア2使えたら人間じゃない！出場停止でしょう！」

「いやだなあ、冗談だよ。本気にしないでくれたまえ」

「……ですよね？」

「ただ第三形態まで変身が可能なだけだよ」

「だけって言いません！それは明らかに人としての領分を超えてます！」

「まあ、第三形態になったらそれだけで十八禁映像になってしまうけどね」

「どんな秘密を隠し持つてるんですか！？」

「裸になってしまっし」

「そういう意味か　ッ……！」

駄目だ、この先輩もおかしい人だ。キャラが濃い。勝てる気がしない……！

まあ、勝たなくていいけど。

「位置について」

ようやくスタートか。疲労も最高潮だぜ。

「よーい……」

にゃおーん。

「スタートしてください」

「今の合図かよー！」

そんなんでスタートできるか！？

「なおくん、もうみんな走ってるよ?」

できるのかよ、おい!

「……………」

で、隣の先輩方は早速こけてるし!なんだかなあ、もう!

「一度もこけることなくゴール。二十四組中、タイムで十四位は立派な成績だと思うんだ」

「そうかもな、旦那」

「それはそうと、俺はお前に言いたいことがある」

「手短に頼むよ」

「……辞世の句はそれでいいのか?」

「なぜ!?!」

「……あれだけ人の醜聞を広めてくれて、よくもまあ……」

「お、お祭りだからいいじゃないか」

「そうだな、お祭りだから派手なものが欲しいよな」

「そうだな!応援用のメガホンでも作ってくるから俺はこれで」

「

「十字架を応援席に挿しておこうか……人を括りつけて」

「ひいひいひいひい!旦那、目が本気!冗談になってない!」

「当然だ……本気だからな」

「ぎゃあああああ!」

「までこらああああ!」

……残念ながら、義人と石井(義人と違い、俺が返ってくる前から逃亡)の十字架をさらすことはできなかった。……ちつ。

第八十五話 拝借

応援合戦と言う種目がある。赤（奇数クラス）と黒（偶数クラス）に分かれ、北高の応援歌を歌うという何が楽しいんだかわからない種目である。責任者は何を考えてこの競技を入れたのだろうか。

「つまらん競技だ……」

「まあまあ旦那、ストレス発散になるかもしれんぞ？」

「……ストレスの原因が何を言ってやがる」

昼休みに逃げ続けられた後、集合がかかってから義人と石井の二人は揃って現れた。さすがに教職員のいる前（特に藤田先生とか小倉さん）で暴力を振るうのは自殺行為に近い。しぶしぶ我慢していたというのにこいつは……。

「とよはーしきーたこーうこーう！」

運動部の連中は声が大きいな。意味もないのに、よくあんなテンションを保てるもんだ。感心する。

「旦那も運動部だけだな」

「それは言わない約束だ」

応援合戦も終わり、次は色モノ競技、障害物リレーである。パン食い競争、アメ探し、などの障害物がある各コーナーに代表者を選び、クラス対抗でリレーをする種目。その中で義人が出場するのが借り物競走である。

「どなたか！どなたか水筒を持っている方はいませんか！？」

ふむ。水筒なら持っている人も多いだろう。いい借り物を引いたな、あのクラス。

「誰か！誰かバドミントン部の人来てくれ！」

ものだけでなく人もあり得るのか。義人は何を引くか見ものだな。

「おい、この中に「なんとか還元水の戯言で有名な、自殺した農林水産大臣の名前がわかる人」いないか？」

「なんだその借り物！？クイズじゃん！松岡元大臣だろ！わかるよ！機内にお医者様はございませんか！？」

「ここ機内じゃないよ！陸上だよ！

「百万円持っている人いないか！？あなたのお子さんが事故を起こしまして……」

「振りこめ詐欺だ！誰か詐欺事件が起きてますよ！

「PSPが欲しいです」

「勝手に買えよ！

「旦那、来い！」

「俺を直接指名するなよ、義人！」

「……では、借り物の確認をします。よろしいですね？」
「オッケー」

「……なあ義人、借り物は何だったんだ？」

「同じクラスの人、とか？もしくは水泳部とか、一年とか……男子、とか？」

「>ツッコミくですね」

「ツッコミじゃねえよ！」

「合格です」

「しまった！つい反射的に……！」

「いやー、旦那のおかげで助かったよ。全体でも上位だったさ」

「……俺の存在意義はツッコミなのか……？」

「まあいいじゃん。いい順位だし」

「……釈然としない……」。

第八十六話 運動

体育祭もいよいよ大詰め。花形種目のリレーも数種目が決勝を終え、残すは男子九百メートルリレーのみ。我がクラスの精鋭（清水除く）で構成された切り札である。予選でも好タイムを弾き出し、優勝候補の一角にまでなっている。

「ガチンコでの勝負は燃えるよねー。青春の象徴って感じでー」

「勝負の場に立ってないから言えることだな。決勝なんて緊張しっぱなしになるだろうに」

俺ならバトンパスの失敗とかフライングとかを気にして、百パーセントの力なんて発揮できん。できたところでたかが知れてる能力だけ。

「そうでもないみたいだよー」

「ん？」

見ると、集合地点にいるクラスメイト（柳、深谷、兼子など）は気合い十分で円陣を組んでいた。

「いいかー！俺たちが目指すものは一位のみ！ミスなど気にするな！一かゼロか、結果はどちらかでもいい！様子を見て妥当なところに落ち着く……そんな大人になるのは嫌だ！」

「……」

「……」

知らねえよ。そんな士気を上げる役割で、円陣の中心にいるのは清水。選手じゃない（しかも怪我人）にもかかわらず、当然のようにその位置にいる姿は風格すら感じさせる。でも集合場所にまで行つてやることじゃない。他クラスの迷惑になるから帰ってこい。

「いやいや、鼓舞激励するのに清水以上の適任者はいないだろ」

「……それにしても、戦略を清水に託すのはどうかと……」

猪突猛進、振り向くことのない清水の性格がよく表れた作戦（と言つか意思表示）。しかしそれは、失敗すれば失うものが大きすぎる。

「そうですね。転倒でもしたら一巻の終わり……タイムなどより勝つことを重視してほしいものです」

あ、健三さん。

「今、藤田先生のクラスとの差はほとんどありません」

「まあ負けてはいますけどね」

「黙りなさい。あの人のクラスも残念ながら決勝に出ているので、それに負けたら完全敗北となってしまいます」

「それなら、状況に応じて……」

「そんなこと言ったところで、あの洗脳に掛かった人たちは聞かないでしょう。一位しか狙いませんよ」

洗脳で。まあ清水の激励で、あのメンバーの目の色が変わったのは事実だが。

「はあ……負けたら藤田先生に何を言われることやら」

勝ったら勝ったで健三さんも嫌みの一つや二つ言うでしょうに。

「体育会系の人たちの脳構造が理解できません」

「俺ですよ、健三さん」

なんであそこまで盛り上げられるのかとか。

「……だから旦那も体育会系だろ……」

球技以外に興味はありません。

「旦那水泳部！」

第八十七話 サルベージ

「いけー！深谷！ラスト五十メートル！」

「あと少し、頑張れ！」

「抜かれるなよ！……よっしゃあー！！！」

最終種目、男子九百メートルリレー。我がクラスは三位と、高順位で幕を閉じた。

「ええいぬるい！俺が走れば一位だって狙えたものを……！」

清水はこの結果には不満なようだ。そんなこと思いうくらいなら、二人三脚なんかに登録しないでリレーに登録しとけ。ついでに言うなら怪我しないよう気をつけて運動しろ。

「いやいや、ラグビーで安全に運動なんてできないだろ」

「まあ、あんな危険なスポーツだしな。俺には絶対できん……で、どうなった？うちのクラスの総合順位は？」

全種目が終了したので順位も出たはず。

「それがですね……残念な結果に終わってます」

「どうかしたんですか？」

健三さんが意気消沈している。

「藤田先生のクラスと同順位です」

「具体的には何位なんです？」

「ああ残念です。あと一歩だったというのに……。せめて深谷があと一人抜いていたら……」

聞いちゃいねえ。

「最後、あのリレーであと一位でも順位が下がったら負けだったわけでしょう？上々な結果じゃないですか」

「……負けてないだけ良かったとしますか。しかし、残念ですね」

「はあ、そうですね」

たいしてそう感じてないけど。

「藤田先生のクラスに勝っていたら、クラス全員におごってあげよ

うと思っていたのに」

「本当ですか？ そうだとしたら残念ですね」

他のクラスの先生には、ジュースをおごってくれる人もいるらしいし、実現していたかもしれんな。

「クラス全員にチロルチョコを進呈しようと思っていたのですが」
安上がりだ！

「総額八百円の大プロジェクトだったのですが……おいしいことをしましたね」

それなら買収に使おうとしたポケモン青の方が費用掛かってるんじゃないか？ この人の金銭感覚がわからん……。

「閉会式を行います。選手、教員は所定の位置に並んでください」
執行委員から集合の合図がかかった。ようやくこの体育祭もフィナーレを迎えるようだ。暑いばかり、疲れるばかり（タイム計測するのに駆り出されたり、雑用させられたり。小倉さんの命令）で面白いものではなかったが、授業の一環だし仕方がなからう。

「そうだな、旦那は石川さんを押して倒して密着してたしな。暑い暑い」

「思い出させるんじゃない！」

せっかく忘れようとしている過去の過ちを、わざわざ復元させるな！

第八十八話 打上

「さーで、皆、グラスは行きわたったかー？」

「きてるぞー！」

「さっさと始めろー！」

「いいみたいだな……。それでは！文化祭の成功と体育祭の健闘を祝して！」

「「「かんぱーい！！！」」」」

打ち上げ会場は焼き肉屋。量は少ないし金も高いが、近いことを理由にここに決まった。もったいないことこの上ない。いくら文化祭の儲けがあるにしても。

「……ふう……」

「旦那、どうした？辛気臭い顔して」

「いや、二学期の主要イベントが早々に終わったと思ってな……」。

これで日常に戻るかと思うと、ホツとする」

日常生活も、この学校では非日常なことが多いけれども。それが普通になってるんだから、人間の適応能力は底が知れない。

「三井ー、ちよつと女子が呼んでるよー」

「断つといてくれ」

「よしわかった……っておい。用件も聞かずに断るなよ」

だって面倒な匂いがプンプンするんだもん。

結局、呼ばれたところに連れられてきてしまった。……用件を聞くのが怖い。

「……用件は？三秒以内に言え」

「辰美ちゃんと付き合え」

ちつ、三秒で答えよつた……って……え？

「はあ！？付き合えって……ちよっ……はあ！？」

「旦那動揺しすぎ」

「いやー、辰美ちゃんが酔っぱらっちゃってねー？相手するの代わってほしくてー」

「……そういうことか。……お酒は二十歳になってから。」

「断る」

「じゃあこっちにいるから。よろしくねー」

無視ですか。俺に拒否権はないんですか。ないんですねわかります。

「……やっぱ面倒事じゃねえか……」

「それが旦那の生きる道」

面倒事を一手に引き受ける人生なんて嫌じゃ！

「ああ、そうそう」

「なに？」

「……酔っぱらってるからって、襲っちゃ駄目だよ？本人の同意……意識がはつきりしてる時にしっかり確認しないと、そういうことしたら？」

しねえよ！俺をなんだと思ってたんだ！？

「男は皆、狼なんでしょ？本で読んだよ？」

「何の本じゃ！？そういうのは……そう！一部！清水みたいな一部の男子だけだから！」

「そこで俺をたとえに出すのは、悪意があるからと理解していいかい？」

「だって事実じゃん」

狼には違いない。

「これは心外！おかしいよな！皆！三井の返答は明らかにおかしいよな！」

「「「いや、全然」」」

「苛めだ　　……！！！」

……そう思うなら日頃の行動を改めろ。人の印象は日頃の行動で決まるもんだ。

第八十九話 拉致

「きゃはははー、なおくん飲んでるー？」

……数少ないこのクラスの常識人が壊れた時、俺はどうすればいいんですか。

「三井君、あとは任せたよ」

ちよつと待て。

「……なぜこうタツミの人格が崩壊しているのか、話を聞かせてもらおうか」

「……お酒って怖いよねー」

「とりあえず酒は二十歳になってからしか飲んではいけない、そういう常識を知らなかったのか？」

「そんな形式的なもの……」

「形式的なものでも守らなかった報いを、なぜ俺が償うことに？」

「それは……そう、辰美ちゃんが呼んでたんだよ」

「今の間は？」

今言い訳を考えたと思えんのだが。

「それになんだ……この壊れたタツミの相手を、俺一人がするのは無理あるだろう」

「大丈夫。辰美ちゃんとは三井君一人いればお腹いっぱいになるから」

わー、無責任な発言を堂々と言いやがりましたよ、この女子。その無責任さが今の状況を生み出したことを、まだ理解できやがりませんか。

「んもー、なおくんー、アキちゃんとはっかりお話ししないでー、こっちに来てよー。きゃははははー」

……うん、最後の笑い方、あれはもうアウトだ。三重殺なみにア

ウトだ。……まあ期待してなかったけどね！

「ほらほらー、いいからこっちに座ってー」

そう言ってタツミは自分の横の席をバンバンと叩いた。……そこ

に座れと？酔っぱらいの酌を俺にしろと？

「嫌だ」

「はいどうぞー」

「石井てめえ！？」

「人身御供は旦那一人で十分だな」

「義人まで！？この裏切り者！」

「何言ってるのー？」

「だから仲間である俺を売って……お前たちには良心の呵責がないのか！？」

「旦那が女の子と一緒にいられる機会を与える……友達思いのいいやつだなあ、俺たち」

「現実から目を背けて、妄想で生きようとしてるお前らが何を言うか！？」

「む、旦那。それは違うぞ」

「……すまん、親しき仲にも礼儀ありだな。少し言いすぎた」

二次元で生きようとはしてないよな……趣味なだけで。感情が高ぶって悪いこと言ったな……。

「そうだよー。僕たちにとっての現実リアルは二次元なんだからー」

「訂正箇所そこかよ！？」

駄目だこいつら。もはや矯正不可能なほどに毒されてやがる……！

「まあそんなわけでー」

「逝って来い、旦那」

「待ちやがれダメ人間二人ー！」

両脇を二人に抱えられ、タツミの席の横に縛り付けられた俺は、誰から見ても惨めだろうな……。もうヤダ、こんな扱い。

第九十話 拷問

「ねえねえなおくん、面白いダジャレ思いついたよー。くっ……
ぶぶぶ……>マッカーサー元帥がキスされて、真^まっ赤^かーさーく……
うぶぶう」

「ぶぶ……また思いついた……ポカリで殴られた。ポカリ。う
ぶぶぶ」

「聞いて聞いて、なおくと、腕をなお、組^くんでる……ぶぶ……
ぶぶぶぶぶぶ……」

……誰か……助けてください……。

前に幼なじみ四人で飲みに行った時にも思ったのだが、タツミは酒に弱すぎだろ……。前の時は一気に飲んで、すぐに酔い潰れて寝たからよかったものの、今日は違うらしい。誰がここまで飲ませたのかは知らないが、壊すなら最後まで責任は取ってください。心からお願いです。

「ぶーんぶんぶんぶーんぶーん」

この酔っぱらいは気分上々（鼻歌で学園天国を歌ってる）だし、俺を開放する気はさらさらないらしい。打ち上げとは楽しむためのものだと思っていたが、どうやら違うらしい。こんな状況で楽しめる人がいたら、ぜひ見てみたいものだ。てか代わってくれ。

「んー？なおくん楽しんでるー？」

「……こんなん楽しんでるなら、俺の人生はもつとバラ色だった
だろうな」

残念ながら、俺は義人たち（頭の中がお花畑でいっぱいの方々）とは違う。いい意味でも悪い意味でも。

「私と一緒に楽しくないんだ……」

さっきまでケタケタと笑ってたかと思えば、今度は急にローテンションになってしまった。……周りからの視線も痛いのだが、俺が一体何をしたというんだ。悪いことなんてしてないし、事実を言っただけなのに。……俺、悪くないよな？非難されるべきじゃないよな？

「……そんなことないぞ？」

少なくとも普段は。

「……そんなこと言って……嘘なんですよ？なおくんなんて嫌い……」

あー！どうしてこう酔っぱらいは感情の起伏が激しいかな！鬱になっただらとことんまで鬱になって人の言葉を素直に受取ろうともしないし！面倒くさいなあ、もう！

「ひそひそ……」

「ひそひそ……」

「周り！聞き耳を立ててるんじゃないやねえ！なに「こいつ最低だな」みたいに軽蔑してんだよ！？」

「こいつ最低だな……」

「三井君、最低……人の風上にもおけない……」

「死ねばいいのに……」

「だからと言って声にだして言わないでくれよ！へこむから！あと最後！明らかに言いすぎじゃ！終いにや俺も泣くぞ！？」

俺が悪い、そういう雰囲気が充満していく部屋は、俺にとってさらに居心地の悪いものへと変貌を遂げていくのだった……。

第九十話 拷問（後書き）

メッセージにて、北高の場所を問われました。せっかくなので答えると、愛知県東三河の高校です。モデルの高校（てか作者の母校）がそこなので。田舎も田舎ですよ！。

第九十一話 酔狂

「だいたいねー、なおくんはー、もつと身だしなみに気を使うべきだと思うんだー」

今度は説教上戸か。決めた。俺、将来酒はほどほどにしか飲まないようにしよう。こんな迷惑な人種になる辛さを思えば、酒を飲むことで得られる楽しさなんて微々たるものだ。

「旦那ー。あそこまで壊れる人なんてそうはいないから。そこまで神経質にならなくてもいいから」

うるさい。お前ら変人が酒飲んであんななら納得はいくが、常識人だと思っていたタツミがあそこまで壊れるんだ。酒は麻薬の一種だ。俺は今日からそう認識する。

「聞ってるのー！？そんなだからねー」

「はいはい聞いとるって。つまりは普段から身だしなみに気を使えばいいわけだな？」

酔っ払いの言うことに賛同しておけば、この場は丸く収まるだろう。もちろん口だけで、俺はそんなことをする気は毛頭ない。時間がもつたいないし、そもそもくせ毛だからいくら押さえつけても整う気配が微塵も見られないからだ。別にいいじゃん、人は見た目だけじゃないんだし。

「三井ー、一時期 人は見た目が九割 って本がはやったよねー」

そんなもの、見た目が勝ち組な人たちの自慢だろ。大体、俺の服装はきちんとしてるから問題ない。普段着はユニクロで十分だ。

「なおくん！そこー！どこだ。」

「普段着も含めて、身だしなみに気をつけるべきだと、私は言いたいのに！」

そんな熱弁をふるわなくても。冷静になれよ。……酔っ払いに言っても無駄か。

「普段着から格好よくしておけば、なおくんは間違いなくもてるから！」

俺の人生で、そんなことを言われる日が来るとは思わなかったな。酔っ払いの言葉だし、信憑性は薄いが。

「はいはい、じゃあこれからは注意して、できる限りもてるように努力いたしますよ」

「それは駄目！」

「……一体俺に何を求めとるんだ。」

「格好いいのは私の前だけでいいから！他の女の子に媚を売る必要はないから！」

媚？身だしなみを整えるのと媚を売ると、どう関係が？

「わかつたら返事！」

「……はい」

「声が小さい！」

「はい」

「……これからタツミと会うときには、身だしなみを整えんといかんのか。……学校行くのにわざわざ髪とか整えるのは……面倒だなあ。」

「よくできましたー」

「うわ！？」

返事をした後、タツミに抱きしめられてしまった。羞恥プレイもさることながら、タツミの体が当たる感触が何とも恥ずかしい。

「おおー、熱いねえー」

「もうくっついちゃえよ」

「え？あの二人付き合ってるんじゃないの？」
付き合っていないよ！捏造すんな！

「にへへー」

それでもタツミは、何だかわからんが幸せそうだった。

第九十一話 酔狂（後書き）

名古屋に行くてくるんで毎日更新がたぶん止まります。夏休みだし……いいですね？アクセス数も増えませんし。

……多少愚痴が混じってしまい、申し訳ないです。

第九十二話 交渉手段

「ほら、タツミ、いい加減起きろ。もうお開きだぞ」

「……すう……すう……」

駄目だこの人。完全に酔いつぶれよった。

「三井、見せつけるのはもういいだろ？てか止めてください」

「そうだそうだ。それ以上いちゃつかれてると自制心が利かなくなる」

そう、よりによってタツミは俺にしがみついたまま熟睡してしまったのである。離れようとしても、意外と強い力で離れず。無理やり払いのけようとしても相手が女子である以上、そこまで手荒にはできない。大体女子が相手だから変なところを触るわけにもいかない。他の女子に頼んで離そうとしてももらっても、面白がって取り合ってくれない……と八方塞がりな状態なのである。男子は殺気立ってるし、俺に一体どうしろと言うんだ。俺が何か悪いことしたか？「全くけしからないねー（パシャパシャ）」

「ほんとだぞ、旦那。もつと周囲の視線というものを理解すべきだ（ジー）」

「お前らニヤニヤしながら写真とかビデオとか撮ってんじゃねえ！行動と言葉があってないんだよ！そもそもその写真とビデオ、何に使うつもりだ！？」

「脅は……友好的交渉のためだよ」

「温厚でない本音が口を突いて出ちゃったよ！聞いたかみんな？」

「……さあ？聞こえなかったなあ」

「聞こえなかったから、一枚俺も取っておこう」

「携帯で写真撮るな！おいタツミ！？やばいことになってるぞ！起きろ！このままじゃ大変な事態に発展しかねん！」

「……ふえ？」

起きたか！？

「……なおくん、気持ちいい……」
起きてねえ　　！

「辰美！。大胆発言だねー。「気持ちいい」なんて。あらあらまああ」

事態悪化！男子のボルテージも上がってるし！

「もうお開きだろ！？早く帰ろうぜ！」

「旦那があらさまに沈静化を図ってるけど、どうする？」

「これ以上からかかってるとー、本気で泣きそうだしねー。もちろん三井がー」

泣きそう、じゃない。もう若干泣いてる。

「よっこい正ー」

そのネタをわかるのはもう少し年齢層が上だ。

「……何をしてる」

「え？旦那の肩に石川さんを乗せてるんだけど？」

「それで俺にどうしろと」

「送ってってあげなよー」

「俺自転車なんだけど」

「飲酒運転を石川さんにさせるつもりか？」

「歩いたら結構家まで距離あるぞ」

「大丈夫。旦那の体力なら」

そついう問題じゃねえよ。

「ああそつそつー」

「送ることは決定なのか？そつなのか？」

「送り狼にならないようにねー」

「そつ思うなら別の女子に送らせろよ！」

第九十二話 交渉手段（後書き）

名古屋行ってきます。草津在住ですが、友達へのお土産はひこにゃんグッズ（バイトで彦根に行ったとき買った）。これでいいのでしょうか？

第九十三話 結局

「……本気で送らせる気か、お前ら……」

冗談であつてほしかつたが、クラスメイト達は本気だつた。相変わらず世界は俺に冷たいのである。

「僕たちは用事があるから」

「用事？」

そんな大切なものがあるならぜひ聞かせてほしいもんだ。

「二次会」

「……不公平じゃね」

「と三次会と四次会と五次会と六次会と……」

「なげえよ！お前らどれだけ遊び呆けるつもりだ！」

アホすぎる。

「……これから一時間以上時間をかけて、酔いつぶれて動けないタツミを連れて行かんのか……」

そうかと思うと、歩く前から随分と疲労感が出てしまう。現在時刻は十一時。……うん、下手打って警察にでも見つければ、補導されること間違いなし。洒落にならん事態にもなりかねないね。その可能性を皆に指摘すると、驚いたような反応が返ってきた。

「……ひよつとして、かなりヤバイ？」

「ひよつとしなくてもヤバイわ！全く考慮せんかつたんか！？」

馬鹿野郎ばかりか！俺とタツミの人生変わるぞ！

「……まあ大丈夫。手は打っておくから、とりあえず旦那は帰れ」

「……話聞いてたか？」

帰るのがやばいという話だ。

「俺は嫌だからな！」

「……くやしい……俺は無力だ……」

タツミを肩にかけた状態では、二次会に行くクラスメイトを追うこともままならず、結局一人取り残されることに。仲間意識ってもんがないのか！……それとも俺は仲間じゃないと？

「とりあえず帰ろう……俺にはそれしかできない……」

とどまつても捕まる可能性が否定できない以上、少しずつでも歩く方が建設的だ。……そうでも思わないことにはやってられない。後ろ向きな考えは悲劇しか生まない。

「……ん……」

「タツミ？」

「……なおくん……もう……離れないで……」

「どうした？」

「……ずっと……一緒に……」

悪夢にでも苛まされているのか。タツミの眼からは涙がこぼれていた。

「……あ……」

「気が付いたか？」

「……ここ、どこ？」

「宴会からの帰り道。お前今までずっと酔いつぶれてたんだぞ？」

「……ごめん、意識がなかったみたい」

「……まあ、構わんよ」

「今の間は何！？気になるよ！」

「知らないほうがいいことだ」

タツミがあの子の時のことを知ったら、発狂しかねん事態に陥るだろうし。

「……うつー、気になる……」

だったらもう二度と酒は飲まん事だな。その方がお互いのためだ。

第九十三話 結局（後書き）

名古屋から帰ってきて早々に書きました。友達んちでハイになつて
たんで、今、調子がおかしいです。誤字脱字があつたらご連絡を。

……こうまでして毎日更新を続けた作者を、誰か褒めてやってくだ
さい。

第九十四話 訳

「……とりあえず、涙ふけよ」

「……え？……あつ……ほんとだ……」

タツミ自身は涙が出ていたことに気づいていなかったようだ。慌てて涙をぬぐったが、その慌てた様子が余計に気になった。

「どんな夢見てたんだ？少しうなされてたぞ？」

楽しくなるための酒で、嫌な気分になったんじゃない本末転倒だ。これだから酒は……。未成年の飲酒はダメ。ゼツタイ。

「……言わないとダメ？」

「俺の横で泣かれてたんじゃ、俺が原因かと思うだろうが。ちゃんと説明しろ。出ないと俺の目覚めが悪い」

「……原因はなおくんだよ」

俺のせいだよ！

「……俺、何した？揺らし過ぎたとか？もしくは……ま、まさか変なところ触っちゃったとかか！？だとしたらすまん！」

気付かないうちにセクハラしてたとかなら洒落にならん！この状況（夜道で男女二人きり。しかも女性は酔いつぶれてて意識なし）では、俺に何の悪意がなかったとしても信用度ゼロだ！訴えられたら負けるし、何よりタツミに申し訳ない！一生消えない傷になったらどうしようもない！ここは謝る一手に尽きる！

「申し訳ない！悪気なんてなかったし、触ってしまったなんて気づきもしなかったんだ！信じてくれ、俺はそんな人間じゃない……」

「落ち着きなよ、なおくん。そんなんじゃないって」

「……なんだよ、それなら早く言ってくれ」

勘違いで寿命が数年は縮んだぞ、まったく。

「……あのね、なおくんがまたいなくなる夢を見たんだ」

「いなくなる？」

「昔、一度私の前からいなくなったじゃない？」

そうだな。親父の転勤でこの町に来たから。

「その時も物凄く悲しかったんだけど……今、また急にいなくなる夢見ちゃって……すごく悲しくなっちゃった」

……そうか。

「たぶん、私の中では昔よりも、なおくんの存在が大きくなってるんだと思う。……だからね、……突然いなくなるのはもう嫌だよ」何もなくても二年後にはバラバラになるだとか、クラス替えて疎遠になるかもしれんだろとか、笑い話で済ますこともできた。

……ただ、タツミの目が真剣で、かつ潤んでまたすぐにでも泣きだしそうからだろう。俺らしくもなく、真面目に、後から考えると悶絶するほど恥ずかしいセリフで答えた。

「……わかった。俺はもう二度とお前の許可なしには、いなくなったりしない。お前の傍にいて、少しくらいなら心の隙間を埋めてやる。これから……北高を卒業するまでに、俺自身でなく、思い出だけでその隙間が埋まるよう、濃厚な日々を送らせてやるから覚悟しとけ」

第九十四話 訳（後書き）

夏コミの資金ってどれくらい持ってたものなんですか？最終日だけの参加ですが。

第九十五話 拒否権

「……おい、直樹？今日も学校じゃないのか？」

「そうなんだけれども……行きたくない」

大学は今、夏休み。そのため、実家であるうちに滞在したままである。まだ数日は堅苦しい思いをしなればならんと思うと……ぞつとする。それは義人も同じだろうが。しかしその家にいるよりも今は学校に行つて、あいつに会う方が気が重い。

「ついにうちの愚弟も引きこもりか……将来の二ト候補生だな」

「……………」

突つ込みたいのは山々だが、それもしたくないほどに意気消沈していた。

「今日は……学校を休むかな……」

「そんなこと、私の目が黒いうちは許さんぞ」

「……後生ですから……」

「そんなに嫌なら理由を言ってみろ、理由を。正当な理由なら許してやらんこともない」

なぜ学校に行くか行かんかの許可を実姉に求めんといかんのだ。

「それはことわ」

「言え」

……拒否権すらないんですね、わかります。

「それは……かくかくしかじかで……」

「成程な」

「……わかつていただけましたか、お姉さま」

「昨日、辰美ちゃんに慰めの言葉をかけた。そのセリフが今になつて恥ずかしくてたまらなくなつた。顔を合わせるのなんて到底無理だ」と。そう言いたいわけだな」

「その通りでございます」

この羞恥心を言葉で表しきるのは不可能だが、だいたいの概要はこれでわかっただろう。これで姉ちゃんも許してくれ……

「ぶははははは！……！」

大声で笑うだと！？

「おもしれえ！青春真っ盛りじゃねえか！わたしや嬉しいよ、二人がそういうこそばゆいシチュエーションを作ってくれたことが！」

「一人で盛り上がってんじゃねえ！」

「そうだな！望にも連絡とって二人でこの感動を共有せんとな！」

「事態を悪化させようとするんじゃねえ！」

「（ガチャ）もしもし望？実はねー」

「早速かけてやがる！行動早すぎだろ！」

「ふむふむ……そっちもか」

そっちも？

「わかった。必ずこっちも学校に向かわせる……手抜きはないよ、心配すんな」

そう言っただけ携帯を閉じると、おもむろにこっちを再び向いて、こう言った。

「辰美ちゃん今日学校休むって。だから安心して学校行け……ぷっ」

「にやにやしながら言っても説得力ねえよ！明らかにめようとしてんじゃねえか！最後吹き出してたし！」

目の前で会話しておいて、成功すると思っただのか！？今日は絶対タツミと顔を合わせないからな！

第九十六話 誤魔化し

「……俺は無力だ……」

つい最近も呟いた気がしなくてもないセリフを、ため息とともに再び吐き出す。姉ちゃんに反抗したところで、肉体的にも精神的にも勝つことは不可能。そんなことは生まれてきてからの十五年で、十二分に染みついてしまっていた。悲しきかな、力で押さえつけられる姉弟関係。俺の意志など少しの意味も持たないのである。

「グッモーニーン！旦那！」

「……朝もはよから元気だな……いつもは朝弱いくせに……」

「そういう旦那はローテンションだな！どうした？何か石川さんとあったのか？」

「なっ……！何もねえよ！ところで今日はいい天気だな！」

「わーお、あからさまに怪しい。そんなことで話題をそらせるとでも思ったのか？」

「絶好の水泳日和だ。県新人も近いし、調整にはいいな！」

「旦那も結局県新人には参戦が決定したしな。石川さんも喜んでたし」

「うっ……」

なんだかんだで、今回の県新人大会には俺も登録されている。標準記録が楽に切れる種目にエントリーしたのが、その結果を生んだのだが……その詳細については別の話である。

「そこで石川さんの名前に反応するとか……旦那、体は正直だな？」
わざわざいやらしい言い方をするんじゃないよ。

「……何のことやらさっぱりわからんな」

「あ、石川さん」

「！？」

高速回避で姿を隠す俺。気分はスネークだ。
「スネークにしてはちっとも冷静じゃないな。あと冗談だから」

「冗談かよ！からかうな！」

「そんなに面白い反応してくれるとは思わなかったからな……まあ、その反応も当然か」

「なんだと？」

「青春だなあ……」

「貴様！？あのこっぴどく見えないシーンを見てやがったのか！？」

「俺が旦那のフラグ立てを見逃すとも思ってたか！」

「威張ることじゃねえだろ！二次会どうしたんだよ！」

「二次会とストーカーを天秤に乗せた結果、ストーカーの方に大きく振れたんだよ」

「だから仕方がないともいうつもりか！？お前のさじ加減じゃねえか！」

「反省はしていない」

「しろよ！」

「安心しろ。俺とイッシーだけだ。追っかけてたのは」

「むしろその二人が一番信用ならねえよ！」

情報の悪用にかけてはトップクラスの二人である。信用などきようはずもない。

「ビデオとか写真には撮ってないし」

「……フラッシュたかれた覚えはないしな」

暗かったのは確かだから、その点については心配していない。…

…奴らなら赤外線カメラとか持つてもおかしくないが……。

「テープレコーダーだけだから。よかったな、旦那。俺たちは紳士的で」

「紳士は盗聴なんてしねえよ！」

全国の紳士（俺含む）に謝りやがれ！

第九十七話 相談

「おはよう、イッシー」

「おっはー、杉田ー、三井ー」

「……おはよう、石井……盗聴したテープはどこにある……」

「三井ー？目が危ない人になってるよー？とりあえず落ち着こうかい？」

「貴様が盗聴したテープを渡したら、今すぐにも落ち着いてテープを叩き割ってやる」

「ちつとも落ち着いてないじゃないか、旦那」

「やかましい。基はといえば貴様らが昨日つけてきたのが悪いんだろっが！」

「あー、石川さんー」

「！？」

「きゃー、逃げろー」

「よしきたイッシー」

しまった！こんな古典的罠に二度も引つかかるとは！？平常心を失うにもほどがあるだろ俺！そして石井！男子がキャーとか言うな！気持ちが悪い！

そんなこんなで教室に辿り着いてしまった。……辿り着いてしまった。

「三井？テンションが低いな。予習でも忘れたのか」

「……原君か。今日ほど学校に来たくない日はなかった……」

「いや、予習（英語と古典）は終わってるんだが。」

「……？事情があるならあれだな。よくわからんけど、相談くらいなら乗るぞ？」

「ある人と会いたくないなら、どうすればいい？」

「その人がいる場所に行かなければいい」

「その場所が同じ学校の場合は？」

「しかも同じクラスとか？」

「そうそう（笑）」

「諦めな」

「そんな！？相談に乗ってくれるって言ったじゃん！」

「泣きそうな表情で言われても……」

「助けてくれよ、ハラえもん！」

「誰がハラえもんだ」

「何か道具で助けてくれよ！」

「……単語帳」

「効果は！？」

「勉強していることで現実逃避できる」

「現実逃避している間に来たらどうすんだ！」

「勝手に期待してそんなこと言われても……」

「……すまん。動揺してた」

「で？誰と何があつたんだ？」

……数少ない常識人（能力値は異常だから正確には違うかもしれない）である原君なら、まともなアドバイスをもらえるかもしれない。
い。

「実は……ってことがあつてだな」

説明する間、彼は何も言わずじつくりと聴いてくれた。……そして聞き終わってから一言。

「……今までと何が違うんだ？」

それだけ言うと、呆れた顔をして自分の席へと戻っていった。
……
……なんですと？

「……え……それだけ？」

アドバイスは？助言は？同情は？なんなのあの呆れた表情は？

「俺には味方がいないのか……」

そんなことをつぶやく間にも、ホームルームの時間は近づいてく

るのだった。

第九十八話 ぼろ酔い

本鈴が今にも鳴ろうとする時間。扉付近から、話声が聞こえてきた。

「あれー、辰美どうしたの？そんなところで突っ立っていないで中に入ったら？」

「あ……でも……」

「いいから入ろ？おはよー！みんな！」

副会長がテンション高く友達にあいさつをする。その後ろからおずおずとついて来ているのは……タツミである。二人が教室に入ってきたのと同時に、本鈴が鳴り響いた。ぎりぎりまで入ることをためらっていたらしい。

「今、旦那ご指名のお客様が御来店なさいました」

「……どこから突っ込んでよいものか」

今の俺に、その突っ込みどころ全てを突っ込めるほどの精神力はないのだが。

「本鈴鳴ったのに、何で健三さんは来てないんだ！」

「突っ込むべきところは、そこではない！」

健三さんが遅いのはいつものことだから！

……それが当然と思ってしまおう、俺たちを洗脳した健三さんはある意味凄い。最低限の、担任教師としての仕事くらいはしっかりしてください。

「旦那、石川さんと話とかせんのか？」

「……別に話をする必要はないだろ。用件もないし」

「それが本音か？素直になれよ」

「……単純に気まずいだろ。……あんなこと言っくんじゃなかった……」

「旦那も少しは酒に酔ってたんだな」

進められても舐める程度にしか飲んでなかったはずだが、その可

能性は大いにあり得る。そうでもないと自分の行動が信じられん。

「……くそう、こんなことなら前後を失うくらい豪快に飲んでおくべきだったか……！」

そうすれば、少なくとも今こうして悩むことはなかったわけである。……意識がないうちに何かを口走ったり、奇妙な行動をとっていたかもしれないが、それはそれとして。

「旦那が犯罪をしておけばよかったと悔やむ日が来るとは思わなかったよ」

犯罪と言われればその通りだけれども。それでも今は自責の念ばかりで心が埋まっている。それならいつそのこと　　と思うのも人情つてもんだらう。

「……はい、席についてください……うおっぶ」

「どうしたんですか先生？気分が悪そうですが」

「宴会で飲みすぎまして……うおぶ……朝から二日酔いが激しいんですよ……げぶ」

……。

「旦那はあなっただ方がよかったと」

「……すまん。それ以上は言わんでくれ」

人間、あそこまでは落ちたくないものである。

……お願いですから、仕事場（しかも学校）に二日酔い（今にも吐きそう）で来ないでください……。

第九十九話 舞台

今日一日は、ずっとモヤモヤした気分で過ごしてしまった。といっても授業に差しさわりがあるほどでもなく、勉強に励む高校生という観点からすれば問題はなかった。授業に集中している限り羞恥に苛まされることもない。休み時間の間もこれからの授業の予習に当たったので、タツミと話すということもなかった。今は放課後、部活がもうすぐ始まるのでプールに向かわなくてはならない。

「旦那、このままでいいのか？」

「……このままって何が」

わかつてはいるが、とぼけてみる。なんとなく自分が女子のことで乱されていると、認めたくなかった。

「わかつてるくせに」。石川さんのことだよ。部活でも顔合わすのに、仲たがいたままじゃいやでしょー？」

「そうそう、イッシーの言うとおり。早いとこ仲直りしとけて、そもそも仲たがいなんぞしとらんのだが。」

「そういう問題じゃなしに。まあいいからいいから」

「舞台は俺たちでセッティングしておくから。礼はいらないぞ？」

「……頼んでないのに……」

「じゃあー、水泳部の部室に行こうねー」

「は？練習に行くのか？」

「そうじゃなくて、石川さんはもう向かったぞ？」

「そうなのか」

意識して視界に入れないようにしていたので、タツミが教室からいなくなっていることにも気づいてなかった。

「何かと理由を付けて他の部員を追い出しとくからー。安心して二人きりで話し合いなよー」

「これほど信用ならない安心はないな」

「ど、どうして!？」

「お前らの今までの行動パターンを思い返してみろや！」

録画されたり録音されたりするのは当たり前。そんな頼れる親友たちに、俺は信用などという大層なものをしていない。……とか、これで信用しろという方が無理だ。

「……まあ、今回は録画も録音もしないぞ？」

「本当か？」

信用1%、疑い99%で聞き直す。

「本当だよー。たぶん」

たぶんってなんだ。確実にするなよ。

「でも旦那？その様子だと、話し合う気にはなつたみたいだな」

「……………」

義人のくせに鋭い。

「バーカ、俺が何年旦那の親友やってると思ってんだ。やるときはしつかり決めるよ」

「うんうんー、応援してるよー」

「……こいつらは」

「……ありがとな」

なんだかんだで俺のことを考えていてくれるんだな

「つきましては」

「ん？」

「この前のテープの販売について考えてるんだけどー、どう思う？」

「アホなことを考えてるんじゃないやねえよ！」

第百話 本気

義人と石井、二人の工作活動の成果だろう。現在、部室にいるのは俺一人。あの二人が言うには「あと少し待っててー。石川さん連れてくるからー」「気合いだ、旦那。気合。スピリチュアルパワー」とのことなので、もうそろそろタツミも来るだろう。ただ義人、気合いでなんとかなるなら苦労しない。

「……なおくん、いる？」

コンコン、とノックの音が響いた後、タツミの声が聞こえた。どうやら向こうの心の準備も整ったようだ。

「あ、あー、入っていいぞ」

「……失礼します」

うつむきながら入ってくるタツミ。やはりまだ、俺の顔を見るのには抵抗があるようだ。

「あー」

「……うん」

「そのー」

「……」

……駄目だ、言葉にならない。しかし、俺がなんとか言わないと話が始まらないし……。

「……なおくん」

「はい？」

悩んでいると、タツミから口を開いた。……震えながら。

「あのね、昨日は……その……送ってくれてありがとう」

「あ、ああ……」

「それとね、あの……昨日のあの言葉だけど……」

「待て。その先は俺が言う」

「！」

これだけタツミが勇気を振り絞ってるんだ。俺がここで黙ってい

てどうする！男だろ、三井直樹！……と、俺もなけなしの勇気を振り絞る。

「昨日は……俺も酔ってたみたいだ。あれは場の空気に流されて言っただけだ」

「……」

「ただし、だ」

「……？」

「場の空気に流されたとはいえ、思っただけのことを言えるほど俺は器用じゃない。……お前と……タツミと一緒に思い出を作っていたいと思っただけ、その気持ちは本当だ」

「……！」

「できれば、これからも今まで通りでいてくれると助かる。……とまあ……これだけだ」

今まで通り、一緒に笑い合う関係でいたい……それを言うだけにこれだけの労力が必要とは。自覚はしていたが、俺は想像以上のチキン野郎だな。

「……」

「どうした？タツミ」

「……やだ」

「なんだって？」

「今まで通りなんて……やだ……」

「……ってことは、もうお前には付き合いきれん？」

結構シヨクだぞ、それは。

「そうじゃなくて！私は……！」

「私は？」

「なおくんの彼女になりたい！」

「……！」

空いた口がふさがらない、とはこのことを言うのだろう。

「……す、すまん。もう一度言ってくれ？」

「……私は、なおくんが好きです。付き合ってください」

……まさか。タツミが、俺のことを好きだと？幼なじみで、俺が普通に話せる数少ない女子、石川辰美が俺のことを好きだと？

「……マジでか？」

「………」

顔を真っ赤に染めて俺を見つめるその様子に、嘘偽りはなさそうだった。

第一百話 乱入

「ちょっと待ったあ !!」

「うお!？」

バン!と大きな音を立ててドアが開いた。何!?何が起きた!?
「つてお前保護者じゃねえか!なぜ今、ここにいる!？」

「ある情報筋から、先輩の今の状況を聞いて飛んできたんです!」

ドアの向こうを見渡しても、あの二人（ほぼ100%、その情報筋）の姿は見えない。……ああ、確かにあいつらは盗撮も盗聴もしてないな。……余計な爆弾を投下しただけで。

「……いしかわせんばい？」

「な、何かな古木さん？」

保護者から妙に大きなオーラが発せられているように見えるのは気のせいかな。……気のせいじゃないな……。

「なーに先に告白してるんですかあ？」

「あ、あのね、落ち着こう?古木さん？」

「こーんなに落ち着いてるのに、どうしてそんなこと聞くんですかあ?それに……」

「そ、それに？」

「私が落ち着かなくなるようなことをした覚えでもあるんですかあ!？」

「ひい!？」

明らかに切れてるじゃないか。タツミが怯えてるぞ、保護者。

「どうして保護者が怒ってるんだ?タツミが……その……俺に……こ、告白したくらいで」

「動揺しまくってるじゃないですか!告白されて!」

「だからそれがなぜお前に関係がある!？」

「先輩のことが好きだからです!」

……。

「…………あ…………」
「……………」
「……ああ……………つ……!!……!?!?」
保護者の悲鳴が部室中に響き渡った。…………ドア閉めておいてよかつたなあ…………。

「い、今のなしです！ノーカン！ノーカウントです！」
「…………マジで？」
「マジですけど！マジですけど忘れてください！計画があ！？」
「計画ってなんだ」
「先輩メロメロ大作戦……………少しづつ私の虜にしていく作戦……………って何言わせるんですか！」
「…………わかった。これは夢だな。この俺がこの二人から告白されるなんて……………あり得ないよな……………。ハハ、今までそんなそぶり全く見せなかったし」
ドス。

「…………ぐお……………何しやがる……………」
みぞおちは反則だろ……………。
「痛いですか？」
「痛いわ！……………ということは……………?」
「……………うん……………」
「夢じゃないのかよ!?!?」
「そうですよ！」
「今ので余計忘れられなくなったわけだが」
「しまったあ!?!?」
「……………本気なのか？」
俺にいいところなんぞほとんどないんだが。
「……………はい」

数秒悩んだ結果、覚悟を決めたのか保護者も頷いた。

「私は先輩が……す、好きです。か……彼女にしてください！」

第二百二話 真摯

「ままた待て、冷静になれ保護者！」

「……なおくんが一番冷静になるべきだと思うな……」

この場にいる三人の中で、まだ一番落ち着いているのはタツミだろう。それでも余韻が残っているのか、ほほを染めたままだが。

「冷静でなんていられるもんですか！好きな人に告白したんですから！」

確かに、顔真っ赤、手をぎゅっと握りしめた様子からは冷静さを感じ取れない。ほっといたらこのまま蒸発してしまうんじゃない？というような興奮の仕方だ。

「落ち着くには……そうだ、深呼吸！深呼吸をするんだ！保護者、息を吸え！」

「落ち着く必要なんてないです！いいから先輩は、私の想いを受け止めてください！」

「わ、わかつとる！」

こんなこと人生で初めてだから、少しばかり気を取り乱したただけだ！俺はすぐにも冷静になれるぞ！

「……なおくんこそ深呼吸しなよ……」

数度、深呼吸をしてどうにか冷静さを取り戻した俺。いつものクールな俺に少しは戻れた……はず。

「……タツミも保護者も、正気なんだな？」

「……うん……」

「……はい……」

この二人とはいえ、さすがにこんな大がかりなドッキリは仕掛けないだろう。たとえ義人と石井が裏で暗躍しているとしても、だ。あいつらは人の心を弄んで、後に禍根を残ることをやらない。あく

まで皆が笑って終わりを迎えられよう図るだろう、

「……つまり、俺はこの告白に答えなければならんのか……」

「べ、別に今すぐにじゃなくてもいいんだよ？ 私のこの気持ちを知っておいでくれたら……」

また恥ずかしさが込み上げてきたのか、タツミは答えを急かさなかった。もしかすると、怖気づいたのかもしれない。

「私は早く答えが欲しいです！先輩！女性を待たすものじゃないですよ！いいからイエスかノーかで答えてください！」

まだ顔が赤い保護者は、タツミとは逆に、答えを急かしてきた。時間がたてば、それこそどうかなってしまいそうだからだろう。

「……正直な気持ちを言うべきだろうな……」

この二人の真摯な思いに応えるよう、口を開いた。

第百三話 答

「……悪いが、現時点で俺は誰とも付き合う気はない」

その言葉を発した途端、二人が目を伏せたのがわかった。しかしそれには構わず、言葉を続ける。

「理由があつてな……女子と付き合うとか、そういう関係を持つことが怖いんだ」

それは小学校の時に生まれたトラウマ。いつかこれが癒されるのかも、ずっと女子に怯えを持ったままであるのかもわからない。

「……なおくん、その理由は……？」

「すまんが、言えん。これは誰にも言つてないことだから、聞いても無駄だ」

「杉田先輩にも、ですか？」

「……義人にも、だ」

義人になんて絶対に言うわけにはいかない。これは墓場まで持つて行く秘密だ。

「……まあ、そういうわけで俺は誰とも付き合うことができないんだ。お前らの気持ちは嬉しいんだが……応えられない。本当にすまん」

俺の数少ない（というか実質二人のみ）女子の友達をこんなことで失うんだな……と寂しい思いに囚われていると、保護者がおもむろに口を開いた。

「……先輩、先輩には確か彼女がいた経験はないんですよね……？」

「ああ。告白されたのだからこれが初めてだ」

「……それでもって、私たちを嫌いだとか、他に好きな人がいるとかでふったわけじゃないんですよね？」

「ああ。むしろ好きな女子を三人選べと言われたら、確実にお前らは入るな。それだけお前らは……タツミと保護者は俺にとって大事なんだ」

……む？保護者の目がいきいきとし始めたように見えるのは俺の目の錯覚か？

「それなら……」

「ん？」

「私が諦める必要なんてないじゃないですか！」

……はい？

「いや……だつてだな……？俺がこれから女子を苦手としなくなる保証なんてないんだぞ？他に好きな人を見つけた方が……幸せになれる」

「そうですね。石川先輩はそうしたほうがいいですよ。その方が賢い選択です」

「……え？」

「保護者は！？」

「私が先輩以外を好きになるなんてありえません。今の私のポジションにいれば、先輩の事情が解消された時、彼女になれる可能性が一番高いんですから、このまま……もしくはこれ以上の存在になつてみせます！」

「お前馬鹿だろ！？保証なんてないぞ！？」

俺のトラウマが消えるかなんて……本人でさえわからないんだから。

「馬鹿でいいんです！先輩を好きになつた時点で十分馬鹿だと承知してますから！」

それを本人の前で言うのは、どうかと思うけどな！

第百四話 始まり

一方、タツミは保護者とは違い、すぐには動かなかった。利害を計算でもしているのか？だとしたら諦めるのも時間の問題だろう。

「タツミ、お前はこの保護者^{バカ}と違って聡明だろう？だから、新しい恋愛を始めた方がいいことがわかるな？」

「……なおくんは、私のこと好き？」

「な、何って？」

「だから……好きか嫌いかのどっち？」

……二者択一かよ。

「……まあ、それなら好きに入るな。ただ、恋愛感情を持つての好き、ではないぞ？義人を好きとか、そういう友人としての好き嫌いだ」

誤解を生んでしまっではいけないと思い、付け加える。しかしそれでも、タツミは意思を変えようとしなかった。

「……それなら、これからなおくんが私に恋愛感情を持つ可能性も十分にあるよね？」

「……お前ら、俺の説明聞いてたか？」

「説明を理解したからといって、はいそうですかと違う人を好きになる……そんなことなんてできないよ」

……そういうものか？

「それに……」

ちらりと保護者の方を見てから、さらにタツミは続ける。

「古木さんよりも、私の方がこれからなおくんと一緒にいる時間は多いしね」

「ああーっ！そういうこと言っんですか！宣戦布告と受け取って構いませんね！？」

「別にいいよ？私の方が有利な状況なのには変わらないし……正々堂々と争おうね？」

「自分の方が有利だといっておきながら、正々堂々とはどういう見ですか！だからといって退きませんけどね！受けて立ちます！」

……俺の意志を無視して話が進んでいる……。

「なおくん、今度から一緒に学校に通おう？なにせ一緒の学校に、しかも同じクラスにいるんだから！」

「先輩！約束覚えてますよね！私に勉強を教えてくれるって！休みの日は一緒にいましょうね！」

「なおくん、同じ水泳部だもんね！一緒に練習して……一緒に帰ることだってできるね！」

「先輩、私が今度からお弁当を作ってきましたよ！？料理ができる女性ってよくないですか！？」

「むむむ……」

「うう　　っ」

アピール合戦に続き、睨みあいまで始まってしまった。誰か！誰かこの事態を収束できる人物はおらんのか！？

「なおくん！」

「先輩！」

「はいなんでしょう！？」

おおっ、あまりの迫力に、どもってしまったじゃないか。

「絶対に振り向かせてみせるからね！」

「先輩を私の虜にしてみせます！」

……闇のゲームとはこういうことを言うんじゃないだろうか。

こうして高校一年の秋、俺は二人の女子に奪い合われることになったのだった

第百四話 始まり（後書き）

俺たちの戦いはこれからだ！……みたく終わろうかと考えたのはここだけの秘密です。でもとりあえず二部は完……かな？あとは番外編を書いて……そのうちまたアンケート取ります。

番外編 文化祭

これは三井が告白された日より以前 北高文化祭当日の朝の話である。この日保護者こと古木瑠璃は、親友である山本岬（健三さんの娘。吹奏楽部）と談笑しつつ、北高へと向かっていた。

「それでね、岬？先輩ったらおかしいんだよ？私がいくらアピールしても全然気づいてくれなくてね？鈍感もここに極まれり！って感じで」

親友にほとんど不満のない私ですが、この恋愛話の長さには閉口します。恋は人を盲目にするといいますが、ここまで極端なものも困りものです。

「はいはい、その愛しの三井先輩とやらの話はいいですから。私には接点ないですし、その上興味ありませんから。もっとも」
「もっとも？」

「そのひどい先輩のことを語る、ルリの顔のにやけっぷりは見る価値が十分にあるのですが」

いつもはクールビューティーに分類されるであろうルリも、この表情では同一人物には見えません。

「！？そんなににやけてる！？」

「ええ。それはもう……口の端は上がりっぱなし。頬は赤く染まる。幸せそうな様子で結構です」

これはこれで、可愛いことには可愛いのですが。ルリに告白した男子（全員辛辣な言葉で撃沈させられた）はこの様子を見たらどう思うことでしょうか？

「……ちよつと自重しないと……」

「その言葉も何度聞いたことか。そもそも私の記憶では、卒業して同じ高校に入るまでは会わない、そう熱弁をふるっていたはずす

が？」

「うう……仕方ないじゃない！私が暴漢に襲われているところを、颯爽と現れた先輩がボツコボコにのして、「大丈夫か瑠璃？怪我はないか？」と優しく解放するなんていう劇的な再開を果たしたんだから！惚れ直しもするし！会いたい気持ちを抑えきれなくなるのも当然だし！」

「前回とまた話が違ってますよ。脚色しすぎるのはどうかと」

「いいの！そんなに違わないから！」

これだけルリをおかしくする三井先輩には、少しばかりの嫉妬心を抱きます。噂によればうちの馬鹿親が担任をしているそうですし、ルリと一緒に見に行つてやるのもいいかもしれません。

「ルリ？今日は一緒に文化祭を回るのですか？」

「うーんと、先輩の出し物に行くまでは一緒に回ろう？ただその後は……」

「ああ、愛しの三井先輩とデートですね？」

「で、デートだなんて！？まだ約束も取れてないし！？」

「手はずは整っているのでしょうか？杉田先輩とやらが暗躍しているそうじゃないですか」

「……杉田先輩は事態をややこしくする天才だから、まだ何が起くるかわからないんだよね……」

「中学にもいくつかの伝説が残ってますしね」

ある意味人物だったようです。惜しむらくは誤った方向にしかその力を発揮しなかったことでしょうか。

「まあいいでしょう。その時間からは別行動ということで」

「ありがとね」

お礼を言われる筋合いはありませんよ。自分の意志で執事喫茶に行くつもりではありませんし。ついでにルリのでれでれな様子でも眼に焼き付けておきましょうか。

番外編の続き 遺憾の意

「よし、このクラスの出し物に行こうか！」

「そうしましょうか。楽しければよいのですが」

見れば、北高劇場　　本音と建前　　と書いてあります。高校でもこのような出し物なのですね。中学と大して変わらない気がします。

「はい、開場まであと五分です！押さないでくださいー！」

……なぜあの人はチンパンジーのお面をつけているのでしょうか？若干不安が生まれてきました……。

「総理！なぜあの国の側から情報が来た時点で国民に発表しなかったんですか！」

「えー、毒餃子事件の発表を遅らせたのは、捜査上支障をきたす可能性があったからですな　　」

（あっち側からの要請があったからに決まってるだろうが。オリンピックが失敗したら困るあっちの事情と複雑な政治事情が絡んでんだよ。少し考えればわかるだろうが。馬鹿か）

「被害者に対して不誠実だとは思わないんですか！」

「えー、被害者には真実をはつきりさせることが一番重要だと考えておりますですねー」

（たかが数人のためにあんなでっかい国の心証を悪くしろって？冗談じゃない。そんなことしたらお前らも困ったことになるとなぜ理解できんかな？これだから低能の人間は……）

「弱腰外交といわれていることにに関して、何か一言を！」

「われわれとしては最善の対応をしておりますですね、これは国民の皆さんに理解していただくより他はないかと」

（特に資産のない、食料自給率も低いこの国が生き残るために、他国と敵対関係になるわけにはいかんだろうが。この記者もわかって聞いているんじゃないだろうな？支持率下げて総理変えたところで、誰も改善なんかできやせんよ）

「年金問題について、総理のお考えは！？」

「厚労省の役員が全力で対応しております。ご理解いただきたい」

（あーもういい加減に会見終われよ。本音と建前が違うことくらい、少し知能があればわかるだろ？酒飲みてー）

……チンパンジーの仮面を付けた人の本音と建前を話しわけ、黒い劇でした。劇と呼べるかどうかもわからない、登場人物の少ないものでしたが。……いいんでしょうか、こんなこととして？教師も何か文句をつけましょうよ。あくまでフィクションと言い張ればいいんでしょうか？

「岬、面白かったねー」

そのブラックユーモアあふれる劇を面白いという、我が親友の感性も素晴らしいですね。ネジがどこかゆるんでいるのでしょうか？

「……確かに興味深いものではありましたが」

さすがはうちの能天気親が勤める環境です。この学校に来年通うかもしれないと思うと……楽しみで夜も眠れなくなりそうです。

「……ニヤリ」

「岬、不気味だからその笑い方はやめとこう」

失敬。無意識に顔に出てしまいましたか。

番外編の続きの続き

「じゃあ岬、私はあの執事喫茶に行くから……」

「愛しの三井先輩に会いに行くのでしょう？どうぞご自由に」

すっかりおらしくなってます。これがあの先輩の前に行くと、また変わるのですから不思議です。まあ、期を見計らって私も行くつもりですが、それを言う必要もないでしょう。

「い、行ってくるね」

「いつてらっしゃい」

それだけ言うと、ルリは「いらっしやいませ、お嬢様」と声がする部屋へと入っていきました。ところで、メイド喫茶や執事喫茶はこのどなたが考えたんでしょうね。こんなことを考え付く人はよっぽどの天才か、もしくは年中脳がピンク色に染まっている人なのでしょう。後者の可能性が高いと私は考えますが。

「……三分……これくらいたてばいいでしょうかね」

ルリは緊張で周りを見渡す余裕もないでしょうし、問題はうちのKY親ですが……曲がりなりにも教師です。クラスの出し物に常顔を出すはずはないでしょう。……ましてや常にクラスにいるなどと……職員室にいるに決まっています。ここにいるはずがありません。見回りをしているか、職員室にいるに決まっています。ここにいるはずが……

「いらっしやいませ、お嬢様！」

「やあやあよく来ましたね、わが親愛なる娘よ」

「仕事をしてください」

……そんな気はしてましたけど。なにせ私の親ですから。

「御注文をお聞きしてもよろしいですか？」

「別の人に聞きますから帰ってください。お呼びでないです」

これで本当に教師なのでしょうか。仕事をたしているとは欠片も思えないのですが。

「ご注文は？」

「……アイステイーをお願いします。ストレートで」

「かしこまりました」

譲る気がないらしいので、仕方なく妥協します。意地の張り合いをしても時間の無駄ですし、こうなった父が譲らないことはよく理解しているのです。

「ふむ……」

ルリの方を見ると、赤面しながら三井先輩をデートに誘っていました。どうやらこちらには気づいていない様子。微笑ましい雰囲気壊すほど野暮ではないつもりなので、追跡はやめておきましょう。心の中で親友の健闘を祈ります。

「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ」

持ってきたのもやはり父。しかし提供が終わると他のテーブル席に移動し、店内の様子を観察しているようでした。

「さて、こうまでしているからには何か理由があるのでしょうかね……」

スプーンの置いてあるナプキンの裏を見ると、案の定父の字でメッセージが書いてあるのです。やれやれ、目的は何なのでしょう……

番外編の終わり 事件簿

「クラスの見張りを手伝ってほしい、ですか……」

どうやら父は、ただ単に仕事をさぼっていただけではなかったようです。このような女性が多く集まる出し物。事件が起こる確率も高いとらんでの自主的な行動のようです。自分ひとりで学校全体を守ることは不可能でしょうが、クラス一つ、自分の受け持つクラス一つならば状況すべてを把握できると考えたのでしょう。傲慢といえは傲慢な考えなのでしょうが、父はそれを私以外には明かしていない様子。そこで私に念のための補償として、執事喫茶に入ってきた人数をカウントしておいてほしとのことです。

「このクラスに関わりのない実の娘に手伝わせるとは、困った父親ですね」

手伝ってくれたらお礼として何か一つ願いをかなえてくれるそうです。しかしながら、あれのできることなどたかが知れています。

「でもまあ、手伝うことにしましょうか」

やることもなく、暇であることが理由の一つ。そしてもう一つの理由は、これが私の親友の助けになる可能性があるからです。ルリはあの先輩が幸せなら、幸せになるでしょうからね。

「瑠璃さん、あの男が入ってきたのは何時でしたか？」

「十二時半ですね」

「それからその時点で何人女子客がいたかわかりますか？」

「えー、三十一人です」

「その後、あの事件が起こるまで何人が入ってきたかわかりますか？」

「このメモにある通りです」

私は父ほど記憶力がよくないので、メモを取って数えておきました。……まあ、父の能力が異常なだけで、私も上の中くらいの能力はあると思うんですけどね。

「ふむ……私の記憶と一致してますね。これで確証が持てました。ありがとうございます」

まさかこんな事件が起こるとは思っていませんでしたが、父の保険が功を奏したのですね。最悪の事態は免れたようで、よかったです。

「それでは私はこれから始末してくるのですが……何かしてほしいことは決まっていますか？こうなった以上、大抵のことはしてあげますよ」

そうですね。

「家以外で私の周囲十メートル以内に近寄らないようにしてください」

父の寂しそうな、とても切ない表情が見ただけでも十分な報酬といえるでしょう。少なくとも私にとっては。

「あつ、岬！いらっしやいませ！」

「……………」

店内でもう一服しようと戻ってきたら、ルリが執事服で働いていました。……成程。執事喫茶とはいいものですね。実感しました。

閑話休題とショートコント

この小説を読んでくださっている読者さん、いつもありがとうございます。駄文生産者でええじゃないか作者の、とりえなしです。話が一段落したところで、読者さんに質問をしたいと思います。質問の内容ですが、下記の通りになります。

これからこの小説を続けるにおいて、コメディと恋愛の比率はどのくらいがいいか

今の文章量（一話あたり千字以上二千字以下）で毎日更新を続けるか、更新のペースを落として一話あたりの文章量を増やすか

タイトルを新しくする（ええじゃないか そのさん など）か、そのに のまま更新を進めるか

どのキャラの出番を増やしたほうがいいのか（好きなキャラは誰か）

他にも何か要望があるようでしたら、それも書いてくださるとありがたいです。もちろんすべての要望にこたえられるわけではありませんが、できる限りのことはしたいと思います。ご意見がそれなりに集まるまで、ええじゃないかの更新はお休みますので、ご了承ください。でも、前回のよう一日で十分な量のご意見が集まるようでしたら、すぐに連載再開します。

それでは最後に……この小説を読んでくださってありがとうございます。駄文ではありますが、これからもがんばりますのでぜひ読んでやってください。

文字数が足りないので、ショートコント。

「旦那旦那」

「なんだ義人。鬱陶しい」

「魔王ごっこしよう。よい……アクション！」

「拒否権なし！？魔王ごっこって主役が魔王かよ！普通勇者だろ！
？しかもスタートはええ！」

「ふはははは、世界は我がアモーレ軍団が乗っ取ったー」

「ずいぶん陽気な軍団だな！魔王らしくねえ！」

「……………」

「どうした？」

「……旦那、出番出番」

「……そうはさせんぞー、お前はこの勇者が倒してくれるー」（超棒読み）

「旦那、そうじゃないだろう」

「すまん。あまりにもくだらな過ぎて、演技に身が入らなかった。
小学校の学芸会並みのむなしさすら感じたもんでな」

「旦那のセリフは「へへへ、そうですな魔王様。あなた様にかなう
者などこの世界に誰一人いやしませんぜ」だろ」

「ツツコミどころはそこかよ！？俺下っ端役！？しかも性格悪いこ
ますり野郎かよ！」

「不満か？」

「不満じゃ！大体これじゃ勇者役がないだろうが！魔王野放しか
よ！」

「別にそれでいいんだよ」

「なぜに!？」

「これは 魔王^ごっこ だからだよ」

「そういうことかよ!」

ぜひアンケートにご協力ください。

新人戦1（前書き）

……意見が……集まらないので……場繋ぎです。早く続きを書け！
という方は意見をください。意見が集まるまでは不定期になります。

新人戦 1

それは夏休みも終わりにさしかかった、ある晴れた日の午前中のことだった。いつも通り、小倉さんの鬼畜メニユーに耐え忍び、ようやく僅かな休息を手に入れた。ふう……頑張ったな、俺。もっと評価されるべきだと思うな、実際。

「三井」

む？小倉さんが手招きしている？

「なんですか？もう上がっていいとか？」

「旦那、まさかそんなわけないだろう」

まあ、俺もそう思うけど。少しくらい希望をもったっていいじゃないか。たとえ踏み躪られることがわかっていても。

「三井、お前新人戦は――200メートルバタフライ《にバタ》で出る」

……希望を蹂躪するどころか、深く重い絶望までサービスしてくれるとは、小倉さんとはなんと予想を裏切らない人なんだ。

「……なぜですか？」

「いや、200mバタフライの標準記録が妙に甘いからな。三分三秒ならお前でも切れるだろ」

「スタミナが持ちませんよ！」

「旦那、中学時代はバツタの選手だろ。しかも200mの「義人は黙ってる！これは俺の問題だ！」

「中学時代の記録でも楽勝に県新人大会に出れそうだねー」

「何で中学の頃よりもハードルが低いんだ！？」

恐るべし、愛知県水泳連盟（高校の部）。中学の頃は全身全霊を込めても出場が叶わなかった県の舞台に、こんな形でまた挑まされ

ることになるとは思わなかったぜ。なのに今はちつとも嬉しくないから不思議！答えはこれからの練習が億劫だからとはつきりしてるんだけどね！

「と、言うわけで三井はこれからバツタの練習に入れ」

「腰痛めますよ！」

「なあ、俺はどうなるんだ……？」

「義人は常人以上のスタミナと体の頑丈さがあるから大丈夫なんだ！俺は一般人！200mもバタフライ泳いだら疲れて溺れる！そして壊れる！」

「……だから中学時代は200mバタフライの選手……」

「義人は黙つとれ！」

「理不尽だ！」

「三井、これは決定事項だ。三井はバツタの練習に励め」

「やーいーやーいー、三井ざまーみろー」

「……石井うぜえ」

「ああそれと石井」

「はいー？」

「お前は100mバタフライな^{いちバタ}」

「……」

あ、石井が固まった。

「……じよ、冗談ですよー？そんなー、バツタなんて泳いだら繊細な僕の体はずたずたにー」

「決定事項だ」

やーい石井、ざまーみろー。

そうして俺と義人と石井の三人は、揃ってバツタの練習（とにかくきつい。疲れる。下手打たなくても体壊す）に励むこととなったのだった。

新人戦2

……ああ……俺はもう駄目なのだろうか……。体に力が入らない。浮遊感すら感じるこの状況は、現実の世界のものとは思えない。むしろ……もうここは違う世界なのだろうか……？もし、ここが死の世界なら悪くはないな……。

「よし、休憩は終了だ。次は200メートルを自分の種目で五本、ベスト+十秒以内で泳いで来い！」

……………。

「おい、旦那？水に浮かんでるのはいい加減終わりにして、練習に入るぞ？」

ぶくぶくぶく。

「ああ！イッシーが泣いてる！水の中でもわかるほどに！」

「……ううー、帰りたいー……」

「ほれ、バッタ勢も早く始めろ」

もう嫌だ……。

バッタの練習も取り入れることになってから三日目。今までクロールばかり泳いでいた俺と石井は、日に日にやつれていった。特に石井の疲労感とは相当なようで、いつもの陽気さは影を潜めていた。今日に至っては授業が終わるとともに、ダッシュで校門に向かった（石井は徒歩通学）のだが、張り込んでいた小倉さんに捕獲され、半泣きになりながら連れてこられたほどだ。気持ちには痛いほどよくわかるのだが、一人で逃げるのはよくない。嫌なことは皆で一緒に苦しみうではないか。

「なあ、義人？」

「俺はいつも通りのメニューだし、嫌というほどのことでもないんだが。……もちろん疲れるけど」

くつ、義人に同意を求めたのが間違いだったか。かといって石井はもうしゃべることすら致命傷になりかねんし……。どうすればいいんだ!?

「だから早く泳げ」

「旦那も壊れてきてるな、確実に。テンションが異常だし、尚且つ体に力を入れようとしないうし」

……これをいつもこなしている義人は凄いと思った。改めて。

そんでもって本番（市内新人水泳大会）。

「……わーお」

200m泳ぎ終え、電子掲示板を見ると、俺の名前とタイムの横には標準記録突破を示す記号がついていた。記録を見ても、自己ベストを塗り替える好タイムだとわかる。

「よくやった、三井」

「小倉さん、ありがとうございます。これが練習の成果ですね？」

なんだかんだで、県大会のプールで泳げるのはかなり嬉しい。このために厳しい練習をしたのだと思えば、少しは報われた……と思っていたのだが。

「いや。違うな」

「え？」

「単にお前の体が成長して、出来上がってきたからだ。たった数日の練習でそこまでタイムは伸びん」

「……………」

言われてみればその通りだが、何か釈然としない。そこは「練習の成果だな。これからも努力を続けろ」くらい言ってください、教師なんですから。

「……………」

「よかつたな、石井。県に出れて」

「……………またここから数日ー、あのメニューやらないといけないのー……………」

「……………」

「……………」

「おーい、二人とも、よかつたな……………っておい！？何さめざめと泣いてんだよ！？不気味だ！」

……………本当の恐怖は、ここからなんだな……………。しくしく。

新人戦3

人生初めての県大会（ただし新人戦）のプール。中学校時代には望んでもかなわなかったこの舞台に、俺は立つことができている。

……感動だなあ。この一ヶ月弱、小倉さんに苛められていたのが報われる瞬間だ……と、召集場所感慨にふけていたのだが、それだけでも結構な時間が経っていたらしい。係の人が俺たちの組（200mバタフライ組目）を呼びに来ていた。

「旦那、出番だぞ」

「おお、悪い。サンキュ」

義人（200mバタフライ二組目のため一緒に召集場所にきた）に教えられ、ようやくそのことに気付いたので、高揚する気分を何とか静めながら飛び込み台の後ろまで歩いていったのだが……。

「きゃー！先輩ー！ふあいとおーっ！！」

「なおいーん！がんばってー！」

大声で応援する二人の女子のおかげで赤面することになった。なにこれ？公開処刑？

「うわ……恥ずかしい……」

くそ、義人が送り出すとき妙ににやにやしてやがったのはこれか。応援するにしても、もっと他にやり方だってあるだろうに……どうして他の北高メンバーが見当たらないんだよ。二人が浮いてるじゃねえか。そしてその二人の声援を受ける俺はもっと浮いた存在じゃないか。……ああ、隣の人が何とも言えない表情なのが気になる。てかいつそ無視してくれよ。頼むから。君も「県大会は参加すること意義がある」入賞は絶望的な仲間だろう。……そんな仲間に勝手にされても困るか。

「続いて、200mバタフライ組目の競技を開始します……」

ああ、やっと始まる。出たいと思ってたはずなのに、今では早く終わってほしいと思うまでになったじゃねえか。情緒不安定な人か、

俺は。

「フレー！フレー！せ・ん・ぱ・い！！」

「なおくんー！がんばってー！」

……むしろ帰りたい。

県で十五位。これが今回の俺の記録となった。とはいえ、標準記録突破の人数が少なかったがゆえのこの順位であり、悪い言い方をすれば下から三番目。自己新記録を出すこともなく、無難な記録で終わった。

「……やはり北高祭で練習量が激減したからか……」

「そうだねー。みんな軒並み成績が落ちてたからねー」

「まあ、今年最後の大会が終わって、これからは多少楽になるだろう部員で集まって、がやがやと雑談をしていると。」

「当然明日からは陸トレだ。ノルマは腕立て腹筋背筋スクワットなど、少なくとも百回ずつだ」

「……」

「ああ、心配せんでも、メニューはこれだけじゃないからな。期待してまっとな。解散」

……相も変わらず絶望のどん底に陥れてくれやがりますね、この教師は。こうして翌日からの恐怖に苛まれつつ、県新人大会、今年最後の水泳大会が幕を閉じたのであった。まる。

「いやあああー！」

あ、石井が発狂してる。ドンマイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2590e/>

ええじゃないか そのに

2010年10月8日13時29分発行